
Heretic

Hiyoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Heretic

【NZコード】

N1437T

【作者名】

Hiyoko

【あらすじ】

憂鬱な現実から逃避し、VRMMOゲーム『Arcana Knights Online』の中へと潜り続けた主人公。防御ステータスを捨て、成長ポイントを火力に振り分けて特化させた紙装甲の彼は、皮肉にも他のプレイヤー達から“不死身”と呼ばれ揶揄されていた。

彼はある日、ゲーム内で一週間に一度行われる攻城戦の後、とある出来事が原因でプレイ中のVRMMORPGに似た世界へと迷い

込んでしまつ。

自身の知つてゐるゲーム世界ミドガルズと比べ、栄えたモノもあれば衰えたモノもあるその異世界アスガルズで、主人公が偶然知り合つた浮浪児を鍛えつつ、他の冒険者達と臨時チームを組んで迷宮の探索、冒険等をして行く異世界物語。

魔法使い系の最強ノチート物です。

この小説には、おっさん、少年が多分に登場致します。稀にシヨタつ子に抱き着かれたりと、Bし臭いギャグシーンが含まれる回がありますので、苦手な方はご注意下さい。

ステータス説明（前書き）

質問が多かったのでステータス説明だけぞっと書いて見たり。

そのうち別ページに移動すると思います。

ステータス説明

そのうち、ちゃんと作ろうと思いますが、今更『AKO』ステータス説明等。大雑把な物なので齟齬が生じるかも……大体こんな感じなんだな。と、雰囲気が伝われば幸いです。

Str： 攻撃力や筋力に影響。

ウェストポーチ内のアイテム重量制限にも影響する。（インベントリ内は制限無し）アイテムは重量設定があるので最大所持量と、現在所持量の割合に因つて攻撃速度、回避率、移動速度、自動回復量増減。

そして、最大所持量の90%を超えると攻撃不可、HP継続ダメージ発生 等のデメリットが発生するので大事な能力値。

武器の効果を最大限に発揮するには武器に設定された一定の値が必要。（足りなければ攻撃速度、威力減）弓を扱うにも一定の筋力が必要な為に、魔導師系のプレイヤーもサブ武器用に必要最低限振っている者が多い。

Strを上げる事に因つて解禁されるスキル 各種攻撃スキル、種族ダメージUP、攻撃力上昇等。

Vit： 最大HPや防御力に影響。

微量だが、毒、麻痺、出血等の物理的な状態異常耐性にも影響す

る。

Viitを上げる事に因つて解禁されるスキル 最大HP上昇、
防御力上昇、種族ダメージ減、物理系状態異常耐性上昇等。

種族ダメージ減系は、対応する魔物から致命傷を受け続けなければ上がらないので熟練度上げは茨の道、マゾ以外お断り。頑張れば頑張る程報われるスキル。

DeX： 射撃系スキルの攻撃力、命中率、詠唱速度、盗み、
製造スキルの成否に影響。

DeXを上げる事に因つて解禁されるスキル 命中率上昇、攻撃軌道視覚化、詠唱短縮、盗み、各種製造スキル等。

Agi： 回避率や移動速度に影響。

Agiを上げる事に因つて解禁されるスキル 回避率上昇、移動速度上昇、攻撃速度上昇、隠密行動系等。

Int： 最大MP、魔法、属性攻撃ダメージ、妨害系スキル等の成功率に影響。

Int上昇に因つて解禁されるスキル 各種魔法、属性攻撃等。

武器には魔力を攻撃力に変える素敵魔装備等も存在する。
そちらの攻撃力はInt 依存。

Rst： 魔法耐性に依存。

微量だが、呪詛、沈黙、恐慌等の精神的な状態異常にも影響。

『AKO』は魔法を使って来るモンスターも少なくは無いので意外と重要。

Rst上昇に因つて解禁されるスキル 魔法耐性上昇、属性耐性上昇、精神系状態耐性上昇等。

やはりV.i.tと同じく耐性上昇系スキルは致命傷を受けないと熟練度が伸びないので上げるのは苦労する。

二つのステータスが一定になるのが解禁条件のスキルとかも有りますが、細かい所は割愛します。私の脳が爆発します。

3話まではプロローグ的な話が続きます。
初めての最強物？

理不尽だ。

俺の二十とそこらの人生に於て、今まで何度この言葉を吐いたか
とても数えきれた物ではないが、今回の出来事は今までのそれを
軽く笑い飛ばせる程に常軌を逸脱している。まさに悪夢だ。

「

側頭部に鈍い痛みが走り視界が揺れ、身体がふらつく
俺がこんな目に会わなきやならんのだ。
なんで

VR MMORPGと言つものをご存知だらうか？

昔から空想のうちにしか存在しえなかつた物だが、人類の技術の
進歩と言う物は留まる事を知らず 20XX年某日、ついに仮想
現実体型ゲームつつーものが実現化されてしまったのだ。

俺がガキの時分だつた発売当初こそ、VR機器は高額な上に巨大
で、とても一般人に手に入れられる代物ではなかつたが 徐々に
小型化されるに伴い値段も安価な物へとなり、俺は全国の黒い人達
御用達の日焼けマシン程のサイズになつた筐体を購入した。

高かつただろうつて？ 勿論無理して買つたのさ。正直俺は、仮

想現実に逃げ込み現実を逃避しなければやつてられなかつたのだ。

高校時代からコツコツとバイトで百万を貯金し、高校を出てから船舶の電気工事士として指導者からのスバルタ教育の元、海上巡視艇から軍艦 果てにはLCA（ニア・クッシュョン型揚陸艇）等の製造、整備に明け暮れて僅か一年でそれなりの役職と貯金を手に入れたのだ、が。

父親はリストラされニート化、母親は間男と遊び狂い実家は借金に塗れ、長男たる俺に金をせびり来る始末。

唯一の救いと言えば、中学時代から付き合つている 現在同棲中の彼女の存在だった。

辛い仕事も彼女との将来の為の資金だと思えば頑張れたのだ。しかし、ある日日々に仕事が早く切り上がり、彼女とゆっくり出来ると思い足早に帰宅してみれば、だ。

「……そちらはどちら様でござりますでしょうか？」
「ち、違うの、これは」

俺が素つ頓狂な言動になつてしまつても仕方ない。目の前には裸でベッドの上に横たわる愛しい彼女と、無言の見知らぬ男 どう見ても事後です。本当にありがとうございました

当時の俺は、お互に相手が悪いと眼前で罵り合つ男と彼女に、それはそれは辟易としたものだった。怒りが湧くとかを何周も通り越して笑いが込み上げた。

挙げ句の果てには、急に逆ギレを始めた彼女に『貴方の帰りが遅

いのは浮氣しているからでしょう？ と、訳の解らぬ事を言われる始末。

だから私もやり返したの

『俺は悪くない』と彼女を置いて一目散に逃げ出すような男に自分は負けたのだなと思うと、己の首をかつ切りたくなる思いだつた。そんな状態で仕事がまともに熟せる訳もなく、己の不注意で右足を全治三ヶ月の骨折。社長や同僚が必死に引き止めてくれたのだが、どうにも居た堪れなくなり退職。

それから一年間、汗水流して働き蓄えた貯金を消費しつつ、現実から逃げる様にしてひたすら仮想現実にダイブ（接続）する自堕落な日々を過ごした。

周囲をグルリと深い堀に囲まれ、重厚な城壁に護られた巨大な砦レグルス中からは剣撃や爆音、そして悲鳴が幾重にも駆け喧騒に包まれている。

俺は入口の近辺に次々と人が転移魔法で現れては突入を繰り返す様子を、正面の丘から頬杖を突き眺める。

「『斑鳩』に『にやんこ団』に『みくたん親衛隊』……その他多數。 競争率高過ぎだろ、今日は祭か？」

皆に入つて行く大手ギルドのエンブレムを確認して嘆息を漏らす。

「ま、”不死身”サンなら大丈夫っしょ、この前みたいにサクッと

宣しくう

隣で俺と同じ様に手の平で傘を作り入口の様子を眺める狐田の男が、なんとも氣の抜けた口調で語りかけてくる。

黄色の短く跳ねた頭髪に赤い軽装を身体の要所にだけ身につけ、その容貌は明るく人懐こい印象だ。彼の足元には一対の双剣が大地に根を生やしている。ギルド『Alice』のサブリーダーのジローと言つ男だ。

「LV30代に期待せんといてくれい……ステはまだしもHPが低すぎい」

俺は鼻唄混じりで「機嫌な様子のジローに肩を落として答える。

現在俺は、一年前からサービスを開始したVRMMORPGゲーム『Arcana Knights Online』(以下AKO)の攻城戦に、ギルド『Alice』の傭兵として参加している。

ミドガルズと呼ばれる大陸を舞台にしたこのAKOは他のVRMMORPGの例に漏れず、剣と魔法。そして少々の男の浪漫(?)を含んだ人気作だ。現状での最新作と言つ事もあり、正確な数は知りえないが常時接続者はかなりの物になると思われる。

このゲームはMMORPGと言つジャンルにしては珍しく、LVupの必要経験値なるものが低く設定されており、レベルキャップの100までは割と誰でもすぐに達する事ができる。

そしてLVが100に達したプレイヤーは転生クエストを達成す

る事によって、転生一回につきステータスポイント（以下S t P）のボーナスポイント（B P）100を入手して（現段階ではボーナス入手は10回までで、最大1000）再びL v 1から育てる事が出来るのだ。

かく言つ俺も現在転生10回目のL v 32だ。まあ、実際はL v 1につきS t Pは2上昇していくので能力的にはL v 532相当と言つことになるのかな。

ピロン

偵察娘：『ジローさん、城主の《クレイモア》は全滅したみたい。今は《斑鳩》が篠城ちゅー、《にゃんこ団》は撤退して他行つた』

軽快な電子音と共に連絡用に開いていたチャット窓に、皆の偵察に行つていたメンバーからのメッセージが表示される。

そろそろ皆も眺めるだけでは痺れを切らす頃だらう、メッセージを確認したジローがゴホンと咳ばらいをしてギルド員達と向き合つ。

「さて、そろそろひらりも参戦するといますかね、皆さん？」
「待つてましたーー。」
「ふつじゅーー。」

ジローが号令を掛けると、それまで退屈そうに鎮座していた《Alice》のギルド員達が意氣揚々と立ち上がり、次々と奮起の声があがる。

本日は『ギルドが現在保持している皆に誰も攻めて来なくて退屈

『……』 と言う嬉しいのか悲しいのかよくわからん状況に陥つてしまつた為に、防衛組と遠征組に別れての運びと相成つたのだ。

言つまでもなくこちらは遠征組で、俺を入れて総勢33名になる。色々な所属ギルドが入り乱れての乱戦になる事を想定し、皆一様に一点突破型の身軽な装備をしている。

「そいじゃ作戦は手筈通り、”不死身”サンが敵の後衛を無力化しつつ敵にタコ殴られてる間に皆はパパッと玉座を占拠、そのまま終了時間まで引き籠もります。 あ、後衛には前衛が一人護衛について進んでね」

「俺がやられるの前提だもんな……」

まるでこれからピクニックに行くかの様な陽気な物言いで述べるジローを一瞥し項垂れる。

アハハ、と双剣を担ぐジローを尻目に、俺は腰のポーチを開いて回復薬等の不備が無いこと確認して愛用の杖を握り締める。周りでは転移魔法を使える者達が次々と詠唱を始め、地面上に皆前直通の転移魔法陣が幾つも現れる。

「「GO! GO!」」

次々と光りに吸い込まれて転移して行く仲間達に続き、俺も魔法陣へと飛び込んだ。

まるでエレベーターに乗った時の様な緩やかな浮遊感の後　先刻まで居た丘から800m程離れていた砦の入口まで瞬時に転移する。

砦攻めの新たな参加勢力に周りの視線が集中する。

「おっ、不死身きた」

「今日こそ死なす！」

……などと穏やかでない会話が聞こえてくる。　ちなみに”不死身”は不本意ながら俺のあだ名で、周りのプレイヤーから皮肉を込めてそう呼ばれている。

『人気者は辛いっすね～』

ジローがニヤニヤしながら『whis（個別会話）』を飛ばして来るのを力無く見据えると、何を思ったのか彼は細い目を見開きウインクしていく。　無視しよつ。

ゾンビ・突入しま

チャット画面を開いて仲間に呼び掛けると、彼らからは『逝っちゃって下さい』『不死身サンまじゾンビ』『抱いて！』等と暖か

い激励の言葉が表示されるのを流し見てチャット画面を閉じる。

ジローに目配せし、互いに頷くと隠密効果のあるフードを頭から被り入口に侵入する。

開け放された城門を潜ると、そこは轟音が響き渡り、魔法やスキルがド派手な演出で飛び交い混沌と化して居た。近接武器を持つた防衛側の前衛が攻め側を鍔迫り合いに持ち込んで牽制し、それを後衛が弓や魔法で安全で攻撃の届かない高台から集中砲火を浴びせて一蹴。

さらに防衛側の後衛3名が入口に向って広域魔法の波状攻撃を仕掛けている為、攻め側の後衛は相手を攻撃する間もなく一瞬で蒸発強固な護りを展開していた。

俺は斬り合う人ととの間を擦り抜け、広域魔法を詠唱する三人を射程範囲内に收めれそうな位置を見つけてそそくさと移動する。

『……ジロー、配置OK。入口狙つてる三人潰すから、カウント10から宜しく』

『あいよ　OK。10……』

こちらの準備が出来た事を告げると、各自に伝令の旨を告げたジローが秒読みを開始する。俺の役目は安全圏から広域魔法を唱える3人をカウント10までの間に無力化する事だ。

現在魔法発動中の一人は省き、最初に狙うのは現在詠唱中の隣の男だ。

「『神の鉄槌』」

詠唱短縮によって単語発動可能にした魔法が『破滅の錫杖』^{トール・ハンマー ルインズ・ゲート}と呼ばれる なんともアレな名前の愛用武器の穂先から、青白い軌跡を描いて目標に向かつて突き進む。

詠唱中だつた相手の男魔導師はノックバック効果のある『トール・ハンマー』の直撃を受けて高台から転落、ポリゴンの欠片となって空中に四散する。

「え……？」

「不死身きた！ 止めろ！」

それと同時に俺の隠密効果が効果を失い、敵のど真ん中に姿を晒す事となつた。俺の突然な出現に呆けて固まるプレイヤーも居れば、すぐにこちらに斬りかかってくるも見知った顔も多く見て取れた。彼らから繰り出される斬撃をこちらも杖でいなし、呪文の詠唱に入つていた二人目に、すかさず『トール・ハンマー』を直撃させる。

「二人やられた！ 本隊が突つ込んで来るぞー！」

砲台役の二名が戦線離脱した所でやつと敵方から警告を促す声があがる。すぐさま重鎧と大盾で武装したプレイヤー一人が最初に俺が無視した女性魔導師を護る様にして射線に立ち塞がる。

「……ま、関係ないけど——『彼ノ者ヲ拘束セ』」
「ひひやあ？！」

指定した対象の動きを拘束する魔法を発動し、詠唱に入っていた女性魔導師を力付くで縛り上げて詠唱を中断せしむ。

『バインド』発動中は「こちらの動きも制限されてしまつ為に袋叩きにされる恐れがあるが、こんな時の為に悪戦苦闘して編み出した固有魔法を披露するには持つて来いだ。

「こんな公衆の面前で亀甲縛り……だと？！　なんと言ひつ鬼畜」
「ハラスメントだ！　死ね！」
「バインドにこんな未知の領域が……けしからんッ」
「俺も縛つてくれ！」
「おい！　やり方を教えろ　いや、教えて下せー」
「いつそ、一思いに殺してえーッ」

一部（主に女性プレイヤー）を除いて評判は上々のようだ。俺の苦労も報われるぜ……近々スクロール化して販売してみようと思つ。それで、俺の役目は果たした。後はジロー達に任せるとしよう。

「ひやつはーつ！！」

「高台を優先攻撃、前衛は切り込め！　一気に大広間まで突破する

入口から『Alice』の面々がなだれ込んでくる。……なんと
言つか　見紛う事なく盗賊のノリである。

『Alice』の射手達が身軽な動きで点攻撃の単体魔法の弾幕かい潜りながら矢を放ち、残った敵方の魔導師は今更広域魔法を唱える時間など無く、次々と数を減らして行く。

「不死身サンおつです、一人置いて行くんで、そのまま入口で足止めお願いしま～」

敵方の大剣使いを斬り伏せて双剣を肩に担いだジローがこちらを一瞥してウインクし、直ぐさま踵を返して奥へ進んで行く。

俺が一々答えるまでも無く、大量の敵さんに周りを囲まれて居るので、否応無しにここに張り付く事になる。摺り足でジリジリと近付いて来る敵対プレイヤーに不敵に笑み、前方に突き出した左手の五指をゆっくりと折り曲げる。

「きつく縛られたい奴から掛かって来い」

耳障りな鈍い風切り音を鳴らし、圧倒的な物量を伴つて振り下ろされる巨大な戦斧を愛杖で無造作にかち上げ そのまま相手の胴を力任せに薙ぎ払う。

「ぐお……ッ」

『『Armor Break!!』』

戦斧男の身体は城壁まで吹き飛び 彼の鎧の破片が光りの粒子になり四散してシステムメッセージが鎧の破損を告げる。

「いりー、魔導系の癖に重装キャラをホームランするとか卑怯だぞ、チート自重しろ！」

「うつせ、縛るぞ！ 1対多数で卑怯もクソもあるか、勝てば正義つ！！」

ギルド『斑鳩』に所属する知人の女が後方から野次を飛ばし、まくし立てる。

俺が周りに”不死身”だの、”チート”だと揶揄されるのは偏に月単位で出現するボスドロップの固有装備を数個、運良く所持していると言う理由でだ。現実で幸せになりたかったぜ……。

本来ならば例え隠密状態であろうと、他の後衛の様に最大HPの低い俺は入口に入つたが最後、例に漏れず瞬殺されてしまうはずなのだが。

。

『破滅の錫杖』^{ルインズ・ゲート} 全ステータス2倍 V i t 上昇分HP切り捨て MP減少30 / 5sec

『アニマリング』 物理被ダメージ9割減 精神異常無効 魔法被ダメージ10倍増

『アイギスリング』 全魔法無効 物理異常無効 HP半減

この装備達のお陰で、俺に魔法の類いは一切効果がなく、いくら殴られようとも致命傷を受けない まあ、ドロップ品を使用しているだけなのでチート性能と言えど合法だ。文句は設定した奴に言えい！

しかし、絶対無敵と言う訳でも無く最大HPは極端に少ないのだ。"不死身"と揶揄されるプレイヤーが全プレイヤー中で最もHPが低いとは中々皮肉が利いている。

このゲームは自由度が高く、職業なんてモノはなくてスキル制、LVUPで得られるポイントはプレイヤーが好きに割り振れる。

しかし、特殊なスキルの発生条件が使用武器の熟練度 + 対応ステータスが一定の数値に達している事 と言つ条件が着く為に幅広く便利なスキルを覚えようと、スキルは十人十色で個性が出るのだが、能力値は必然的にバランス型のステータスになる者が多い。

その点、防御系のステータスに割り振る必要が一切無い俺は、極

端に攻撃に特化した能力値になつてるので短詠唱／低威力の魔法で敵が吹き飛び 脅力はそちらの近接キャラよりも高いと言つとんでも性能になつていてる。

わかりやすく転生回数10回目、同じ魔導師、近接プレイヤーのテンプレ的ステータス割り振りの数値と並べるとこんな具合だ。

Level: 32

STR	220	50	262
VIT	8	140	150
DEX	250	202	250
AGI	220	150	250
INT	406	320	50
RST	8	250	150

左から俺、魔導師、近接のステータス（装備上昇分除く）となる。

こんな感じで、魔導系で在りながら脅威の耐久性を持ち、唄つて殴れるプレイヤーとして悪名高くなつてしまつてるので。

『ソニック・ピアッキング』

「……クッソ、当たんねーッ！」
「『爆ぜろ』」

騎乗槍と大盾で武装したプレイヤーが繰り出す連続突きを躊躇し、

掌に爆炎を纏わせて対象を吹き飛ばす《ナパー・ム・ブロウ》を駆使して態勢を崩し、杖で追撃を掛けた。杖の性能のお陰で優位と言えど、装備中はMPが常に消費される為に長期戦の場合はMPを節約しなくてはならない。

ジローから玉座の間を占拠したとの連絡を受け、後は残り10分間を防衛すればこちらの勝利だ。

残り時間が少ない事もあり、どんどん攻め手の数が増えて行く。攻城戦は砦を防衛するだけの勢力はなくとも、終了時間までの間に玉座に置かれた宝玉に最後に触れたギルドが城主となる。

そして、それを狙つた者達 所謂”レーサー”と呼ばれるプレイヤー達が途中から多く殺到し、入口の戦闘は熾烈を極めて居た。チャットウィンドウを開き、思考入力モードに切り替えて仲間に呼び掛ける。

ゾンビ：数が多い、どうするよ？

「じざる」：拙者の超絶 抜刀術も、この数じゃ本領を発揮出来んで、
「じざる」

一郎：広間の方も大変です アイテム代経費から落とすんで、
大技目一杯使いまくつちゃって下さい

魔女娘：心得た。不死身、私に続き給え 雷雨を頼むぞ

高台の上で呪文の詠唱に入った尖んがり帽子の魔女つ娘に右手を挙げて承の旨を伝え、俺も詠唱に入る。

「……」全てを凍てつかせる魔狼の咆哮よ、我に仇為す者共に氷雪の嵐となりて吹き荒れよ

「

「えつ、なにそれカツコイイ、俺も考えよつ……」全てを穿つ……

”ダメだ、出でこねえ！ 以下略…

『ファイアフル・ガスト』

魔女つ娘ちゃんのすんばらしい（厨一）詠唱が終わると辺りに氷塊を纏つた巨大竜巻が発生し、魔法耐性の低い敵対プレイヤー達はポリゴンの欠片となり四散し 生き残った者達も《状態異常・氷結》になり身動きが取れなくなる。

『ウォルテクス・ストリーム』

そこに俺が発生させた雷系呪文が追撃をかけ、一気に畳み掛ける。一面一帯に激しい紫電が耳をつんざく轟音と共に降り注ぎ、生き残った氷結プレイヤー達を次々と飲み込んで行く。

程なくして雷雨が止み、エフェクトの粉塵が消えて視界が晴れると、俺達の前に生き残った敵プレイヤーは存在しなかつた。

「フツ、ざつとこんなもんじゃ

「拙者等に盾突こう等、100年早いで」

「……」やるも働けよ。さつ、続けて行こう

本人のキャラと反比例する控えめで慎ましやかな胸を得意げに張る魔女娘と、さも自分が一掃したかのよつたドヤ顔で威張りなさるオツドアイの一ノ刀流剣士サマと顔を見合わせサムズアップする。

後で魔女っ娘ちゃんには、俺の詠唱も発案してくれないと頼んでみるか。

「喰らえつ、必殺」

「……万物の根源たるマナよ」

「男はビツく！ 女は縛る！ やられたい奴から掛かつて」

そんなこんなで無事に終了時間を迎える、ギルド『Alice』の遠征隊は勝利を納めたのだった。

物語中のチャット名等はプレイヤーのキャラクタではなく、チャット内の名前です。

一
心。

〇〇・終わりは突然に（前書き）

長くなってしまったので、ここまでがプロローグになります。

右のこめかみから頬を伝つて流れてくる生暖かい液体を手に取る。流れ出す血液と反比例する様に俺の心中は冷え切り、思考が停止する。理不尽だ。俺がいつたい何をした？

俺の目の前で虚ろな表情で立ち尽くす元彼女に、静かに蔑みの視線を送る。

酷く憔悴した様子の彼女の左手には俺が夕飯に使用し、机の上に置き忘れていたドレッシングの瓶が握られている。ああ、あれで殴られたのか。

いてーな……凶器だわ、侮れん。そういうや、前にゴルフクラブで殴られた事もあつたつけか、と色々な出来事が脳裏に思い浮かんで嘲笑する。楽しいこともいっぱいあつたな……。

びつじてひつひつた。

事になつたのだが、ゲーム内にリンクさせている家のチャイムが鳴つてゐる事に気付き一旦ログアウトした。

そして誰かと扉を開いて見れば、付き合つて居た当初と変わらぬ口調で話しかけてくる彼女と久々の再会を果たしたのだ。

まあ、久々と言つても直接的にはつて意味でだが。お互い近所に住んでいるので、彼女が色々な男を取つ替え引っ替えしながら車で一緒に出掛けるのを良く見掛けているからだ。

あの頃と同じように至極親しげに話しがけてくる彼女に、俺はぞんざいかつ丁寧な物言いでお帰りを願つたのだが、『5分だけ』と扉の前で喚き散らす彼女に圧されて家に招き入れたのだ。この選択が間違つて居た。

何を企んでいるのか、彼女は過去の美しい思い出を口早に並べ立て、俺に復縁を迫つたのだ。

俺は理解に苦しんだ。

頭をキリキリと締め上げる心理的外傷及び、心労から込み上げる嘲笑を我慢しつつも、男には苦労してなさそつだと訊ねてみれば『それは貴方が迎えに来てくれないから』と、とてもコーエモアに溢れたジョークで返す彼女。

ならば、先刻からひんぱんするほど鳴り響く鞄の中の端末に大量に保存されている男達の情報を田の前で消去出来るかと訊ねれば

「それは無理……でも一番好きなのは くんなの、信じて…」
おい、医者は何処だ。いえーよ、やべーよ。どうしてこうなつた。

誰か俺にわかりやすい様に説明してくれ。

俺の心のダムは早々に決壊し、咽が小刻みに震える。そして嘲笑の張り付く笑顔で彼女にはつきりと伝えた。

「お帰りはあちりりです」

その結果がコレ、だ。もつ放つといてくれよ、なんで殴られたの俺。

あまりに置いてきぼりな展開に投げやりになりつつ、壁に身体を預ける。青臭い感情ながらも、心の底から愛していた彼女は何処に行ってしまったのだろうと感慨する。

「じめん、じめんね……」

流血する俺を見て口元を押されてむせび泣き、近付いてくる彼女は俺の頭に手を伸ばし、軽く撫でると俺の肩に頭を預ける。

久々に嗅ぐ彼女の髪の匂いに、紛れも無く本人だな と心中で察し、なんともやるせない気分にさせられる。

「……ほんとに、大好きなの……だから……」

「……ああ」

「 私のじゃないなら死んで……？」

冷淡で機械的に発せられる彼女の声、刹那に腹部に感じる熱そして、遅れてやつてくる鋭く捩られた様な痛み。

ゆつくつと視線を落とすと自身の右脇腹に生える赤い柄の様なモノ。

同棲する時に一緒に買いにいった包丁だな とすぐに認識出来た。こいつ、料理出来なさそうなのに意外と上手いんだよな…… 同棲前に練習したって言つてたつけ。懐かしい、な。

あんなに大好きだったのになんてだろう。……頬を涙が伝うのを感じ、俺の身体に体重を預けたままの彼女の頭を撫でる。

「私はつ……悪、く……ない……」

彼女はアイラインが溶けて黒い線を描く顔をぐしゃぐしゃにして、肩を震わせて嗚咽しながら床にへたり込む。

「そーやって、全部人の所為にしてると、男に逃げられちまうぞ」

なんでだろ？か……こつもの嘲笑じゃなく、自然な笑みで彼女を皮肉れている。 そう、昔のようだ。

「ちがつ……き、救急車……」

彼女はようようと立ち上がり踵を返すと、足をもつれさせながら玄関へと消えて行った。

「……人間意外と冷静になるもんだな」

赤に濡れた腹部を撫でて独白する。自分に“死”と言う物がこんなにも簡単に降り懸かって来るとは思つても居なかつたので、何処か他人事の様に感じる。

そして俺の脳天氣かつ、阿呆な脳味噌が『こっち（ゲーム内）じや不死身なのに、今リアルで刺されて、そろそろ死ぬんだぜ？』と言つしょーもない事を思い付き、実行に移してみる事にする。

まさに命を賭けた一世一代のギャグだ、馬鹿の行動力つて凄いんだぞ？ 悔るなacre。

ふらつきながらも、今では俺の生活に欠かせなくなつてしまつた日焼けマシンの様なVR筐体に寝転がり、蓋を閉じる。

「システム起動」

『……ok. Game cord "Arcana Knight
s Online" Start . . .』

『Now Loading . . .』

カリカリと音を立てる筐体の動作音が、子守唄の様に耳に響き
視界が暗く塗り潰されて行く。

『Standby ready?』

いつでもどうぞ。と頭で念じると俺の意識は闇に呑まれた。

微風に煽られた若草がさらさらとせせらぎ踊る。脇には背の低い樹木がぽつぽつと根を張り、枝を広げて一心に陽光を浴びてゐる、起伏の緩やかな丘が遙か地平線まで続き、土が剥き出になつた恐らくは街道だらう。それが緑豊かな草原に一筋の線を引いてゐる。

気持ちの良い天候に両手を挙げて伸びをし、新鮮な空気をたらふく肺に吸い込む。

「 つて、ここ何処だよ、つーか、なんで明るいの？」

俺は階内で落ちたはずなんだけど……時間も22時過ぎだつたはずだ。この明るさ どう考へても毎くらいだよな。

「あー、せっぱづわからん

混乱氣味の頭をがしがしと搔き、ウエストポーチから『テバイスライザ』と呼ばれる端末 まあ、所謂携帯電話型アイテムだ。

パクンッ、と小氣味良い音を立てて開かれた画面に表情された時間は14:32……あれ？ 何この時差。ラグつてレベルじゃねー

ぞ、てか俺生きてんの？

端末を操作してフレンド検索を掛ける　　昼間でも誰かしりは居るだらう。

『Search . . .』

『見つかりませんでした』

「うげ、マジか」

ジローへ『whys』（個別会話）も飛ばしてみたが繋がらない。思ひ当たる奴に一頻り送信を試みてみたが返つてくる反応はどれも一緒だつた。

運営にも繋がらんな……メンテ中か？　事前に告知はなかつたはずだけど……緊急メンテかねえ。　稀にメンテ中でも入れる事があるつて聞いた事がある。今回もその類いだろうか？

知り合いが居ないなら意味が無いな。こんな時間になつてるつて事は、俺はしづとくも生きて居るのだらう。　きっと筐体が血塗れになつてるだろな……掃除しなくちゃならん。

脳内でシステムメニューを開きログアウトボタンを選択する。

「……ふむ？」

出来ねーな。メンテ終わるまで待つしかないのかねー？　マップを開いても”No Data”と表情されるだけだ。

取り敢えず街に飛びか……。

「……転移魔法を発動……反応無し。ｗｈｙ？」

「……転移もできねーのかよ、他の魔法はどうだ？　『爆ぜろ』

俺の左手に橙色の魔力の塊が出現する。単語登録している《ナバーム・ブロウ》は問題なく発動するよつだ。

左手を払つて魔力の塊を分散させ、今度は右手を掲げて愛用武器をイメージする。すると、光りの粒子が右手に集まって棒状の形を取り、見る見るうちに見慣れた形状へと相成つた。

先端にそれぞれ長さの異なる五つ叉の刃が取り付けられた禍々しい錫杖　《破滅の錫杖》だ。錫杖と言つよりも”グレイヴ”や”フォシヤール”と言つた槍剣と言つた方がしつくり来るかも知れない。

「武器は問題無し……インベントリはどうかな」

愛杖を肩に担ぎ、宙に意識を向けるとすぐにメニューが表示される。試しにポーションを取り出すと、赤い液体の入ったフラスコの様な物がなんら問題なく実体化した。

どうやら不具合があるのは転移魔法とマップ、そしてログアウト出来ないと言つた所か。《魔装》は出来んのかな？……試してみようにもゲージが足んないな。

「ま、適当に歩いて見るか。久々に歩いて移動するのもいいかも

知れん」

街道を辿つたらどつかの街に着くだろ。と、物見遊山氣分で俺は見知らぬ道を散策する事にした。

「飽きた」

街道を行けども行けども緑一色でいい加減うんざりして來た。今までのプレイで感じる事のなかつた身体の疲労感の様な物がそれに拍車を掛けている。

途中で魔物をちらほら見掛けたが、自分より格下相手を恐慌状態にする『恐怖の波動』を展開中なのでこちらに近寄つて来る事はなく、俺の散歩は、疲れから来る多少の不快感はあるが安穏そのものだ。

「……お?」

本日何度目かの丘を越えて居る時だった、道を降つた先で何者かが魔物と戦闘の真つ最中のようだ。

巨大で筋肉隆々な緑の体躯にトサカの様な頭飾りのついた兜や無骨な棍棒、重厚な丸盾で武装した魔物　　あれは『オーガキング』だな。

んー、オー・ガキングはでかくてこの位置からでもはつきりわかるけど、戦ってるプレイヤーの仔細は距離が離れててフォーカスしてみてもよく分からんな……。

ここから分かるのは騎乗槍を装備し、馬に乗ったプレイヤーって事だけか。まるで馬を自分の手足のように操作してオー・ガキングの攻撃を器用に躲している。

アーツは再生力が高いから近接一人だとえらい時間が掛かるんだよな……。ちょいと支援しに行くか。何より他のプレイヤーを見つけた事が嬉しい。ここがどの辺りか教えて貰うとしよう。

面倒だが右手の薬指に嵌めている《アイギスリング》を外して速度上昇魔法^{ペイジョン・スピード}を自身に掛ける。

攻撃魔法を無効化出来るのは美味しいけど、回復と支援も無効化なんだよな……。再び指輪を嵌めて愛杖を実体化させる。

「よし、行くか

軽く杖を振り回して手応えを確かめると、一気に丘を駆け降りた。

元々の俊敏性ステータスの高さもあり、数百mの距離を風を裂きながら一瞬で駆け抜ける。

プレイヤーが魔法の有効圏内に入った事を確認し、すかさず支援

魔法を掛ける。

『プレイヴ・パワー』

『プロテクション・ディフェンド』

『イベイジョン・スピード』

「……ツ？一 助かるー。」

「援護す……る？」

オーガキングの振り下ろす棍棒を無駄の無い動きで躱し、落ち着いた渋みのある声で礼を述べる騎乗の 騎乗の……馬？ うま？ ウマー？

俺がプレイヤーかと思つて居た相手は紛れも無く

「えつ、ケンタウルス？」

「む、そうだ。別段珍しくも無からつ。魔導師殿、すまんが手を貸してくれぬか？」

白い鎧を身に纏い、腕を差し込む様にして装備する突撃騎乗槍を巧に操り、老練な雰囲気を醸し出す壮年男性（？）

いやいや、珍し過ぎるだろ 『AKO』の種族は人間しかなかつたはずだ……いつの間に実装されたんだ？

『才才才才才才才才才才才才才才！！』

「まあ、細かい話しへ後だ。」コイツを片付けてからまとめて聞くとしよう。

巨大な体躯を大きくなけ反らせて雄叫びをあげるオーガキング目
掛けて杖を構え、詠唱に入った。

01・邂逅（後書き）

初遭遇が美少女ではなく馬のオサーントと言つ悲劇。

”手を貸してくれ”と言われたものの、オーガキングはケンタさん（仮名）の獲物である。

俺は威力を最大まで下げた火炎魔法ファイアーポルトでオーガキングの気を引きつつ、後方から彼の支援に徹する事にした。

『エンチャント・フレイム』

オーガキングの弱点の炎属性を付与すると、彼の突撃騎乗槍が猛り狂う焰を纏う。

対人戦では先陣を任されてるけど、元々俺は支援が本職なんだよなー。付与が成功したのを確認し、オーガキングの臑を杖で横薙ぎにするとオーガキングは体勢を崩して膝を突く。

「 今です」

「 応つ……」

ケンタさんが焰槍を水平に構えて馬蹄で大地を数回蹴り焼き、助走をつけてオーガキングに突進攻撃を仕掛ける。

ガギイン……ツ！！

「ぬ……ツ」

それをオーガキングは咄嗟に丸盾で防ぐが、衝撃の勢いを殺し切れずには弾かれた盾が宙を舞う。成人男性の身長程の大きさがある大型の丸盾は、一定の高さに達するとピタリと静止し、慣性の法則に従い落下して地面に深々と突き刺さる。

『グオオオオッ』

彼の突進直後の隙を狙い、頭上から振り下ろされる棍棒をファイアーボルトで正確に腕を撃ち抜き、攻撃行動を阻害する。

先程からこの戦法を繰り返しているので、オーガキングはこち側に一切攻撃を加える事が出来ないでいる。所謂、『ずっと俺達のターンッ!!』である。

卑怯？ 外道？ 知らんない、これも立派な戦略である。いちいち避けるの面倒なんだよ。

発動中のスキル『恐怖の波動』の効果も手伝つてオーガキングの攻撃頻度は著しく低下し、憔悴しきつているようだ。

戦闘の真っ只中だが ふと、気になつてケンタさんを覗姦もとい、フォーカスして見る。実は今後実装予定の新種族をテスト中のゲームマスターだったりして……

レベル328……だと?!

えつ、どんだけ鍛えてんのこの人。『AKO』の最大レベルは100までのはずなんだけど……。やっぱ運営の人なのか？

それともう一つ、さつきからどつも頭に引っ掛つてるのがオーガギングの出血だ。

全年齢対象のこのゲームで流血表現は実装されてないはずなんだけどなー。

現実と見紛う程のリアルな出血表現に見慣れぬ種族、通常ではとても到達する事が無し得ないレベル なんとも嫌な予感がしてならない……。

はは、まさか……な？

いや、実はテストサーバーに迷い込んだって落ちかも知れん。と言つた、そうであつてくれ。

俺は不意に脳裏に浮かんだ雑念を振り払い。深呼吸して早鐘を鳴らす鼓動をなんとか落ち着かせると オーガギングの顔面にファイアーボルトをぶち込んだ。

『グオオオオオツー!』

顔面に焰の矢が直撃して視界を奪われたオーガギングは、棍棒を滅茶苦茶に振り回して地面を乱雑に叩き殴る。その都度に大きな震動が発生して大地が揺れる。

「むッ。これでは近付けぬな」

揺られてバランスを崩したケンタさんが踏鞴たたらを踏んで顎を撫でる。

短く刈り込んだ白髪に皺が刻み込まれた灰色の鋭い双眸と、こけた頬。髪は丹念に剃られている。

まさに”歴戦の戦士”と称するのがピッタリと当て嵌まる風貌の偉丈夫だ。

「んじゃ、打ち上げちゃうんで、サクシヒヤッサクヒヤッて下せー」「ぬ？」

怪訝な表情で首を捻る彼を尻目に、俺は杖を翳して少々長めの詠唱に入る。

まあ、詠唱と言つても小難しい呪文をいちいち唱える必要など一切無く、脳内で自身の使える魔法を選択、後は時間が経てば勝手に発動されるんだけどな。

能力値のDexを上げたり、その魔法の熟練度を上げる事に因つて、詠唱つまり、発動待機時間を短くする事が出来る。

そして熟練度を極めた魔法は一部の例外を除いて《単語登録》する事で待ち時間をキャンセルし、即時発動出来る様になる。もちろん、一部例外と言うのは広域大魔法の事だ。あんな物が即時発動出来れば敵無しである。

基本的に詠唱中は、それ以外の行動が一切制限されるが、俺はその制限を無効化する《オート・スペル》と言う特殊スキルを習得し

ているので、大規模な魔法を使う時は詠唱妨害もなんのその。杖での格闘で隙を無くす事が出来るのだ。だから”チート”って言われてるんだよなあ。

『エクスプロード』

「ゴウッ

発動待機時間が終り、標的指定したオーガキングの足元から真紅の魔力球体が大きく展開し、再び足元に集束。

「ドオ……ツ！！

刹那の静寂の後、圧縮された炎素系魔力が一気に解放されて爆散する。

「……ツ。こんなに音デ力かつたつけか？　あー、耳鳴りがする。

耳をつんざく爆音が辺り一帯に響き渡り、爆風で肌が黒く焼け爛れたオーガキングの巨体が宙に浮かび上がる。

「おおっ、見事　参るっ！」

俺が顔を顰めてエクスプロードで馬鹿になつた耳を押さえていると、ケンタさんは巻き上げられた粉塵と土煙が舞う最中、爆発で大地に穿たれたクレーターに颶爽と飛び込む。どうやら彼は耳をしつかりと塞いでいたみたいだ。

そして、オーガキングの真下に移動して槍を腰溜めに構えると、彼の全身が目が眩む程に強く発光する。

「 ぬうん…… ッ！！」

彼が目にも留まらぬ高速で突き上げた槍から巨大な光りの槍が出現し、未だ無防備に宙を漂うオーガキングの胴を貫き、そのまま勢い良く天空へと昇つて行く。

あれは『ガイゼル・ストライク』か。

槍の必殺技的なスキルの代表格で、前に攻撃力特化型のプレイヤーからあれを喰らつて死にかけた事が……。確かに超速回転するドリルが出るのもあつたっけか。なにその超浪漫。

杖の攻撃スキルにもあんなのが欲しかつたな。まあ、近接向けの武器じゃないから仕方ないか。俺も槍の熟練度上げようかな……。

などと俺が独りでブツブツと思案モードに耽つて居ると、槍を担いだケンタさんが馬蹄を鳴らしてクレーターから上がつて来る。

ああ、そうだ。彼には聞きたい事が山ほどあるんだ。浪漫については後程ゆっくりと熟考する事にしよう。

「すまないな、助かったよ。アレの討伐を依頼されていたのだが、思つた以上に手強くてな～。ワハハ

背後に横たわるオーガキングの骸を一瞥して親指で差し 胸を張り破顔して豪快に笑うケンタさん（仮名）。意外と豪気な人物の様だ。

俺が勝手に戦闘中の雰囲気でイメージしてた寡黙で渋い武人と言つ印象は儘くも脆く一瞬で崩れ去り、気さくなおっちゃんと言う認識へと変わつた。

彼は馬人間と言つ事もあり背が高く、身長170cmちょっとの俺は頭上を見上げないと会話がし辛くてしちゃうがない。

「……ぬ、そうだ。紹介がまだだつたな。ワシはジンバルトと言つ。見た通りケンタウルスの戦士だ」

ケンタ 改めジンバルトさんは人好きする笑顔で右手を差し、友好の意を示す。

討伐つて事はクエスト中なんだよな。てか普通に自己紹介されたけど、ゲームマスターじゃないのか？ ちょっとかまをかけてみるか。

「あ、ども。俺は不死身って呼ばれます。えーと、ソノヒドリガルズのどの辺になるんですか？ 草原が広がってるから南部になるのかな……」

俺も右手を差し出して彼と握手を交わし、悪評のあるあだ名を名乗つた。彼が『AKO』のプレイヤーなら何かしらの反応があるはずだ。

「フジミ殿か、変わった名前だな。 はで、ミドガルズ？ ……ああ。この大陸の昔の呼び名だな。今はここはアスガルズと呼ばれているが」

頸を撫でながら眉を顰めて首を捻るジンバルトさん。少々不死身のイントネーションが違う気がする。

「ってアスガルズ？ なにそれ、これって……AKOだよな？ もう直球で行こう。

「えっと、ジンバルトさんは、このゲームにリンクしてのプレイヤーですよ……ね？ 今ログアウトとか出来ます？」

「ぬ、すまんな。聞き慣れぬ言葉だ。魔術用語か？ ワシは生憎と魔術用語には疎くてな」

疑念をたつぱり含んで矢継ぎ早に訊ねると、彼は怪訝な顔つきで頭を搔き、然も申し訳なさ気に答えた。

パクンッ。と音を立てて閉じた《デバイスライザ》を収納し、腰を休めるのに丁度良い大きさの石に腰掛ける。丘の下から吹き抜けてくる風が戦闘で火照った身体を冷やし、心地好い。

ふう。と短く息を漏らして愛杖を地面に突き刺す 周りには物言わぬ、オーガキング”だったもの”が六つ横たわっている。

「 《魔装》も問題無く使えるみたいだな……しつかし異世界トリップねえ」

蒼天の空を仰ぎ、太陽の眩しさに目を細めながら物思いに耽る。

俺がジンバルトさんからの話を聞いて、現状から推測するに、この世界は俺がプレイしていた非現実仮想空間でのゲームではなく、ログアウト不可の紛れも無いリアルだと言う事だ。俄かには信じがたいけど、彼が性質の悪い冗談を言つてるので無ければ、そう考えざるを得ない。

「やっぱ俺、死んでんのかな」

ゲーム脳だつた俺の死後の世界か？ よくある異世界召喚と言つやつか？ はたまた、運営のドッキリでした（はあと）とか？

色々と見解は浮かぶが、判断材料が少な過ぎる。

とにかく、今の自分が置かれた状況が唯一真実なのだから、取り敢えず直向きに現状を受け入れる事にした。どうやら魔法も使えるみたいだし、足搔いてもログアウト出来なきや仕方ないしね。それに、例えあちら側へ戻れなくとも俺には未練がないのだ。

もしドックリとかだったらクレームの電話鳴らしまくってやるからな。ネトゲ廃人の時間の余りっぷりに戦々恐々とするがいい。

ジンバルトさんから入手した情報によると、この大陸 『アスガルズ』 が『ミドガルズ』 と呼ばれてたのは遙か昔の事らしい。

今は神生暦348年らしいが、『AKO』 には時系列の設定がなかつたので何百年後なのかはつきりしない。

レベルも普通に100以上に上がるらしく、俺みたいに短い詠唱で魔法を扱える者は見たことが無い と、逆にこちらのレベルを訊ねられたが、彼には相手のレベルを調べる手段が無いようなので同レベル位だと適当にはぐらかしておいた。

レベル328が苦戦する相手にレベル32が共闘出来たってのはおかしな話である。転生なんて便利なものはなく、レベル上限が高いつて事なのかな。

そして、何より俺を驚かせたのが、俺の持つ『デバイスライザー』に似た携帯端末型アイテムをジンバルトさんが懐からおもむろに取り出した事だ。

『デジタルライド』と呼ばれるこの世界の冒険者の必需品「じー」。

俺は携帯電話を操作するケンタウルスのおっさんを田撃すると
う貴重な体験をしたのだ。 なんでもありだな、やっぱドッキリ
だろこれ。 カメラ何処よ？

古今から“異世界召喚”と言えば 神の気まぐれやミスだった
り、巫女服着た美少女に単独や、幼なじみ、はたまた性格が正反対
で腐れ縁の友人と召喚されたりして、迷い込んですぐに窮地の美少
女を救つたり、思わず何処で主人公に惚れたのだ？ って突っ込み
たくなるよつな、やたらと惚れっぽい美少女達を侍らかしてハーレ
ムを作る物だと思って居たんだが……。

そうそう、VRMMORPGから迷い込むつてのもあるな。

「あっ、俺だ

今の所ケータイ持つたの人馬のおっちゃんしか見てないわ。
いや、滅多とない経験が出来たと思って胸を張り誇りうつと思つ。

然もありなん…… そのうちきっと何かあるだろ？

ジンバルトさんは近くの迷宮に用事があると言つので別れた。
彼の話ではこのまま街道に沿つて進むと3時間ほどで街に着くと
の事なので、現在街道を辿つて北へ北へと北進中である。 ケン
タウルス的進行速度なので、時間は少々当てにならないかも知れな
い。

その道すがらに『AKO』の代名詞と謳われていた『魔装』が使えるか否かを試していたつまり、俺はゲームのデータでは無く、本物の生き物を殺したのだ。

特にこれと書いて思い悩んだり感慨に耽る事も無く、普段通りに倒したことになる。

そもそも、俺は聖人君子なる人格を持ち合わせていないし、現実で実在したような魔物ならまだ幾らか躊躇するだろうが、こちらを全力で殺しに来る棍棒を持った体長6m超えの化け物になんの迷いが浮かぼうか。

と尤もらじい理由を並べてみたが、単純にゲームの延長だと感じているからだらう。

危険な魔物が我が物顔で跋扈するこの世界でも、どうやら戦闘を補助してくれる『システムアシスト機能』と能力値はゲームのままみたいなので支障無く生活は出来そうだ。

のんびりと余生も過ごすも良し、この世界を回って見るのも良し、折角のチャンスなんだ。それなりに楽しくて生活出来ればいいんだけどねー。

……あと、異世界に男として呪われたからには、やっぱあれだろ。お決まりつづーの？

ハーレム！ シンデレラ美少女や、ケモ耳つ娘、妹キャラやり、その他諸々とめくるめくキャラクターフフフな超絶展開ツッ！

まさに男の夢、至高、パアーラダイスウツッ！！

「……くくく、はははっ。 あ～あ、アホらし」

ご生憎様。俺にそんな甲斐性は無いし、また刺されでもしたら次に逃げ込む場所もねえわな。

「でも、独りつづーのも寂しいよなー」

欠伸を噛み締めながら腰を上げ、魔力の回復具合を確かめる。8割。大丈夫そうだ。

「ま、異世界旅行と洒落込みますかね。相棒？」

物言わぬ愛杖を背に担ぎ、再び街道を北上する事にした。

「誰かつ、た、助けて下さい！」

それは青天の霹靂だった。

この日、この時、この場所に（何かの歌の歌詞の様だな）偶然俺が居合わせたのはまさに奇跡、運命 否、必然と言えるだろう。

俺はゲームの『AKO』と、現状のスキルの使い勝手に差異は無いかと吟味、工夫、そして試行錯誤を重ねながら北進を続けていた。

事件が起きたのは、長く続いた丘陵をやっと抜け、なだらかな森林地帯に差し掛かった頃だ。絹を裂く様な悲鳴と共に、脇の林から飛び出して来たのは

美しい光沢を放つ黄金色の短い毛髪がふわりと揺れ、スッと伸びた睫毛の下には空を思わず蒼穹の双眸が納まり、陶器の様な白い肌に可愛らしく小振りな唇が映える。

極めつけに思わず護つてやりたくなる様な儂げな美声に、線が細くスラリと伸びた華奢な体躯……まさに、まさに、紛れも無く

美少年……だと？！　ふざけんな。

「」の世界に神は居ないのか。期待を裏切られて愕然する俺にハツと氣付いた少年は一瞬の躊躇を見せたが、瞳に涙を滲ませて飛び付いて来る。

「助けて下さい！　お願ひします」

「やめろ、チヨンジだ！　まずは期待に心を踊らせた俺に謝れ。そして非を認めるなら性転換してからやり直せ」

無茶言わないで下さい。と、俺の腰に手を回してしがみつく少年の襟首を掴んで引き剥がそうと試みるが、儂げな見た目よりずっと力が強い。

だが、俺もこんな展開は納得がいかな。負ける訳にはいかない。

もしやこの世界には男しか居ないのだろうか？　だとすれば呼ばれる世界を間違えた。『アイギスリング』を外して自分に魔法をぶち込んで死のう。

「取り敢えず、落ち着け少年。そして回れ右して消えろ、話しあれからだ」

「それじゃ意味ないじゃ ないですか！　お願ひします……」

おー、そんな縮るような田で見られても……。

「コイツ、よく見れば意外と可愛いじゃないか……ハツ。

なんで俺は惚けているんだ？ もしや俺がヒロインなのか？！いや、それは無いわ。何より、ナニをお願いされてるのか一切不明なんだが。

俺はノンケ、俺はノンケ、俺は……。

「あの？」

「近づ！」

思案モードに引き籠もつていると、息の掛かる距離で顔を覗き込まれていた。このままコイツの近くに居るのはやばい、超えてはならない道をスキップしながら踏み外してやりたくなる気さえしてきました……。

などと俺が脳を沸かせていると、少年が飛び出して来た方向からガサリと物音がして振り返る。

「見つけたわ、ランス！」

「ひつ？！ トリスちゃん……」

じゅぢゅ、俺は死ななくて良さそうだ。茂みから『』を背に担げ、氣の強そうな茶髪のポーテール美少女が出て来た。ふむ、ランス少年はこの機嫌の悪い少女から逃げて來た訳か。痴話喧嘩に人様を

巻き込むのは勘弁して欲しいものだ。巻き込むだけ巻き込んで結局二人で話し合つて和解でもされた日には殺意を覚える。 閑話休題。

まあ、正直面倒臭いが少し位は事情を聞いてやっても良いんじやないだろつかと思えてきた。何より俺はこの世界について情報が少しでも欲しいのだ。俺は意を決して口を開き……え？

「ボクが一番に見つけようと思ったのに~」

「ランス様、急に居なくなつちゃうなんて……酷いです」

「……」

おい、どういう事だ。後ろからそれぞれ種類の異なる美少女が現れて4人に増えたぞ？！

上から ボクつ娘、心酔娘、無口つ娘と仮称する事にした。なるほど、なんとなくだが把握した。つまり、そう言つ事か。

「ランス君と言つたか。状況は理解した、消えうと言つた事は詫びよつ」

俺の背に隠れて怯えるランスに微笑みかけ、宥めるようにして頭を撫でる。すると彼の顔色は見る見るつむに明るくなり希望に

「お前は敵だ。消えうと言わずに、今すぐ俺が物理的に消す。心の狭い俺をどうか赦して欲しい」

染まる事はなく、俺の処刑宣告で一瞬にして青ざめた。

やれやれ、”口は禍のもと” とは良く言つたもんだよなー。
ビうじょう。

「……」

左右の双剣を巧に操るシニアードカット無口つ娘の、息もつかせぬ鋭い連撃を躊躇しながら穩便に済ませる方法は無いかと思案する。
なんでこの娘さんはレオタードみたいな装備なんだろうか？ 相手の判断力を奪うと言つ理由でなら効果は抜群だと評価しよう。

無口つ娘の連撃が途切れ、彼女は呼吸を整える為に俺の後ろを一瞥してバツクステップする。俺もそれと同時に地面に手を突き、しゃがみ込む。

ブォンッ

無口つ娘は俺をここに誘導してたのだろう、しゃがみ込んだ直後に俺の頭上を、背後から大斧が掠めて行く。すかさず斧を持ったボクつ娘に足払いをすると、彼女は自分の振るつた斧の遠心力に身体を振り回されて派手に転倒した。

「……なるほど縞々か」

「つ？！ み、見るなバカー！」

失敬な、ブリーツ!!!で戦闘する方がおかしいだろ。アハハ。 つ
ヒ、やべつ。

「いの、変態っ」

白いフードを被つた心酔娘が氷の矢の束を飛ばして来るのを右前方、左後方と稻妻型に回避する。

「止めてよお～つ！ あの兄さんは誤解だつて言つてんじやないかー」

「アンタは黙つてなさい！」

おひおろじ仲裁を掛けるランス少年と、それを睨みつけて叱咤する トリストリスだつたつけ？

なんでこんな事になつたのかと言えば、彼らの会話の流れから推測するに多分、いつ言つて事だ。

ランス少年は最近暗殺者に狙われているらしい。

フローロモンモンのランス少年の取り巻きである彼女達はランス少年を護つひと、付きつきりで世話を焼いてるらしい。

そして、それに嫌気が差したランス少年が彼女達の隙をついて逃亡を謀る、そこで俺に出会い助けを求めた。

で、俺が彼女らの前でランス少年に向かつて消すなんて言つちや

たもんだから、もう大変。愛しいランス様を狙う敵と認識されてしまったのだ。

俺の『誤解ですう、冗談だつたんですね』。モテない男の嫉妬なんですか』と言つ必死弁解も功を成さず、今に到る。

そりや、俺を弁護するランス少年の言葉も聽き入れず、非武装状態の人間に本氣で攻撃仕掛ける人達からは逃げたくもなるわな。

俺もそろそろ一度に4人の美少女に同時に迫られて（攻撃対象的に）キヤツキヤウフフな状況に飽きて來たので終わりにするとしよう。

夕方には街に着きたいしなー。ついでに新作の使い心地も試さねば。

『AKO』で熟練度を極めたスキルは、決められた制限内であれば自分で好きに設定を弄つて派生スキルを作る事が出来る。そして、それを専用アイテムに刻んで他のプレイヤーに習得させる事も可能なのだ。俺の亀甲縛りも予約が殺到してたのになー……。

さて、コイツは使えるだろうか。 対象数設定、固定、追尾…。 行けそーだな。

「人の話しを聞かない奴は調教だー！」

04・お約束（後書き）

たまには女に襲われる美少年を助けたつていいじゃない。

05・誰得（前書き）

評価、お気に入り登録ありがとうございます

数字がとんでもない事に……ゴクリ

対象をイメージ、数は一人につき、……8本でいいか。後は俺の精神力の問題だッ！ まあ、最終警告はしておこうかねー。

俺は両手を挙げて敵意が無いこと示し と言づか最初から無いんだけども。

「えー、君達。俺の話しを聞き賜え。正直ランス君の事は本当、微塵も、これっぽっちも歯牙にかけるつもりはないので、迅速かつ確便に黙つて武器を引いて見逃してくれ」

「 そんなのっ！」

「 はい、決裂っぽいです。弓に矢を番えながらこちらを睨みつけ吼えるトリス嬢。やだ、怖い。

「 そいつか、心苦しいよ。俺も出来ればこんな事したくなかったんだが……」

「 などと心にもない事を然も沈痛な面持ちで吐いてみせる。関係ないけど腹減つたな。

「 あー、この世界の女の子って皆こんな感じなのかね？ だとすれば行く先々で俺は辟易としなければならない。ランス少年から漂う魔性のフェロモンが人を狂わせる、とかであつて欲しい。

「 まったく。意氣揚々と美少女を助けて” The・異世界” つてイ

ベントを体験してみたかったのだが、美少女に襲われる美少年を助けるってなんなの。夢とは斯くも儂く朧げな事か……。

まあ、ハーレムなんて実際苦労するんだろうね。ランス少年も大変だな……めんどくさ。街についたら何食べよう。

「黙れっ！」

夕飯の献立を考える俺目掛けて彼女が放った矢を手刀で叩き落とす。トリス嬢の持つ弓は『必中の弓』、効果は読んで字の如くだ。躲しても数分は矢が付いて来るからたたき落とすなり、なんなりしないと防げない心底鬱陶しい武器だ。あれってリア度高いんだけどな……彼女の弓は200にも達してない様だし、この世界だと有り触れてんのかね？　そういうや、この世界も『AKO』の時と食料品つて一緒なのかな。俺、焼き魚好きなんだよなー。

とにかく、彼女の今後の為にもいじはビシッと言つておかないと。疑わしい人物に問答無用で攻撃を仕掛ける様では危険窮まりない。今までどうやって過ごしてたんだろうか。　ああ、肉じゃがもどきも捨て難い、改めて思うけど仮想現実で食べ物の味を再現出来るつて凄いよな。

さて、杖無しだとエリ七値が低くて制御面に多少の心配があるが……発動つと。言わばこれは愛の鞭だ。そして、今日の夕餉は焼き魚に決めた。わざわざ街へ行こう。

「　人の話しさ、きちんと聞きましょうー！」

『リグル・ワーム』

とっくに発動待機時間を終え、抑えていた魔力を解放する。《バインド》を更に弄くり倒して改良を重ねたものだ。複数対象を同時拘束可能な頼もしい触手君達である。

ここに来る道すがら色々試してみたけど、《AKO》時代の時よりも設定の自由度が上がっているみたいだ。“対象を拘束”と言つ命令だけは不变っぽいから応用は利かないけどな。

俺、いつかコイツらを自由自在に使い熟して、一瞬で大人数を亀甲縛りにするのが夢なんだ……。

と、戯れ言はさておき、設定の幅が増えるのは大変遊び甲斐がある。本来は光りの粒子帯である為に黄金色をしているが、わざわざ色の設定までしたのだ。ただ。ピンク色にしただけなんだがね。とても……卑猥です。色つて不思議。

さて、一人につき8本割り当てられた触手君達が彼女らの足元から出現し、拘束。突然。ピンク色のウネウネに四肢を拘束された彼女達は口々に悲鳴をあげる。

「なつ……」
「……」
「なんだよこれー」
「魔導師?!」

彼女達は一様に驚愕の表情を浮かべ顔を見合わせる。そういうや俺、体術しか使ってなかつたもんな。あれだけ攻撃を躊躇して動いていたから意外に思ったのだろう。

「うわーん。服の中に入つて来ないで～」

……あれ？ ランス少年なんで君も縛られてるの？ 彼の衣服の中に触手が侵入し、頬を赤らめて身をよじらせている 誰得だよ。それを見てトリス嬢が見目麗しい顔を大きく顰めて憤慨する。

「あんたやつぱりランスをつー！」

謂れのない酷い誤解だ、死にたい。美少年を触手で嬲る暗殺者つて斬新過ぎるだろ。そもそも俺は暗殺者でもないし、そんな趣味もない。残りの名も知らぬ三人娘達が俺に向ける視線もどこか冷たいものを含んでいる。

どうやら『リグル・ワーム』はまだ調整の余地がありそうだ。工件値とかの以前に彼女ら拘束する、5人×8本＝計40本の触手をいちいち脳内で制御出来ない、それぞれが好き勝手に身体をまさぐっている状況だ。

考えて見て欲しい。人の腕は2本しかないが、それが急に38本増えた様な感じだ。とても操りきれん、企画倒れも良いとこだ。

いや、俺はいつか必ずやり遂げて見せる。せつかく熟練度を極めたんだ、とことん突き抜けるしかない。

「下種が」

「……」

「変態つ！」

「もうお嫁に行けません」

いいや、クリエイターと呼んで頂きたい。ランス少年が静かだと

思つたら恍惚とした表情でビクンビクンと痙攣している だから
誰得だ。

どうした事が……彼がこうなっている状態では、とても穩便に事が運ぶはずがない。そもそもなんで一人だけそんな状態になつてるんだよ。俺の状況は悪化の一途を辿るどころか、超特急でほぼ直角の坂道を駆け抜けていくようだ。主に自業自得で。

”一刻でも早くここから立ち去りたい” そう決意した俺に一片の隙もなかつた。

「《解除》」

本当に敵意はないと言つ事を示す為にランス少年のバインドだけを解除し

「さりばだつ」

踵を返して一目散に街に向かつて駆け出した。距離的にはもう1時間も掛からないはずだ。そもそも最初から関わる事が間違つていたのだ。俺は人の話を聞かない彼女に刺されたばかりである。

暖簾に腕通し 平和にお話し合いで解決出来ないなら逃げるのが一番だ。

魔力供給を断つてるので彼女達の触手も数分と保たないだろう。ランス少年には観念して俺の代わりに立派なハーレムを築いて欲しい。俺には無理だ。

嘆息して空を仰いで見れば、少しづつ口も傾き始めてきている。

俺は速度上昇魔法を掛けてペースを上げる事にした。

05・誰得（後書き）

そのうち残りの三人もきつちり描写したいなあ。

06 · だがそれがいい（前書き）

ちょっと中途半端な感じであります。風景描写が苦手過ぎて発狂しちゃう。
。 。

道の左右を鬱蒼と茂る樹木に挟まれた、何処か既視感を覚える街道を駆け抜けた事、数十分。

空が夕暮れの紅を差し、辺りがすっかり薄暗くなつて来た頃森林の切れ目の先に伸びた、なだらかな丘を登ると、途端に視界が開けて思わず息が漏れる程の風景が一望出来た。

丘から見下ろす眼下には、濃い緑の絨毯がいっぱいに広がり、茜色の空との絶妙なコントラストを魅せ、遙か北に視線を向けると雲霞を纏う連峰が壮大な存在感を放つている。

「 はは、すっげー……」

仮想世界でも見事に現実と見紛う様な風景を再現していたが、これはそれとは一線を画していた。頬を撫でる風も匂いも、微かに肌に感じる湿気もなにもかもが……言うなれば、そう。まさに”本物みたい”と言つたところだ。上空から聞こえる甲高い鳴き声に視線を向けると、逆V字型に連なつて隊列を組み飛翔する鳥系の魔物達の姿も見て取れる。

俺は街道で覚えた既視感を払拭する為に、景色を眺めながら暫し頭の中の記憶を掘り起こしてみる 草原を越えた先の平地に、北

の山脈の方から東側に流れるの大河と、灰色の石垣に周囲をグルリと囲われた街が見えた。

それが、いつかゲーム内で見た情景と見事に符合した。ここはミドガルズの南部の様だ。そしてあの街が、南部の交易の中心地『商業都市フランチエス』だ。

……今世界はアスガルズつて名前になつてゐるし、街の名前も変わつてゐるかもな。

いや、やつと此処まで来ることが出来たな。速度上昇を掛けて割と本気で走つてきたのだが、途中で休憩を挟みながらの進行だったので、思ったよりも時間が掛かってしまった。

元々ゲーム中にも再現されていた疲労感だが、それは設定されたスタミナゲージなる物が消費されたら身体に僅かな疲労感を感じる程度で、その疲労感は立ち止まってゲージが回復すれば即座に消え去る物だった。

しかしあま当然と言えば当然の事だろうが、この世界だとそう簡単にはいかないモノで、歩いてる時には大した疲れを感じなかつたが、走れば走る程疲労感は確実に蓄積されていき、ゲームの様にすぐに回復復活とはいかず、しつかりと呼吸も乱れるし、身体の倦怠感も顕著に現れる。

試しに一時的な超高速状態になれるスキルを使用してみたが、結果は言わずもがな、予測通りと言つか……マラソンをスタートから全力疾走する様な物だった。あー、吐くかと思ったわ。

現実の時よりも、ずっと体力は強化されてるみたいだけど、ゲー

ムの時と同じ様に立ち回ろうとすると痛い目を見るだらうな……慢心せずに、これはしつかりとした”現実なんだ” と、心に刻み込んでおかなればならない。

実際死んでみないとわからんが、HPが0になればリスボーンと言つ訳には行かんだろうしな。と言つか十中八九死ぬだろ。

色々とスキルの使用感について考察する事も必要かな。いきなり実戦で使って思わぬ事故が起きないとも限らない。 とまあ、頭を使うのは後だ、後。

ともかく今は腹を満たすの方が先決だ。人間の身体とは現金なものであり、目的地が見えた事によつて身体の疲労感は吹つ飛び俺の脳内の最優先事項は、好物の焼き魚を胃に納める事でいっぱいになつてゐる。

街の目の前に着く頃には復活した氣力も再び擦り減り、身体もずいぶんとへトへトになつてゐた。

ゲームの時はパーティメンバー募集等で活氣があつた南門だが、ここでは魔物の出る南側からやつて来る人は少ないみたいで、夕方と言つ事も重なつてか人の数は随分疎らだつた。東側には海と港町があつたと思うので、そちら側から来の方が多いのだろうと思う。

「お疲れ様でーす」

揃いの紺色の制服を着て、槍を持つ一人の門番らしき中年と青年に、軽く手を挙げてアーチ状の門をくぐり抜ける。特に彼等に身分の証明を求められる事はなく、会釈が返つて来た。魔物の警戒をしているだけなのだろう。

確かに南側にはNPC兵士の詰め所の様な建物があつたと思つたんだが、それは今も変わつていないので、入つて左手側には見覚えのある赤茶けたレンガ作りの頑丈そうな建物と大きな運動場様な物があり、そこでは門番と一緒に制服を来た人物達が歩いてるのが見て取れた。

色々と観光してみたいのはヤマヤマだが今日の所は疲れた身体を労つて、散策は明日の明るいうちに行つとしよう。確かにプレイヤーが泊まる事の出来る宿が西側にあつたはずだ。大小様々で、形も色も不規則な石置が敷き詰められた道を懐かしむ様に踏み締めて街の西を目指した。

幸いな事に移動中に耳に入る会話は全て日本語で理解できるし（まあ、今更だが）、街で見かける看板等の文字もひらがな、カタカナ、ローマ字等で不便はなさそうだ。さすが国産MMOが元の世界と言つた所だろうか……いや、都合はいいけどや。

「ん、着いたー」

どうやら宿泊施設の位置もゲームと変わつていないので、俺は迷う事もなく辿り着く事が出来た。南部側の中心都市と言つこともあってか街は活気と喧騒に溢れ、普段通りゲームをしている様な錯覚に陥いる。

「違うと言えば」

小さく咳き周りを見渡して見ると、視界に移るのは雑多な人外の人々。『AKO』のプレイヤーの種族は人間しか選べなかつたが、街やクエストのNPCとしては色々な種族が存在していた。

そして必然(?)的に美麗なエルフ娘やケモノ耳幼女、他には吸血姫と呼ばれる、とあるクエストで共闘出来るNPCなどは諸兄達から極めて人気が高く、有志を募つてファンクラブなるモノが乱立し、『ケモノミミ幼女を愛でる会』に始まり、ミニスカート姿のNPCの周りには正座や体育座り待機で長時間、果てには一日中眺め続ける猛者達までもが現れた。

さすがに他の真っ当なプレイヤーからの苦情が殺到した為に、そのNPCの周りで数分以上静止しているとNPCが恥じらいながらプレイヤーに雷を落として即死させると言う仕様になつたが、『だがそれがいい、寧ろご褒美だ』と言つた中毒者を多数輩出する事と相成つたのも記憶に新しい。

先ほど述べた基本的な種族以外にも、額に三ツ目の瞳があり、吊り眼が多い種族^{トレス}、耳に魚のヒレの様な物がついた女性だけの種族^{セレーン}、背中に翼の生えた『ピュイア』等など。プレイヤーが人間しか選択出来ないと言つのにNPC種族の多さには驚かされたものだ。

いつかプレイヤーキャラとして実装されるのが夢だつた種族達が俺の目の前で歩いているのを見ると自然と頬が綻ぶと言つ物だ。あのエルフ殆ど裸じゃねーか……けしからん。いいぞ、もつとやれ!

「 つと

なんとなく周囲の俺に向ける視線が不審なモノになつたので、そそくさと近くの宿に飛び込むとする。

「いらっしゃいませ。一召様でござりますか？」

俺を迎えたのは、腰まである黒髪を後ろに撫で付けて縛り、モノクルを掛けた初老の執事？

「あ……そうです。部屋空いてますか？」

なんでこの人執事服なんだ？ 中の内装は一階部分が酒場兼食堂になつた。どうみても普通の宿と言つた感じなんだが……いや。気にしたら負けだ。

内心に渦巻くツツコミ衝動を押さえ込み、俺はスルースキルを磨く事にした。今じゃ執事服がデフォなのかも知れん。

「あら、いらっしゃい。お泊りですね？ 空いてますよー」

「（な……ん……？）」

と、後ろから現れた妙齢の女性は、普通に動き易そうなワンピースにエプロン姿だったのを見て俺の心に衝撃が走つた。……が、こんな事くらいで俺はくじけない。執事の男性を一瞥しつつ女性に代金を訊ねる。

「一泊、何ルクスですか？」

「え？ と、朝夕食込みで一泊500ルートからですか？……」

「え？ ルート？ ……もしゃ 僕はメニューを開いてイベン
トリから『AKO』の通貨である100ルクス硬貨を5枚取り出し
て彼女に見せる。

「……あ～。」めんなさい、お客様。何処のお金かわからんないけ
ど、うちじや と言うか、この国じや これは使えませんよ

10ルクス硬貨を一枚手に取り、裏表を物珍しげにしげしげと眺
めると、女性は申し訳なさそうに苦笑して硬貨を返す。

……つまり、約4億ある俺の手持ちのゲーム内通貨は「」の世界で
はなんの価値もなく、文無しらし。

「（俺の、焼き……魚……）」

06・だがそれがいい（後書き）

MMOに限らずNPCモブキャラでやたら人気なキャラって多いですよねー。

宿屋の幼女枠を切り捨て、執事爺を投入。彼の今後の活躍に、期待下さい（？）

07・アフリカ、嫌いじゃなによ？（前書き）

登録評価ありがとうございます！

乳白色系の煉瓦作りの建物が整然と軒を連ね、隣り合つ建物同士が、魔石を燃料とする灯籠の備え付けられたアーチで等間隔で結ばれている。灯された燈籠が柔らかな螢光を放つて街頭を明るく照らす。

通りではまだ日も落ちたばかりだと言うのに、顔を赤くして気分よさ氣に肩を組んで歩き、すっかりと出来上がつてゐる男達や、鎧等を纏つた冒険達のパーティーの一団、母親に『はやく、はやく』と、はにかんで手を振り催促する子供、腕を組んで身を寄せ合ひ仲睦まじげに歩く男女等など　『向こう』となんら変わらなく人が生活しているんだな、と感じさせられる風景に笑みが零れる。

「（なんつーか、良いな）」

元の世界が恋しい訳ではないが、別世界でもこう言つて安寧を感じるのは心底嬉しい。　外にや魔物とかも居るけどなー。

ま、これで俺の隣にも愛しい人が居れば最高なんだがね。　幸せそなうなカツプルが羨ましいぜ……。　幸せになれよ　いや、爆発しろ。思わず心がほつこりして毒が抜けちまつたぜ……、自重しよう。

「つと、あつたあつた」

賑やかな街の雰囲気を愉しみながら散策する事約10分。剣と盾の絵が描かれた看板を掲げ、外壁に薦が蔓延つた大きな酒場風の建^キ物^{ルド}に辿り着いた。

いやー、一文無しで飯も泊まるとこも無いからアイテム売つて換金しようつて魂胆なのですよ。

宿で執事のおっちゃんに訊ねてみた所、魔物の部位は基本的にギルドとかでしか扱ってくれないらしいわ。ゲームだと買物が出来る店なら何処でも買い取つてくれたんだが、目利きの問題で無理らしい。致し方ないか。

他にも買い取りを行う商人に売り付けるつて手もあるらしいが、いちいち探すのが面倒なので却下。ギルドは宿泊施設帯のある西区に居を構えるので、散歩がてらに辿り着く事が出来た。途中の屋台の食い物の匂いに何度理性を失い掛けた事か……つ。閑話休題。

そんな訳で俺は、両側開きのシンプルな茶色い木製扉を意気揚々と開いて入店。

元々『AKO』と言うゲームのギルドは俗に言う冒険者の依頼仲介所¹と言つ役割はなく、そこで行われているのは『魔物の素材の買い取り、稀に討伐が依頼される賞金首モンスターのクエストを受けれる』と言つたモノで、基本的にクエストは街中のNPCに話

しかけてプレイヤー自ら探すと言ったスタンスなのだ。

もちろん開発者が巧妙に隠したクエストが発見される度に専用掲示板は祭状態、対応NPCの前に行列が出来るのは毎度の事だつた。隠しクエストの最後に出てくる魔法攻撃力のやたら高いボスモンスターの盾にされ、皆で俺をグイグイ押さえ付けるもんだから、途中で通常攻撃の一撃で俺が即死して皆に盛大に噴かれたのも今では良い思い出だ。

とまあ、ゲーム上では印象の薄かつたギルドだがここでは正常に機能しているらしく、一般的なゲームの様にギルドで依頼を受注する感じになっているみたいだ。

扉を開けてすぐに視界に移るのは屋内の中央に鎮座する円形のステージ。ここにギルドは酒場も兼ねていて踊り子のショー等も行われるのだろう。ゲームの時にも定時がくれば際どい格好のNPCキャラが、楽隊の奏でる民族的な音楽に合わせ妖艶に舞つていたと思う。

ステージを囲む様にして四角い木製テーブルが並び、客層は言わずもがな、おっちゃんばかりで席はほぼ満員だ。異世界にありがちな荒くれ者の集まる酒場と言う雰囲気はなく、皆楽しく飲んでいるようだ。

左手側は半透明な仕切り板で区切られたソファ一席になつてあり、こちらには若い客層が多く見て取れた。入口の右手側にあるカウンターからウエイトレスの女性が途中でお尻に手を伸ばす客の頭を引つ叩きながら、せかせかと注文の品を席へと運んでいる。いいのかそれ（叩いて）で。

ふむ。俺もショーカーを見てみたい気もするが、今はギルドだ。と言
うか飯だ。魚だ。焼魚だ。後ろ髪を引かれる思いで席の間を摺り抜
け、ステージ脇に設置された階段に歩を進める。

幅が広く緩やかな弧を描いた階段を登つた先の通路脇には掲示板
が張つてあり、その前で真剣な眼差しで首を捻り、壁に視線を巡ら
せている人達の姿があつた。

俗に言つ《依頼書》ってやつだらうか？ 俺も興味本位で彼等の
横に並んで達成期間がフリーとなつている依頼書を流し見てみる。

「（どれどれ……）」

『父の仇を取りたいんです。グランザ山脈の《死竜》を討伐して下
さい』

『ほう。仇討ちか……。

『求む、オリハルコンの総入れ歯』

えつ、何を喰う氣だ？ そんなに硬い煎餅でも存在するのか。
立派な武器になるだろうな。

『チームメンバー募集。年齢20歳前後 種族不問（出来ればエルフ） 支援魔法の使える方 スタイルが良いと尚、良し。髪の色は～～（中略）～～そして美少女に限る（出来ればエルフ）』

具体的過ぎるわ、阿呆。どんだけエルフ強調すんだよ。……だが、決して自分の欲望に妥協を許さないその心意気や良し。俺、アンタの事嫌いじゃないぜ……？ 隠ながら応援させて貰うとしたう。

『逃亡』を謀った《勇者・テルテル》の捕縛。特徴：人間族 年齢4
3歳 ～～（中略）～～ 生死問わず』

……ツ？！

依頼書は、まともそうな物からこんなのは誰が受けるんだよって奇抜なモノまで多種多様な内容となっていた。これを見た感じだと受付で頼めば、割とどんな事でも受注してくれるっぽいな。請ける奴が居るかは別として。

通路を突き当たった先の扉の上を見ると《素材換金所》と書かれたプレートが張つてある。素材の換金を終えたと思われる若い男女の三人組が出て来た。

腕を組んで前を歩く金髪の派手な男女は恋仲かな。その後ろから少し間を開け、前の一人と比べると随分と地味なショートボブの女の子が追随している。三人とも顎を綻ばせている様子から、手応えのある収入があつたのだろうと窺い知る事が出来た。

「（俺もほくほく顔で宿に帰るんだぜ！）」

妙なテンションのままノブのついた換金所の扉を開くと、宴会場の様な一階部分とは打って変わつて落ち着いた雰囲気を醸し出す空間となつてゐる。

部屋の中央に円形のモノがあるのは変わらないが、ここにあるのはステージじゃなくてギルド職員が受付をする円形カウンターだ。

紺色を基調としたシックな内装と調度品、ツルツルとしたタイル質の床に天井には意匠を凝らしたシャンデリア。持ち込んだ品の鑑定中に簡単な飲み物を頼めるのかサービスなのかはわからないが、左手側にはドリンクカウンターが設置されている。

右手側にはふつくらとした坐り心地の良さそうな三人掛けのソファーが何脚も置いてあり、大欠伸をして伸びをする男性や雑談に花を咲かせる女性達、優雅にティー カップに煎れられた飲み物を口に運ぶ白髪の壮年男性等が座つて寛いでいる。

受付のギルド職員にトランプ大のカードを差し出す青年の姿を見て、俺は安堵の息を漏らした。

「（ああ、よかつた。素材の仕様は変わつてないみたいだな）」

『AKO』は全年齢向けのゲームなのでモンスターからいちいち素材を剥ぎ取ると言つた動作は必要なく、倒した魔物の素材所謂『ドロップ品』は『デフォルメされたイラストの描かれたカード』として各自のインベントリに自動送信されるのだ。

そのカードを用いて装備を作つたり、強化したりと使い道は様々だつた。と、ここで一つ疑問があるんだが、今日倒したオーガキングのドロップが入つてないんだよな……。

倒してから一分程で死体が光の粒子になつて消滅……ここまではゲームと一緒にだつたけど、ドロップ品の入手は無し。何かカード化する方法が別にあるのかも知れん。要検証だ。

「こんばんは、すいませんけど、これの鑑定お願ひします」

「はい、こんばんは。どの魔物の部位でしうか？」

インベントリ内から所持数に大量のストックのある『黒殻翼竜の外殻』のカード一枚実体化させて受付の女性に差し出す。

「はいはあーい、少々お待ちを……？」

女性は愛想の良い笑みを浮かべてカードを受け取り、視線をカードに向けると一瞬の間の後、眉をひそめて表情を固ませ、こぢらを向つように一瞥して首を傾げ、再びカードに視線を落とす。

「……あの？ 何か……？」

田を剥いて驚愕の表情を浮かべた彼女の唇がわなわなと震え

「じゃ、シユガヴァルジヨイド素材~~~~~ツ?」

耳をつさざいく彼女の絶叫が部屋に響き渡り、室内に居た者達が身体を跳ねさせて一斉にこちらに振り向く。

……ボス素材はダメだったか……？

07・やつし所、嫌いじゃないよ？（後書き）

果たして、主人公の腹は満たされるのか……つ？！

ドロップ補足

チームを組んでいる場合はメンバー各自にランダムでアイテム振り分け（ログは見える所にしっかりと残る）

『黒殻翼竜・シュヴァルジェイド』 通称、黒鎧トカゲ。ありていに言つなれば、黒い甲殻を纏つた尻尾の長いワイバーンと言つた所か。生物的な目に当たる器官がなく、嗅覚と聴力に特化した羽トカゲ様で、『AKO』のボスモンスターの中では中級の強さだ。

飛ぶわ、硬いわ、状態異常が鬱陶しいわで近接系のプレイヤーが倒すのはそれなりに骨が折れる相手だが、魔導師系プレイヤーにとっては魔法が効きやすく、比較的に安全に倒せる上に防具の強化用鉱石を確実にドロップするので絶好の力モにされていた。

誰でも条件さえ揃えれば一時間に一度は戦える事と、出現場所が『クエストダンジョン』で独占出来ると言う事もまたそれに拍車を掛けている。

つてのが俺の認識だつたんだが、こつちだとどんな扱いになつてるんだろうか？ バランスにも因るがレベル200相当の六人チームとかなら、苦もなく終始安定して倒せるはずだ。

最初に見たジンバルトのおっさんのレベルが特別高いつー訳でもなく、ここに居る冒険者のレベルを見て見ても200近いのはちらほら居るし、別段珍しいモノでも無いと思つたんだがなー。

「幻の
「一体何処で」

さすがに周りのじよめきと視線に耐え切れなくなり受付のおねーさんに苦笑いを浮かべると、彼女もハッと我に返つて併まいを正して咳ばらいをする。

「失礼しました。あの、こちらを一体何処で……？」

彼女は懷疑心の籠つた視線で無遠慮にこちらを窺つ様にして訊ねる。

ふーむ、大して強くもない魔物の素材で驚かれ、尚且つ『幻』つて単語を漏らす周りの反応を見ると、会う為の条件が明らかになつてないつて所だろうか？ それか、とっくに絶滅しちまつてるかつてどこだろうかね？

そんなに珍しいんですか？ つて質問で返すのは藪蛇だよな。となれば

「……うちで古くから伝わる家宝なんです……」

「……つ？！ なるほど、そんな大切な物を本当に売つてしまつても宜しいので？」

俺は全身からありつたけの悲愴感を醸し出し、不本意だが然も手放さなければならぬ切迫した事情があるかの様な演技をしてみせたが、どうやら当たりらしい。彼女が憂いた表情で怖ず怖ずと問う。や、全然問題無いつす、在庫大量ですからねー。なんかごめんなさい。

「はい……、俺には今すぐに現金が必要なんです」

主に夕飯の為に。俺の葛藤の末に迷いを切り払つた(かのような)

真剣な物言いに、職員の女性もそれならば、と頷いて了承の意を示す。

「そうですか……、私どもとしましても滅多に市場に出回らない素材を売つて頂けると大変助かります。 ギルドに登録はなさりますか?」

「あー、登録しないと買い取り不可だつたりします?」

だとしたら登録しなくちゃなー。住所登録とかあつたらどうすりやいいの……。と俺が考えるのも束の間に、女性はカウンター上に置かれたA4大の冊子を開き、まるでパンフレットの様なソレの内容を指し示し説明を続ける。

曰く ギルドに登録しないれば買い取り価格に色がつく。

曰く ギルドに登録しなくとも依頼を受ける事は可能。

なるほどね。搔い摘まんで説明して貰つたが、かみ砕くとこんなとこか。

ギルドは仲介所つてより、“冒険者”つつい職業の支援機関みたいな感じ。未登録でも依頼やサービスを受ける事は出来るが、高い初期登録費用と年会費を納めれば携帯端末デジタルライドが支給され、ギルドのサービスを割安で利用出来る。登録者の死亡時には残された遺族にギルドから補償金等が支払われるらしい。

……なんか誰でも簡単になれるつづりイメージと違つて、しつかりしてそうだな。携帯持つてたジンバルトのおっさんはギルド登録

者つて事か。

ちなみに携帯の機能は埋め込まれた共振魔石を利用した念波通話、自分の行つた事のある範囲のMAP機能、有事の際の身分証明等など便利機能が備わっているらしい。俺の『デバイスライザー』とはまた違つた機能みたいだなー。ちと欲しいかも。

登録していないが売つても問題無いとの旨を伝えると彼女は一礼して微笑む。

「では、この札を持つてあちらの席でお待ち下さい。宜しければこちらの資料もどうぞ」

彼女から数字の6が書かれた木札と説明に使用したパンフレットを受け取り、誘導されるままに空いているソファーに腰掛け感触を確かめる。むう、うちの固い安物ソファーと違つて、なんと言う高級感。そろそろ買い替え時だと思ってたんだよな……って今は気にする必要ねーか。

甚く庶民的な自分の思考に内心で自嘲しつつ、ソファーの背もたれに体重を預けて天井を仰ぐ。つはー。しかし、この調子じゃ『破滅の錫杖』^{ルインス・ゲート}に限らず、俺の持つてる他の武器とかもやばそうだなあ。

趣味で使わない武器まで収集してるが、高位のレアドロップ品とか下手すりや神器級の扱いされてそうだよな。素材についても意外な物が貴重だつたりするかも知れん、今後はその辺も要注意だな。

「おー、あんちゃん

ぼんやりとシャンデリアを眺めていた視界が突如塞がれ暗くなり、何事かと思えば俺の背後から強面の大男がこちらの顔を覗き込んでいる。これはあれだろうか？ よくある、ギルドで絡まれた挙げ句、相手を圧倒的な力でのしちゃうアレですか？

「……なんでしょ、か？」

「お前……その若さで苦労してんだなあ、グスッ」

恐る恐る訊ねてみれば、2mを超えるであろう大男が俺の頭上で目尻いっぱいに涙を溜め、俺の太もも程の大きさのある腕の甲で顔を拭いながら嘆び泣く。

……えつ？ この展開は読めなかつたわ。もしかして同情される？

「 わりいわりい、ちょっとお前さんの事情が聞こえちまたもんでな」

橙掛かつた燃えるような真紅の長髪を後方に流し、野性的で豊富な眉毛に瞳孔が縦に割れ獰猛さを感じさせる鋭い双眸は髪と同じ真紅。彫刻の様な造形の逞しい鼻筋に口元からは鋭い犬歯が覗く。

臙脂色のレザー「ートを着こなす強面の大男が俺に対面してソファーに座る。見たまんま赤龍系の『ドラグニル（龍人）』の壮年男性だ。大柄な彼が座ると二人掛けのソファーも小さく見える。

「ええ。まあ、色々あつまして」

小セジスローン一杯分程の罪悪感を感じつつも話を合わせる。周りが男泣きする彼に向ける生暖かい視線から予測するに普段からこんな感じなんだろうと容易に推測出来た。

「わっかそうか、俺んとの娘と歳もあんま変わんねえのに……俺の名前はガアヴ。あんちゃんの名前は？」

「俺は……」「一キと言います」

「わっか、一キか。良くな前じやねえか！」

即興で一キと名乗つてみたが殊の外好感触いにしがれ。よし、今日から俺は一キだ。……もちろん由来は俺の極めるべき道から取つた。悔いはない、本望だ。

その後もガアヴのおっちゃんと当たり障りのない嘘を交えて他愛ない会話を楽しんだ。墓穴を掘る訳にはいかんので、適当にはぐらかしつつ聞くに徹したが話の内容から特にこれと言つて得るモノはなかつたな。

唯一の収穫はシュヴァアルジエイドは昔から存在こそ噂されているが、出てくるのは古くから残された素材が稀に発見されるのみで、直接討伐して素材を手に入れるなんて事は数百年の間ないらしい。ここから近い事だし、今度検証しに『クエストダンジョン』に挑戦してみるとするか。

そんなこんなで、ガアヴのおっちゃんの『出稼ぎ』に出てるんだが、たまに家に帰ると居場所がない』と言つなんとも世知辛い話を聞いてると、俺の番号札の数字である6が読み上げられたので、話しを切り上げ彼に別れを告げる。

「おう。俺はこの時間に大体ここに居るから、なんか困った事があつたら相談しろ」

「あ、はい　いでででで」

のそりと立ち上がつた彼が二ツと男臭い笑みを浮かべて俺の肩を叩く。ちょ、おっさん力加減考る……よ？　不意に彼が腰に佩びた一振りの刀に目が留まる。漆塗りの簡素な作りの鞘に納刀されているが、俺の記憶が確かならアレは

「……ガアヴさん、ソレつて」

「ああ、コレか？　『雷切』って武器だ。ヴァリアントヴォルグつてデッカイ豹を仕止めた時に手に入れたんだ。結構な業物だぞ、力カカツ」

肩を上下させて豪快に笑う彼に合わせて俺も頬を引き攣らせ苦笑する。『破滅の錫杖』ルインス・ゲート級の武器じゃねーか！　シユヴァルジエイドの素材より、そつち『雷切』のがやばい代物なんだが……ますますこの世界はわからん。

とにかく色々調べるのは後回しだ。さっさと料金受け取つて今日はゆっくり休もう。明日市場を覗いて物価の勉強も必要だな……。

暫く座つていた為に生じる四肢の倦怠感を伸びをして払い飛ばし、受付へと向かう事にした。

08・出稼ぎついで大変（後書き）

龍人の幼女？　いいえ、龍人のワイルド系おさーん追加です。

華が足りない？　承知の上です、フヒヒ

ちなみに、亀甲　きつこう　きつこー　こーき
安直でごめんなさい。

09・前途多難（前書き）

遅くなってしまった、少々文量を減らしました。

照明魔法を封じた魔石のランプが控えめに灯り、室内は心地好い薄暗さに包まれて落ち着いた雰囲気を醸し出す。

20畳程の広さの酒場兼食堂を見渡せば、その風貌から冒険者と思わしき人々が多数を占め、それぞれが気の合つ仲間と机を囲んで陽気に食事をとっている。

目の前には淡い水色のテーブルクロスが敷かれた木製の丸テーブル。卓上にはこれまた木製の食器類が整然と並べられ、そこから放たれる温かな湯気と食欲をそそる香ばしい香りが鼻孔をくすぐる。

米が一粒一粒立つた銀シャリ、サツマイモや海藻類の入った味噌汁風（無色透明）の吸い物！　そして季節的には春だと言うのに、季節感を無視した日映く銀色に輝く秋刀魚モドキ！

いや、好きだけども。風情と言つか、匂と言つか……鰐とかも好きなんだけど！　つて異世界だから匂とか、わからねーや。ゲーム内でも特別な物以外は年中食べれたしなー。

結局、俺の売ろうとした『黒殻翼竜の甲殻』は30万ルークでの売却と相成った。“幻”とか大層に言われてる割にはとんだ肩透かしを喰らつたが、ゲーム時に店売りした時の価格が7千ステラと

言つ事を考へると十分破格だな。

そして思わぬ収入に意氣揚々と宿屋に凱旋し、念願の夕飯に有り付く事が出来たのだ。ギルドの場所を教えて貰つた事もあつたので、最初に入つた執事の爺さんの居る宿屋《雪鳥の止まり木》に取り敢えず三日契約で泊まる事にした。

色々と不安もあつたが、夕飯に焼き魚の定食を出せると聞いて即決したのだ。ああ、ちゃんとこの世界にも箸があるのが嬉しいな。味噌汁（？）も見た目には違うが、ちゃんと味噌の味がするし……。

ただ一つ不満があるとすれば醤油が欲しい。魚は塩味が効いてて十分に美味しいのだが、何か物足りない。……いや、それは贅沢つてもんだな。今この現状に感謝して

「ヨーキ様、どうかなさいましたか？」

「おおう。何もないテス、料理美味いっす」

味噌汁を啜つていると、気付かぬうちに執事さんが俺の横に直立して控えて居た。……この爺さん、気配感じないんだよな。味噌汁噴くかと思つたわ。

突然何事かと訝しげに爺さんを一瞥すると、彼は表情を変えずに何処から取り出したのか白い液体の入つた小瓶を取り出して卓上に置き、コホンと小さく咳払いする。

「ヨーキ様。こちら試作段階の調味料なんですが、もし宜しければご賞味いただけませんか？」

「ほほう、試作品とな？」

「さようじやります。コウセの果実を用いて作ってみたのですが、直接お客様に味わって頂いた方が今後の研究の為にもなるので」

そう言つ事ならば、と白い液体を一滴指に垂らして味見してみる事にした。……ん？　この芳醇な香りに、口当たりの優しいまろやかな風味はまさに……。

「醤油……つ……」

色こそ違うが、この味は濃口風……だな。そんなに塩つ辛くなくて調度良い風味だ。つーか美味しい、刺身が欲しい。

「いかがでしょうか？」

「……執事さん。あんた最高だぜ」

「　恐悦至極。それと、私の事はお気軽にバトラーとお呼び下さい」

それ、意味的に一緒にやね？　と疑問に思いつつもバトラーさんにサムズアップして見せると、彼も試作品を褒められて気を良くしたのか、したり顔でモノクルの縁を指でクイッと持ち上げると優雅に一礼する。

異世界人の口に合うのかわからないが、日本人の俺には直球ど真ん中の出来だ。商品化すれば一山当たられるんじゃなかろうか。まあ、売れなくとも俺は個人的に購入したいと思つ。頑張れバトラー。超頑張れ。

「ふつかふかだ、ふつかふか」

バトラー作の醤油（仮）で焼き魚を美味しく頂き、シャワーで汗を流した俺は部屋のベッドを絶賛堪能中。

『AKO』の無駄な娛樂要素が残つて助かつたぜ。浴槽こそなかつたが、室内には簡素なシャワールームが完備されていた。確かに西の『ウェストヒートランド』地方は温泉が湧いてて、浴槽がある街もあつたな。

はあ。しつかし、ゲーム内で飯を食つた後にいつもの習慣で、“食後には毎回歯を磨きたい”つて神經質なプレイヤー達からの要望から実装されたネタアイテム『歯ブラシ』がこんな所で役に立つと思わなかつたな……武器にもなるんだぜ？ これ。

自宅の硬いパイプベッドと比べるのもおこがましい程寝心地の良いベッドに身体を埋め、ベッド脇に置かれたスイッチの役割を担う魔石で照明を暗く調整した天井をぼんやりと眺める。

「あ、これ布団が良いんだわ」

至極どりでも良い発見に嘆息しつつ、ステータス画面を開く。

「おお……上がってるな」

本日倒した、6体+半のオーガキングの経験値でレベルが32から35に上昇していた。ゲームの仕様のままならD e x（器用）かA gile（敏捷）にポイントを振り分けたい所だけど……今の所、取り敢えずは様子見だなよ。

防御系のスキルを新しく覚えた方が戦略の幅も広がると思つしまあ、実際にこの世界の人達の戦い方とか見てから考へるとしよう。判断材料が足りないと如何ともしがたい。

この街に図書館の様な物があればよかつたが、ゲーム内で図書館があるのは北の『ノースアイスランド』の王都だけだ。念のためギルドで貰つた冊子に描かれた、この街の簡易地図を見ても図書館なる建物は見当たらなかつた。

とまあ、うだうだ考へても仕方ないわな。当面の目標としては、ここからでこの世界の常識（？）を学びつつ、北を目指してみるか。……んー。図書館もゲーム中では専用のクエストが受注できる位で本を閲覧とかは出来なかつたから望み薄だが……何もしないよりは、な。

「ふあ～……」

とにかく今日は刺されたり、異世界（？）に来たりと色々有りすぎて疲れた。こんなに走り回つたのも学生時代以来だな……。

『デバイスライザ』の液晶画面に表示されたデジタル時計が2時38分を示している。少し早いが今日はさつさと寝て、明日は勉強の為にも市場を回つて近場のダンジョンでも覗いて見るとしますかねー。

起きたら今までの事が夢でした！ とか無いよな……？ と多少の不安を覚えつつも枕元に『デバイスライザ』を放り投げ、意識を早々に手放した。何処でもすぐに寝れるって言う國太い神経はこんな時には重宝するね……。

おやすみなさい。

寝る前に夢落ちのフラグを立ててみたが、『現実に戻つたと思つたけど、やっぱりそれ 자체が夢だつた』 的なイベントも起きましたつきりと目覚めましたよ。本日も快晴なり。

さて、東区画の市場に来てみたのはいいが。……けりや、全部見て回るのは骨が折れそうだな。

街の中央に設置されたクリスタル製の大仰なモニメントから先は見えんが、恐らく東門まで真つすぐ伸びた大通りの路肩には、雑多な露店がずらりと並んでいる。閑古鳥の鳴く南門とは打つて変わつて大賑わいだな。

ゲーム中じや大して需要のなかつた日用品や食料品を扱う店も沢山あるみたいだな。ダンジョン散策用にお手軽な携帯食料でもあれば購入しちゃいますかね。

「（ほお～。なるほど、大方把握した）」

たつぱり一時間近く時間を費やし、それなりのアリアティのある武器や防具、アクセサリーを扱う露店や、魔物の素材の買い取りを行っている露店商の価格表を冷やかしつつ東門まで歩いて得られた結論は　“基本的に”ゲーム内の相場と大差がないと言つ事だった。

ゲーム通貨の1ステラが何ルート相当に値するのか良くわからんし、低ランク武具類の相場まではさすがに把握してないけど、露店に並ぶ覚えてる限りの高ランク　と言つてもゲーム中では、中の下くらいのランクの武具はゲーム内より少し割高程度だった。

少々違和感を覚えたのはボス級の魔物から直接入手したり、素材の強化から派生して発展する武具のうち、フィールドや『フリーダンジョン』で出現する類いの品物を見かける事は出来たが、攻略や発見に色々と手順が必要な『クエストダンジョン』産の品物はほとんど見かける事がなく、稀に見つけたとしてもその値段は偉く高額な物だった。

つまり、あれか。まだ断定するには至らないけど、単純に発見されてないダンジョン産の品物が希少価値が高いって事ね。『雷切』や『必中の弓』は『フリーダンジョン』のボスドロップだから出回つてたつて訳か。

ふうむ。『クエストダンジョン』で入手出来る品は面倒な分、高ランク武具の強化に必須だつたり、性能が一つ秀でてたりするから

その攻略情報は大きなアドバンテージになるよな。本気で検索を考えとこ……。

さて、相場については《クエストダンジョン》産のアイテムに気をつけねばいいと判断したので、つい先ほど露店で購入した『子供でもわかる魔法入門』と言うファンシーな挿絵の入った素敵な参考書を読んで見るとしようか。

通行人の妨げにならぬように東門の石垣に背中を預け、参考書に目を通す……やっぱ全部ひらがななのな。

ふむ？ なにぶん子供向けに要点だけかみ碎いた説明分なので、大雑把にまとめるところな所か。

魔法を扱うには生まれ持った才能が必要。

魔法に対する知識や想像力で効果は増減する。

仮に生まれ持った才能がなくとも、魔力さえあれば《写術書》を用いて魔導の才能を強制的に開く事が出来るが、使える魔法は《写術書》で覚えた魔法に限られる。

正直漠然としてよくわからんな。発動のプロセスとかどうなってんだろ？ 載ってる魔法も初級のものだけだし……、一般向

けのが欲しかつたけど置いてなかつたんだよなー。まあ、2ルークで購入したモノだから文句も言えんか。

挿絵の女の子の解説キャラクターが笑顔で嬉々と『えいつ』つて可愛らしい掛け声をあげて魔物を魔法で焼き殺してた様は中々シユールで面白いが……。現実でもそうだったけど、子供向けて以外と残酷だよな。

『写術書』つてのはスキルスクロールの事だらうな。俺もいくつかは作れると思うけど……まあ後回しでいいか。

さあて、お次はダンジョン散策としますかね。確か西門の先に広がる樹海の中に初級で洞窟型のフリーダンジョンがあつたよな……。

歩いて森を抜けるとなると食料とかも多めに持つてつた方が良さそうだな。参考書をインベントリに放り込み、再び雑多な人種の人混みに溶け込んで西門を目指した。

頭上の梢から仄かに陽光が差し込むだけの、鬱蒼と樹木が生い茂つた薄暗い樹海の中心地にそれはあつた。

草木の茂つたそれまでの道筋を抜け、土が剥き出しになつた開けた空間に出ると、苔がびつしりとこびりついた黒い巨石がズラリと

地表から突き出し、そびえ立っている。

その巨石に囲まれた地下へと進む緩やかな傾斜の先には洞がぽつりと口を開け、中からは得体の知れない人外とだけは断言出来る呻き声が岩壁に反響して漏れ出している。

とまあ、一人で来るにはちと不気味な所だけど、街から近いダンジョンと言う事もあり、周りにはパーティの一団が多く不思議と安心感が湧く。

……うん？ ソロで来てるの俺だけか？ まあ、ここのは初級の割に状態異常攻撃なんて物騒なモンを持つてるから人数居た方が安全かもな。

こここの魔物程度なら痛手を受ける事はないと思つけど、気を引きしめて行くとしますかね。一応、人目を気にしてインベントリ内から『オクスタンロッド+10』を取り出して装備する。多分大丈夫だとは思うが、愛杖だと悪目立ちする恐れがあるので念のため、だ。

生憎と特殊効果はついてないが、この杖も先端に槍の様な刃がついてるから接近されても十分実戦に耐えうる代物だ。物理攻撃力のが高いしね。

よし、準備万端。いざ、ダンジョン散策！

「はい。そこのお兄さん、ちょっと待つてな～」

「え、はあ……？ 僕、ですか？」

杖を担いで意気揚々と突入しようとした所、ダンジョンの入口脇に控えて居た兵士のおっさんに呼び止められる。この紺色の制服は街の警備隊の人か。僕、なんかまずい事でもしたつけ？

「そうそう。君、ダンジョンに入るの？」

「あ、はい。そのつもりですけ、ビ？」

随分と柔軟な表情で優しく語りかけてくるおっさん。……別に咎められている訳ではなさそうだ。頬をポリポリと搔いて返答を待つと、彼は穏やかな笑顔のままだが幾分か申し訳なさを含んだ表情で続ける。

「ここを管理するうちの決まりでね、一人以上のコンビじゃないと立ち入り許可を出せないんだ」

「え？」

09・前途多難（後書き）

フリーダンジョンとクエストダンジョンの詳細な違いは次話で出て
くると思います
おっさん率高いのは仕様です。長時間の見張りは重労働ですし
ね！

10・意識する気になるもんだ（前書き）

今回の話は借り物のケータイで書いてるので、いつもより粗いかも
しませんが更新優先で投稿します。

「すまないね。この中は魔物の数が多くて、単独で入つて大怪我する人が後を絶たなくてな。ギルドで登録済みの実力者なら単独での立ち入り許可を出せるんだが、君は登録済みだろうか？」

……あ〜。それで周りにパーティーしか居ないのな。俺が呆然と周囲を見渡していると、警備員のおっさんが身振り手振りを交えて説明してくれる。忙しく両手を動かして喋るのは彼の癖なのだろう。

「はー。ギルド登録か〜。初期登録費用に20万ルーク掛かるから後回しにしてたんだよなー。身内の居ない俺にはあんましメリットがなかつたしな。ギルドってもつと簡単に入れるもんかと思つたが、全然そんな事なかつたぜ……。

「いや、生憎と未登録の流れ者なんですよねー。ちょっと出直してきますわ」

「せうか……、折角ここまで足を運んで来たのに悪いね

頭を搔いて視線を落とすおっさんに、手をヒラヒラと振つて踵を返す。どうすっかな〜。街で一応確認の為にダンジョンの位置を聞き込みして確かめたのはいいが、こんな情報は聞いてなかつたなあ。

近場の手頃な岩に腰掛けて周囲を見渡すと、休憩中と思われるパーティーの一団が3組。彼等に仲間に入れて貰えないかと交渉する

にしても、突然現れた身元不明のぼつと出の奴を仲間に入れてくれるとかと言つと、期待は薄いだろつし……。

「なあ、アンタ」

嘆息を漏らして組んだ足の上で頬杖をつぐ。ぬかつたなあ、あんなに冒険心が漲つていたのに思わぬ暗礁に乗り上げちまつた。……ここまで来て何もせずに引き返すのも面倒だしなー。ああ、そうだ。隠密スキル使っておっさんの横からこいつそり入れば問題なさそうだな。さすがに探知スキルまでは使ってないだろつ 多分。

「おいつー！」

……それにしても今日はいい天気だよな。此処は森ん中だから日常たりが悪いが、こんな気持ちの良い日は、日光浴びながら昼寝つての良いかも知れんな。

「ム・・シ・・すんなーつ！…」

「……なんでじょつか、お坊ちゃん」

田の前で小汚い格好のお子様が約一名、ふんふんと地団駄を踏んで「立腹の様子だ。

声変わりもしていないので、凡そ歳の頃は11～13歳と言つた所だろうか。薄汚れた布の服を着て、所々がほつれた緑色の外套を纏う少年。額から頭にかけて焦げ茶色の布をターバンの様にグルグルと巻き、そこから癖のある濃紫色の毛髪がピンピンとはみ出している。

薄い灰色の双眸は吊り目氣味で随分と小生意氣そうな印象を受けた。お坊ちゃんだ。まあ、目付きこそ悪いが、そこは子供補正で全体的に丸まるとして幾分か可愛いが、そこは子供か。腰のベルトに佩びた長剣が彼の低い身長に見合はず、随分と不相応に感じられる。

「子供扱いすんじゃねえ。オレにはネルって立派な名前があるんだ」

「あー……それで、そのネル君が俺になんの用だい？」

「ネルで良い。見てたぜ。アンタ、洞窟に入りたいんだろ？ なんなら組んでやつてもいいぜ。このオレがついてれば百人力だぞ」

へへん、としたり顔で胸を張つて鼻を擦るネル少年をフォーカスしてみると レベルは13、か。ギリギリこの一階層の適性レベルだな。……なんつーか、こっちに来てからやたらと年下に絡まれるなー。なんなのコレ、一応確認しとくか。

「ん、わかった。ネルは冒険者志望なのか？ かーちゃんとかはその事を知ってるのか？」

「……ツチ、親は居ねーよ。んな事よりさ、組むのか組まねえのかどつちだよ？」

眉を顰めて乱暴に捲し立てるネル少年。おお……。何となく予想はしてたが、見事に地雷を踏み抜いたな。ふうむ、色々思うところはあるが、渡りに舟つてやつだ。この子が信用出来るかは別にして、様子見だけだしなんとかなるだろう。悪意は感じられないし

な……俺の人を見る目は信用ならんが。にわかに込み上げる嘲笑を堪えつつ、お言葉に甘えて利用させて貰う事にした。

「そりゃ。悪い事聞いたな、すまん。俺はコーキ。一応、魔導師だ。神聖術も少々かじってる、宣しく」

「別に良いって……フツ。それよりアンタ、その顔で神聖じゅイデツ」

パソコンと良い音を立ててネル少年の頭が揺れる。おっと、あんまり可愛いもんだからつい……。素直な子供って大好きー。

「なにすんだよつ！ “じビーザやくたい”だ」

「ほう、難しい言葉知ってるな」

涙目で頭を摩る姿から一転し、まあな。と得意げな顔で威張るネル少年。……なんか、悪い奴じやなさそうだな。寧ろ大丈夫か、この子？ こう言うやり取りしてると妹の事を思い出すな。実家出でから暫く会つてないけど元気にやつてんのかねー。

ともあれ、これで一応人数だけは一人になつたが中に入れるんだろうか？ 片方子供だしな……不安過ぎる。俺が頭を搔いて逡巡していると、足早にダンジョンの入口に向かうネル少年が足を止めて振り返る。

「なあ、さつさと行こうぜ あ、俺がリーダーだかんなつ！」

「へいへい、わかりましたよ。ボス」

異世界初パーティー（？）結成だな。気張つて行きましょー。ゆるりと腰を上げ、欠伸を噛み殺しながら小さな大将の後に続く事にした。

「うりやつ

俺の放った下段蹴りで、ブヨブヨと爛れた赤紫色の肌をした動く腐敗死体 『ベノムコーブス』の膝が崩れ落ちて倒れる。そのまま脇から飛び掛かってくるもう一体の頭部を杖で薙いで刈り取り、倒れた正面のベノムコーブスの頭部を回し蹴りで飛ばしてトドメを刺す。

「うわ、わつ

『レイ』

棍棒で武装し、ぼろ切れを纏った子供サイズの人骨モドキ 『スケルトンヌール』と、一対一で斬り結ぶネル少年に追加で襲い掛かるベノムコーブスに光弾をぶつけて弾き飛ばす。

「ビンゴー」

「余計な事をすんなつ」

指鉄砲を作りバツチリとカツコつけた所で、ネル少年に悪態をつかれる。ちえつ、かわいくねーの。俺の周りは片付いたのでネル少年と骨の戦闘を眺める事にしますかねー。一応周囲に気を配つてみたが、今のとこ敵の気配は無いみたいだな。杖を担いで肩をトントンと叩く　いささか親父臭いが気にしない。

「ほれ。正面、頑張れよー」

俺が指差すとネル少年は頬を膨らませてこちらを一瞥し、言われるまでもないと言つた様子で再び骨に斬り掛かる。

結果として俺達二人はダンジョンの中に入る事が出来た。立ち入りを制限してる割には、子供と一人で入れるつて管理が甘いのか厳しいのかわからんな。まあ、一概に許可が降りたと言つても警備のおっさんは甚く心配してたが、俺が高位の神聖術を使えるのを目の前で見せると渋々ながらも立ち入りを許可してくれたのだ。最初からそうしどきやよかつたな。

その時の彼の“えつ？　お前、神聖術使えんの？　嘘だろ？”と言つた表情を俺は忘れる事がないだろう。顔面がゲシユタルト崩壊しどつたぞ。失敬な、そこまで驚くか、フツー？

そして、ネル少年とおっさんとのやり取りを聞くと、どうやら彼は数日前からダンジョンに入ろうとここに通り詰めているみたいだが、彼とチームを組んだ人間は俺が初めてらしい。こんなチミツ子をダンジョンに連れてくなんて醉狂としか思えんしなあ。

「ツソリとおっさん」、ただの冒険に憧れる少年なら一度ここを経験すれば懲りるだろ？、立ち入り許可を出すから入口周辺で彼と共に闘してやつてくれないかと提案され、それを快諾。そうして一緒に入ったのはいいが、なかなかどうして良い奮闘を見せていく。

さて、このフリー・ダンジョン 『嘆きの空洞』 は不死系の魔物が多く跋扈^{ばっこ}、徘徊するなんとも辛氣臭い迷宮となっている。そのお陰で高位の神聖術を扱えると証明して入る事が出来たのだ。まあ、出現する魔物は見た目こそグロテクスな死体の姿をしているが、実際はそういう形態をした魔物と言う分類で、ダンジョン内に腐臭が漂う事は無い。ちょいとカビ臭いが我慢出来る範囲だ。……がまんくつせえつ。

まあ、その、なんだ。一度意識しちゃうと気になっちゃうレベルの臭氣で満たされたこのダンジョンは地下5階まで広がり、最下層にはしっかりとボスモンスターも出現する。光りの届かない地下迷宮だが、壁一面に幻想的な青緑色の光りを放つ光ヶが自生しているので、照明には事欠かない。足場も平坦で歩きやすいのも嬉しいね。ま、初級ダンジョンだしなー。

そんな初級のダンジョンで何故立ち入り制限をしているのかと甚だ疑問に思ったのだが、入つて5分も経てば身体で思い知る事となつた。

魔物の出現率 所謂“湧き”がゲーム仕様なのだ。つまり、倒したら倒した数だけ迷宮内の何処かに一定数の魔物が補充されるつてワケ。わんこそばならぬ、わんこゾンビだな。油断してると突如横から現れた魔物にガブリッ……おー、コワ。

肉体的疲労が少なく、死んでも幾らかの経験値にペナルティーを負つて復活地点からリスポーン出来るゲームと違つて、一度きりの人生で無限に湧き出る魔物と戦い続けるつてのは無理つてもんだ。

進入人数制限無しで開かれているフリーダンジョンならともかく、一度の進入に人数制限が掛けられているクエストダンジョンでこの仕様だと難度は高く、理不尽窮まりないだろう。つーか無理ゲー臭い。そういう蘇生魔法とか使えんのかな？ 覚えてないケドさ。

そんなこんなで、こうして色々と思案に耽つている間にも次々とゾンビや骨がこちらに襲い掛かつて来る訳なのだ……。魔法を使うよりも、杖で殴つたり蹴飛ばしたりのが早いのでそうしてると、流石に疲れて来る。一ートの体力舐めんなよ、コルア。ゾンビコルア。

群がるゾンビを一掃し、隣で漸く骨を倒して剣を杖変わりにして立ち尽くし、すっかり憔悴した様子のネル少年に声を掛ける。

「ネルよー。一旦外で休憩しないか？」

「 ハアハア。もう、ハア。つ、疲れた……のか？ ハア。し、仕方ない、奴だな」

おー、まだ減らず口を叩けんのか。初めてココに入った割にや、

氣味の悪い魔物に臆して氣後れする事なく闘えてるしナイスガッツと言わざるを得ないな。俺なんて最初にここ来た時、正直ビビリまくつてたからね。案外大物なのかも知れん。

10・意識あるところなるもんだ（後書き）

携帯が修理から戻つてくると内容はこのままで丁寧な文章に修正するかもしれません。ご了承下さい。

女子分の実装は今暫くお待ち下さい。

11・譲れぬ闘争（前書き）

ひつそりと更新。
誤字、脱字などがあれば「報告をお願い致します！」

外界のまぶしさに眼を細めて天を仰ぎ、大きく伸びをする。服についた埃を払い落としながら俺とネルは薄暗い洞穴から抜け出した。梢の隙間から覗く太陽は頭上に昇り、間もなく昼の到来を告げる。警備のおっさんと本日何度も挨拶を交わして脇を通り抜け、鼻に残るカビ臭い洞窟の臭いを緩和すべく外の新鮮な空気をたらふく肺に取り入れた。

「ウム、空気が美味しい あそこでいいか」

隣で空腹を訴えるネルに目配せすると、彼も小さく頷く。その後も戦闘と撤退を3回程繰り返した俺達は、最初にネルに声を掛けられた岩場で休憩がてらに少々早めの昼食を取ることにしたのだ。

程なくして昼食の用意が完了し、ここに来る前に俺が露店で購入したサンドウイッチを両手で掴み、それをモクモクとげっ歯類よろしく口いっぱいに頬張るネルが、口内の物を飲み込み口を開く。

「ハーキつてさ、本当に術士なのか？」

「ん？ 田の前で見せただろー。俺は真っ当なマホー使いだ、ま・ほ・う・つ・か・い」

どつしつとした重量感のあるサンドウイッチにかぶりつき答える。

香ばしく焼かれた鶏肉に、卵や葉野菜等の具が入ったサンドウイッチはなかなか美味しい。余分に買つといてよかつたなー。

「それにしても蹴りの一撃でスケルトンやコーパス倒してたし……、そこのフツーの術士には無理じゃねーの？」

「それはアレだ。一撃を入れる瞬間に、俺の内に眠る神聖なパワーをだな」

次のサンドウイッチに手を伸ばし、怪訝な表情で首を傾げるネルに適当にでまかせを並べて説明すると、彼は『ふうん、オレもそれが使えたなら楽なのにな』と、特に疑う様子もなくサンドウイッチを頬張り始める。

それにしてもこの少年よく喰つものである。俺が一切れ喰つてる間に、もう五切れ目だぞ。成長期か？ 成長期だからなのか？ 少しは遠慮しろよ、この野郎つ。きっとコイツには頬袋があるに違いない。ネルの膨らむ頬つぺたを思いつ切り引つ張りたい衝動を抑えながらも、俺もサンドウイッチを頬張る。

「ムグ……、俺は剣術の才能はからきしだから偉そうな事は言へんケドさ。そもそも、お前さんが振り回す“ソレ”は身体にあってないから効率が悪いし、なにより疲れるんだよ」

咀嚼したサンドウイッチを飲み込み、少々説教臭いがネルの脇に置かれたブロードソードを指して口を挟むと、彼は鼻を鳴らして腕を組むとそっぽを向く。古びて刀身がくすんだ幅広の両刃剣は重量こそ2kgも満たないだろうが、小柄なネルの身長の半分以上もある剣を振り回すのは著しく体力を消費するだろう。

「フンッ。余計なお世話だ。オレは」の剣で頑張るのつー。」

「正直重いだろ?」

卷之三

図星を突かれたネルが表情を凍らせて後ろにたじろぐ
アクションだ。ネルのその反応が面白くなり、追撃を掛ける事にした。顎を手でなぞり、眉根を寄せて考え込む仕草を見せる。

「...תְּנַנְנִי, הָעֵדָה...」

「お前、右腰に佩びてるよな。無理してると、そのうち右足だけ短くなっちゃうぞ。そのままだときつと将来右寄りに傾いちゃうな、右肩下がり。俺なら泣いちゃうね。俺の友人にもお前みたいな奴が居たが、ソイツは今……、ああ。口にするのも恐ろしい

「ええい？！ いわく、アーニッシュ……。オレ、右足だけ短くなっちやうへへへ。」

両手を広げて首を振り、やれやれと嘆く仕草を見せるとネルは慌てて立ち上がり、涙目でズボンの裾を持ち上げて忙しく左右の足の長さを確認する。その恐慌っぷりに笑いを堪える俺、超必死。沈まれば俺の口角、痙攣に負けるな表情筋。

「安心しろ、まだ大丈夫だ。お前さんは左利きなんだろ？が。たまには剣を左腰に下げるか、同等の重さの物を装備すれば……」

「そ、 そうなののか？」

ネルの肩に手を置いて小さく頷き、優しく諭す様に話すと彼は眼を瞬かせてこちらを見上げる。

「……だが？」

「……だが？」

拳を握り込んで息を飲み、こちらの一の匂を鼻息荒く待つネルにしつかりと間を作り、眉を顰めて出来うる限りの悲痛な面持ちで続ける。

「ただし、短足になる」

「な……ッ？！」

灰色の双眸を見開き、口をパクパクさせてこの世の終わりを向かえたかの様な表情を浮かべ地面に突つ伏すネル。なにこの面白いイキモノ。

「……いいんだ。足が短くなつても……。オレ、頑張るんだ……」

何をそんなにこだわるのか知らんが、地面に突つ伏したまま肩を小刻みに震わせてブツブツと咳くネルを見ると、流石に不憫になつて来たのでインベントリ内から真珠大の赤色の宝石が嵌まつた指輪

『ストレングスリング』を一つ取り出してネルに投げる。

「装備者の筋力補助効果がある指輪だ。やるよ、それを装備すると多少は楽になるかも知れん」

「……サイズ、合わない」

おもむろに指輪を摘んで拾い上げたネルは、指輪を左手の薬指に当て行い、前後にスライドさせる。

「待てい、なんで左手の薬指に嵌めよつとするつ?...」

「……? 母様は父様から貰つた指輪をここに嵌めてたゞ。何か問題あるのか?」

然もここに嵌めるのが当然だつと面わんばかりにキヨトンとしだ顔で首を捻るネル。問題大ありだ。それにしても……母様、父様つてコイツ何者だよ。実は育ちがよかつたりするのか? なんか口が悪いだけの子供じゃなさそうだな。色々気になるが障らぬ神になんとやら、だ。スルー技術つて大事だよね。うん。

「……んじゃコレ使え、指に合わなくとも首から下げるだけでも効果があつたはずだ」

「でも、こんな高価そうな物……ホントにいいのか?」

更にインベントリ内から手頃な銀のチョーンを見繕い突き出すと、ネルは珍しい物でも見るかの様にそれを受け取り、手の平で指輪を転がして惚けている。

「なんだ、要らんなら返せ」

「返さねーしつー。 その、ありと……な」

俺が手を突き出すと、ネルは透かさず指輪とチョーンを後ろ手に

隠す。そして、こちらに目も合わせず伏し目がちにしおらしく何かを言つ。よく聞き取れなかつたが、小声で礼を言られたのだと思う。

「うしていれば少々小生意氣な普通の子供なのに、剣を持つて魔物と闘つてゐるつて改めて考へると凄い事だよな。俺がこの時分の頃は野球やサッカーして走り回つてたつけな……。

「そつそつ、子供は遠慮すんな。素直に受け取りやいいんだよ」

「おつつ　じゃあ、最後の一切れも～らい」

昔を思い出し、ちょっとびり感傷的な氣分で微笑み掛けると、急に元気になつたネルが口角吊り上げてサンドウィッヂに伸ばす。

「おつとー？　そいつアちげえだる。どんだけ喰う氣だテメエッ」

透かさずその手を掴むと俺とネルの視線が交差し、互いに睨み合つたまま無言で頷き合う。

「……ふふふ」

「……ははは」

そのまま暫く視線をぶつけ合い牽制し合つてゐると、ネルがピヨンと勢い良く立ち上がり、左手をグルグルと回転させて腰を落とし構える。同時に俺も首を鳴らして立ち上がり、両拳を眼前に上げて戦闘体勢を取る。

「……ハツ、大人氣ねエ。大人氣ねエよ、コーキ。……ここはオレに譲れ」

「笑止……ッ、負けられない闘いがここにある！ 全力で掛かつて來い。胸を貸してやんよ、ネル。……それを譲る訳にはいかん」

不敵に嗤うネルに、俺も手招きして挑発する。一時の静寂の後、樹海に餓えた戦士の咆哮が駄じだました。 その日、《嘆きの空洞》の前で食べ物を取り合つて闘う意地汚い一人の青年と少年の姿があつたとかなかつたとか……。

寝床の《雪鳥の止まり木》に戻つた俺は、茶色い皮張りのソファに身体を埋めて本日の稼ぎ 1,800ルークの数量を確認し、インベントリ内に突つ込んだ。次に度重なる連戦ですっかりと消耗してしまつた《オクスタンロッド+10》に《リペアスプレー》を万遍なく吹き掛けて修繕を始める。

今日の狩りで手に入れた魔物の素材を売つた代金は、ネルと折半して一人の取り分がこの額と相成つた。一階層しか散策してないのではレベルの上昇こそなかつたが、魔物の湧きが多いのでそこそこの額が稼げたと思う。スプレーの代金を差し引いても1,300かこの感じだと昨日の30万ルークは破格だよな。インベントリ内のアイテムを少量売り払つだけで一生遊んで暮らせそうだ。

修繕を終えた杖をインベントリに放り込んで欠伸を噛み殺す。ともかくにも、今日のダンジョン探索は色々と収穫があつた。魔物の湧きがゲームのままだつたり、魔物の素材化は死体に触れて念じる事で何処かの部位がランダムに入手出来る 等など。この世界

のダンジョンじゃパーティープレイ必須だなと心底思つ。やり直しが利かない状況で無限に出現する魔物の群れの中に飛び込むなんて行動は、自殺志願以外の何物でもないからだ。

でも、折角こんな世界に来たんだから冒険したいよなー。不自由しない蓄えがあつても、俺の性根はコソコソと貯金して通帳の預金が増えることに無上の悦びを感じる小市民なんだよね。俺の装備と能力ならある程度までなら無敵状態だろうが、如何せん体力が保たない。ゲーム内じや腹に溜まらなかつた回復のポーション類も、連續して飲み続けるのは無理があつた。つーか胸やけ起こした。ちなみに味は甘つたるくてトロッとした子供の風邪薬のシロップ風だどうでもいいか。

つまり、これから俺の基本的な回復手段は対象から生命力と魔力を奪うスキル『ゲイン』だけつて事になるな。でもこれつて闇系の魔物には効果薄いんだよなー、俺つて意外と弱点多くね？

本気でV i tとR s tのステータスを上げることを頭に入れて置こう。攻撃面はなんとでもなるにしても、如何せん防御面がなあ……特化型の痛い所だな。スキル構成の見直しも必要かねー。

暫く呆然とステータス画面を眺めた後、部屋に戻る前にバトラーに煎れて貰つた珈琲で一息入れてベッドを一警する。昨晩、俺に安らかな眠りを与えてくれた毛布が不自然に盛り上がり、明らかに“ナニか”を内包しているのは一目瞭然だ。

眉間を揉みほぐして嘆息し、力無く立ち上がつて毛布をめくりあげると、シャワーを浴びてすっかり小綺麗になつたネルが宿付けの寝間着に着替え、身体を丸めて寝息を立てている。

「 めんどくせえ……

不意に立ちくらみを起こした俺は、そのまま両手で顔を覆つて背後のソファーへと倒れ込んだ。

閑話・“ネル”（前書き）

1万P突破で急いで書き上げたモノで短いです。

深い森の中だけれど、枝の隙間からポカポカとした陽気が差し込み心地好い。すっかりと通り慣れた獣道を突き進んで目的地を目指す。

オレが『商業都市フランチエス』に辿り着いて早2週間。午前中は街の西側に広がる樹海の中にある、ここ『嘆きの空洞』の前でパーティーを組んでくれそうな人を探すのが日課になっている。

「……むう」

毎日通い詰めているものの、やっぱりオレみたいな子供と組んでくれる物好きな人は居ないみたいだ。人の良さそうな人を選んで声を掛けてるけど、今日も収穫は無し。だからと言って、怖そうな人達に声を掛けるのはやっぱり怖い……。

ギルドで募集をかけようにも、手数料が掛かっちゃうから得策とも言えないし……何より、そんなにお金に余裕もないもん。腰に下げた巾着袋を突いて溜息をつく。“ひもじい”って言つんだつけ……、これ。

「……腹減つたなあ」

クウ。と鳴るお腹を摩つて地面に座り込む。この喋り方にも随分と慣れてきた。最初は噛みまくつて笑われて……ブンブン怒つてたつけ。父様と母様に聞かれたらきっと怒られちやうだらうな。不意に家族の顔が脳裏に浮かび、目頭が熱くなる。母様の手料理が食べたい、……父様にまた抱き上げて欲しい。家の皆と遊びたい。

“ネル”に、また会いたい。

脳裏に浮かぶ幸せな追憶で目尻に滲む涙を拭つて頬を叩き、気合を入れる。……「うん。もう、皆は居ないんだ。こんな所でくじけちゃダメだよね。オレは絶対に強くなつてアイツを、仇を討たなくちゃ。

今日も空洞には入れそつもないから、森で狼や小鬼を狩つて力をつけよう。立ち上がり大事な剣を腰のベルトに固定する。……重い。背中に背負えば幾らかマシだけど、そうすると抜剣出来ないし……。うう、まだ“ネル”みたいには上手く扱えないけどオレ、頑張るからね。

「……うん？」

ふと空洞の入口に視線をやると、警備員のおじさんに立ち入りを止められる男の人が一人。……。あの、旅の人かな？ きっとここに来たばかりで、一人で入れないのを知らな……。

「え……？」

まるで身体に雷が落ちたかの様な衝撃が走り、声が漏れる。警備の^{おじさん}に会釈をし、振り返った男の人の顔は

オレが殺した、とても大切な友人に瓜二つだった……。

閑話・“ネル”（後書き）

読者様の応援に感謝！

こつもいじ愛號ありがといひやれこめす。

誤字、脱字があれば、報告下され。

暫くソファーに寝転がつたまま天井板の木目で迷路遊びをし、存分に現実逃避を満喫した所で意識を覚醒させる。背もたれを掴んで上体を起こし、視線をベッドに戻すとやはりそこには身体を丸めたチビッ子が一名、すやすやと寝息を立てて転がっている……。

「こやろい、俺の聖域で寝やがったな……」

最早癪となつてしまつた動作 額を覆つて嘆息を吐く。いささか心労で重く感じる身体を持ち上げてソファーに座り直し、残りの珈琲を一気に呷つた。

以下回想。

『嘆きの空洞』で夕方までゾンビや骨とチャンバラじっこをした俺とネルは、一力所に固まつた魔物の群れの塊 所謂モンスターハウスと呼ばれる、ホラー映画も真つ青の死体モドキの群れを一掃した切りの良い所で街へと帰還する事にしたのだった。

その時ばかりは、流石にネルも半ベソをかけてヤケクソに奮闘してたな。指輪の効果で剣も少しはまともに振れる様になつたみたいだつた。後でその事をからかうと『泣いてねーよっ!』とスネを蹴飛ばされた。意地つ張りめ。

途中からずつとお前さんが袖が掴んでたからそれを庇つて何回か噛み付かれたんだぞ。ダメージは無いが、グロテスクな人型死体に腕をモリモリかじられるのは視覚的にゾッとするので勘弁して頂きたい。その後、ネルが散々『腕、大丈夫だつたか?』としつこく聞いて来たので毒が回つて苦しむ演技をしたら本気で心配された。泣き出しそうなネルに『嘘。ピヨン』とおどけたらしこたま怒られた。流石にやりすぎたか。

そんなこんなですっかりお冠の様子なネルと碌に口を利かないままにフランチエスに帰還。気まずさの余り、途中の露店でお菓子を買い与えてみたら機嫌が直つたみたいだつた。現金な奴だ。

ギルドで昨日のねーさんに換金して貰い、ガアヴのおっさんがネルを見ると暑苦しくそのので、見つかる前に早々とギルドから退散。ネルと金を折半し、別れを告げて宿に戻つたのはいいが。

「……何故かこのお子様は隣に借りて、あらう事か俺の部屋に侵入、人様のベッドで爆睡中です つてか?」

ついでつきまでは、フカフカだ、フカフカだつて布団の上ではしゃいでたと思ったのにな。ビうじょう、コイツの部屋に放り込んだくか?

「おー……伸びる伸びる

「……にゅ、ふ、ふひゃい」

ネルの頬を引っ張り首を捻る。眉間に皺を寄せて変な鳴き声をあげるが起きる様子はない。……しかし、放り込むにしても鍵を掛けて子供を部屋に一人にするのは如何なものかと逡巡しつつベッドの周りをウロウロと歩き回る。

確かにフカフカで気持ちいいのは認めるが、今日会つたばかりの人間の前で爆睡するとは無防備にも程があるだろうに。俺はお世辞にも人相が良いと言われる事のない自負もある。自分で言つてちよつぴり虚しい。　ああ。そういえばベッドメイキングもバトラーさんがやつてるって言つてたな、是非ともその技術を彼から伝授して頂きたいモノだ。

「う……と……様、かあ……れ……」

不意に漏れる掠れた呻き声に足を止める。悪夢でも見てうなされているのか、顔を歪めてシーツを握り締めるネル。別段、俺に撫で癖がある訳ではないが流石に居た堪れなくなつたのでネルの脇に腰掛け、髪のほつそい頭をグシャグシャと撫でる。

暫くするとネルの表情が和らぎ、また安らかな寝息を立てはじめる。寝るときまでバンダナ巻いてるなんて変な奴だな。……あー。今日だけだからな。たまにはソファーで寝るのも悪くない。ネルに毛布をかけ直して立ち上がる。

「べ、別にアンタの為に……いや、止めておこう」

シンデレラが許せるのは一次元だけだ。何より美少女に限る。」

ちへ来てから、街で可愛い子を見かけるつちゃ見掛けるのだが俺に縁があるのはショタつ子とオッサンだけってのは悲しい事だ。女に餓えてる訳じやないが悲しい事だ。大事な事なので二回　　あー、もういいや。めんどくせえ。

どうも寝る前のテンションが可笑しい。なんだかんだで疲れてるんだろうな、俺。欠伸を噛み殺し、寝る準備の為に洗面台へと向かう。

そう言えば、ハーレム少年のランス君は元気でやつてるんだろうか？ 結局丸投げして来ちゃつたけど、暗殺者の件もあるし大丈夫だつたのかねえ。もし、再会でもしちゃつた時に取り巻き増えてたらどうしよう。世界の男子諸君を代表して引っ叩きたいところだけど、後が怖いので心の内で呪詛の言葉を吐くだけにしよう。ランス少年は良い奴そうなんだけね、うん。やれやれ嫉妬とは、斯くも醜き事か……。性格だけでもイケメンでありたいものである。

「ゴーーキッ……」

「へもすつ」

不意にみぞおちに走る衝撃に、身体が“く”の字に跳ね上がり、肺の空気が吹き出る。激痛に眼を見開けば、俺の上に馬乗りになつて悪戯に笑み、こぢらを覗き込むネルの姿があつた。

「　　起きたか？」

「ク、ソガキガツ」

「やうひ……ベッドからダイブしやがったな。痛みで呼吸もままならないままにネルを捕獲し、羽交い締めにする。

「何か言い残す事はあるか？」

「はなせー。フランさんに飯の用意が出来たから、『一キ起こす様に言われたんだよー』

羽交い締めから抜け出そうと上半身を捩るネルが首を後ろに倒して俺を覗き込むので、俺はネルの額に顎を乗せる。あー、フランさんがね。

「ひら、乗せんなつ。おーもーいー」

知るか。このまま顎で額に風穴を空けてやる。ネルの言うフランさんはこの『雪鳥の止まり木』を、バトラーさんと一緒に盛りしている若き女主人の事だ。特別美人と言つ訳ではないが、気さくで気立てが良く、いつも明るく愛嬌のある彼女は引く手数多だとか。……全て本人談だが、と付け足しておく。

彼女の両親は極度の放浪癖持ちで、経営を娘一人に丸投げにして旅するのは忍びないと理由で、両親の古くからの友人であるバトラーさんに白羽の矢が立つたのだと。……フリー・ダムな両親だな、おい。閑話休題。

了解、了解。それで起こしてくれたと、成る程……情状酌量の余地があるな。 判決。

「因つて、お前をくすぐりの刑に処す

「えつ、ちよ。どこ触つて、うひやつ？！ あはつ、あはは」
左手をネルの脇に回す形で抱き上げ、空いた右手で脇腹をくすぐり倒す。ほう。軽く肌を撫でただけでこのざまとは……なんと言つ
敏感肌。ほれほれ、ここか？ ここがええのんか？ ……それにし
ても軽いなー、コイツ。飯食つてんのか？ 食つてるな、人一
倍と言わず何倍も。

そうして、ネルがグッタリするまで教育的指導（くすぐり地獄）
を加えた所で彼をベッドに解放。さあて、朝飯が冷めちまつ前に着
替えて降りるしますかね。

「……」ヨーキのバカ、えつち

「何がえつちだ、阿呆。あれしきで根をあげるとは貧弱貧弱う

「おやおや、これはこれは……お楽しみの最中でしたか 大変失
礼致しました」

……は、い？ 背後から聞こえる、大変渋みがかつた声に振り返
つて見れば、最早お馴染みとなつた執事服をパリツと着こなす初老
の男性 バトラーさんがドア前で、その皺の目立つ顔に笑顔を貼
付けて立ち去くしていらっしゃる。

お楽しみ……？ 何がだ？ と周りを見渡す。横を一瞥すれば、

ベッドの上で俯せになつて俺を見上げ、（笑い過ぎて）顔を赤らめて潤んだ瞳で（笑い過ぎて）肩を上下させ、熱っぽい吐息を吐くネル。その衣服は（笑い過ぎて）酷く乱れている。

視線を下に落とせば着替えの為に、シャツのボタンに手を掛ける俺の手と、そこから覗く胸板。全身の血の気が、一瞬でサアと音を立てて引いて行くのが分かつた。

「……ッ？！ 違う、誤解だ。俺はナニもつ」

俺の申し開きに『わかつてますとも』と彼は全てを見透かし、それでも尚、慈愛に満ち足りた そう。まるで聖人の様な笑みを貼付けたまま頷く。いいや、その顔は絶対にわかつてねえつ！！ 頼む、後生だ。俺と眼を合わせてくれ！

「大丈夫です。フランお嬢様にはこの皿、上手く伝えて置きますのでご安心を」

「大丈夫でもないし、安心も出来ねえつ！！ ちなみに参考までにどう上手く説明するのか詳細に語りて言つて貰おうか。今すぐにせつて頂ければ万事休す、でござりますぞ」

「！」

「ふあつふあつふあ。これはこれはコーリー様。このバトラーために任せて頂ければ万事休す、でござりますぞ」

「休してどうする？！ そこは解決してくれ、そこはかとなくつ」

「なあ、何が誤解なんだ？」

「お前はこれでも食べてなさい！」

怪訝に首を傾げるネルにインベントリ内からペロペロキャンティーを取り出し、口に突っ込む。

「……ん？ 美味い」

結局、宿泊契約の延長でバトラーの口を封じた俺は、ネルに手を引かれるままに朝食を腹に納めるべく食堂に降りたのだった。
……朝から酷く疲れた。まったく、油断ならん爺さんだ。

無事に一般人としての尊厳を守つて朝食を取ることが出来た俺は部屋に戻り、ホッと胸を撫で下ろす。

「それで、お前さんはこれからどうするんだ？」

そして三人前の朝食をしつかりと胃に納めて、ご満悦の様子のネルに訊ねる。人の部屋のソファーアに腰掛けてよくそんだけ寛げるもんだ。

「どうするって……オレは「一キ」と一緒にいくだ」

「なんでやうなるんだ？」

だつて、俺がリーダーだし。と自己中窮まりない発言を然も当然の如く言い放つネル様に、俺は暫くこの街に滞在するが、北を目指

している事を説明する。その間、先刻のペロキヤンが気に入ったのか、再び所望されたので素直に口に突つ込んでく。

「ふうん。北つて事は、コーキは戦争に参加するつもりなんだな」
戦争？ とネルに続きを促すと、何も知らないんだな。としたり顔でネルが事の経緯を説明してくれた。……なんかコイツに言われると腹が立つ。ペロキヤンを取り上げようとしたら失敗した。コイツの食い物に対する反射神経には目を見張るモノがあるな。

曰く 王都のある北の『ノースアイスランド』と、魔族領と呼ばれる東の『イーストダークグラウンド』は、ここ数年の間国境界での小競り合いが絶えず、予測される先の大戦に備えて王都で傭兵や義勇兵を募っているとの事らしい。……なんだそりや。

多くの亜人が住む東エリアが魔族領って事になつてんのか。まあ、確かに見た目が禍々しい感じの種族があつちには多かつた気がする。ゲームの設定では両国は友好関係を築いていたはずだが……、北の地を統べる王 シグルドが東側の間者に暗殺され、王位を継承するはずだった姫もそれと同時に消息不明。

その後は、妾の子である第二継承者の王子が云々で以下略。
と言つのが巷に流れる風評らしい。それ、本当に東側が関係してんのか？ なんか陰謀の臭いがプンプンするんだが……やだねー、権力争いってやーつ？

ともかく。今現在、北側への出入国は制限がかかり大変厳しいモノらしい。傭兵として入国したら最後、兵隊サンとして戦争に駆り出されるんだとさー。嫌過ぎる。至急プランの練り直しが必要だ。

だが、もし仮に本当に東側が戦争を仕掛けているものとして、北が戦争に負ければこちらにまで戦火が及ぶ可能性もあるってか……。幸いな事に東側からこちらに来るには北側をグルリと経由するしか道が無いが、あまり楽観視も出来んな。

「どうした？ 難しい顔して」

キヨトンと飴を片手に首を傾ぐネル。逆にどうしてそんなにお気楽なのかを俺は問いたい。つてまあ、この歳だし仕方ないか。どうやら俺の異世界冒険は物見遊山気分では送れないらしい。うーむ、ままならんね。

「よし、ネル。いつちょメシ代稼ぎに行くか

「そうか、やる気になつたか。付き合つぞ」

「取り合えず、ソレ（飴）喰つてからな。危ないから

「おひ」

非戦闘を謳う国の出身としては、出来るだけ平穏に暮らしたいもんだ。活気溢れる通りを行く市井の人々の往来を、頬杖をついて窓から見下ろし、心底そう思ったのだった。

12 · GAME OVER (後書き)

辛くもヨーキはゲームオーバー（人生的な）を回避しましたとさ。

13・だつて男の子だもの（前書き）

誤字、脱字などがあれば」報告を願い致します！

13・だつて男の子だもの

時間が経つのは早いもので、俺がこの世界に来てから早一週間が経過した。

「ヨーキ、グラゴイズがそっち行つたぞ！」

「りょーかい、必殺・お星様になれ」

「だだの雑ざ払いじやねーかつ」

雰囲気が大事なんだよ、雰囲気が。俺の雑ざ払いで全長が5mもある腐敗した大蛇のお化けが壁まで吹き飛び、朽ちた身体の一部が崩れ落ちる。それでもライフを削り切るには至らなかつたので『レイ（光球）』をぶつけると、グラゴイズの巨体が断末魔を上げてのた打ち回り活動を停止させた。

「うし、お疲れ」

「ちえ、オレが倒そうと思つたのこそー」

周りの敵が全て片付いた事を確認し、止めを俺が取つた事に対し、

口を尖らして抗議するネルと拳を打ち合わせた。

当初の予定であった、“王都の図書館”を田舎すと言つ計画がおじやんになつてしまつた為に、取り敢えず生活の地盤を固めるべくネルと《嘆きの空洞》で修練を重ねつつ、その周辺でこなせる範囲の依頼をギルドで受注する日々を楽しく過ごしている。

正直、始めはネルとは暇潰し程度で組んでいたのだが、この頃は満更でもないと思えてきた。相変わらず生意気な事には変わりないが、こと戦闘に関してはそれなりに信頼関係を築き、互いに指示を飛ばし合わなくとも連携が取れる様になつて一種の爽快感を覚える様になつた。

そして、俺のレベルが41、ネルのレベルが29に成長した現在、空洞の地下4階層が俺達の狩場になつてている。予想ではここまで来るので、もう少し時間が掛かると思っていたのだが、ネルは強くなる事に異常なまでの執着を見せた。

初めてのうちから常時フル支援魔法を掛けて戦闘を続けるのはネルの為にならないので、補助は大量の敵に囲まれた時のみに止めているのだが、それを除いても持ち前の動体視力を武器に真っ先に切り込み、常に自分の限界を超えようと躍起になつてている風に感じられる。

向上心があるのは良い事だが、何と言つか……危ういのだ。一応、初見の魔物には突っ込んで行かないし、俺の援護が必要無い程度に気を配つていてるみたいなのだが、その行動に若いでは済まない気概を感じるのだ。まあ、その辺もネルなりの事情があるんだろうが……どうしたもんか。ただの冒険小僧じやないのはなんとなくわかつたけど、このままだといつか無理して死んじゃうんじゃなかろ

うか。

「ひして組んだのも何かの縁だし、なんとか無茶しないように軌道修正させたいもんだけど、普段は遠慮なく絡んで来る癖に、あんまり突っ込んだ質問すると壁を作りやがるからなー。とにかくにもかくにも、俺と一緒に居る間は気を付けてやりたいと思つ。なんだかんだで俺は弟が出来たみたいでコイツの事を気に入つてるので。

「どうした、コーキ。お前も手伝えよー」

魔物の素材を回収し終えたネルが怪訝な表情で訊ねてくる。

「いや、何もー。　お、次の敵さんのお出ましだ

仄暗い通路の奥から先程のお化け大蛇に、一階に居た動く死体が灰色の色違になつた『バラライズ・コープス』や、青い炎を纏つた觸體『スキュラ』等がワラワラとこちらに向かつて進行してくる。

「1、2……えーと、いっぱい来たな。どうちが多く倒せるか競争だな」

「ふつ、早々に数える事を諦めてやんの　夕飯代でも賭けるか？」

「ひねり、と悪態をつくネルに肩を竦めて呪文の詠唱を開始する。今日の夕飯は唐揚げ定食にしようつと脳裏に狐色の好物を思い描きながら……。

しつかりと勝負の厳しさを教え込み、夕飯の奢りが決まって不機嫌な様子のネルと、ギルドに換金に赴いた時の事だ。俺は掲示板に貼られた一枚の依頼書に興味を惹かれた。

依頼内容：《クレイル樹海南西部の探索》

フランチエスの西に広がる大樹海に隠されると言われる、“黒盲目竜の顎門”の搜索、及びダンジョン内の探査。私の長年の夢である秘境探しに協力して下さい。受注希望者の方は受付にて詳細を確認後、明日朝8：00に西門前のベンチにて。依頼者：商人ペルトイ
契约期間：2～3日、基本報酬：5'000ルーパー。

依頼書の下には、術士が残り一名と書き加えられている。黒盲目竜、つまりこの世界で幻と謳われる《シュヴァルジエイド》のねぐら搜しつて訳か。拘束期間の割に基本報酬が低いのは、あまり成功が見込めないからなのだろう。場所はあつてるんだけどなー。入口の開き方の手順が面倒臭いから、きっとその所為なんだろうが。

うーん。そのうちクエストダンジョンに行きたいとは思っていたし、もののついでに受けてみたい依頼だよな。

「ずいぶん真剣に眺めてるなあ。何か面白い依頼でもあつたのか？」

「ああ、ちょっとこれを受けたくてな」

俺が掲示板を眺めている間に換金を済ませたネルが戻つて来たの

で、依頼書を指して興味を促す。

「……ん？ これ、コーキしか受けれないじゃないか。しかも三日つて！ 黒盲目竜の顎門なんて噂だけで、実在しないって話だぞー」

「でも、実在しないはずの素材はあるんだよな」

うつ。と、たじろぐネルに人差し指を突き付けて伝説の秘境探索こそが男の浪漫だうと熱く語つてみたが、『そんなの探すより、空洞で稼いだ方が堅実だね』と眞面目に諭された。……意外にコイツの思考は現実的みたいだ。しつかりしてて嬉しいよ。子供の癖につ。

ちょっとぴり浪漫を分かち合えない事に一抹の寂しさを感じつつも、掲示板を流し見て手頃な依頼を見つけ出した。臨時チームメンバー急募。前衛求む。『嘆きの空洞』の地下3階層が狩場です。3階層の魔物くらいならネルは十分に戦えるな。ネルに依頼書へ注意を促し、説明を続ける。

「ともかく、ネルも俺以外と組んでみる良い機会だと思つ。これからもずっと俺と一緒に組んで行く訳にも行くまい？」

「なんだ、コーキはオレの事が嫌いになつたのか。……この浮氣もの一つ……」

人通りの多い通路でネルが涙ぐんで声を荒げる。一瞬で周囲の空気が凍り付き、チクチクと突き刺さる視線を浴びる俺は、ネルを小脇に抱えて通路の奥へと一目散に逃げ込んだ。

「違うわいっ、誤解を招く様な事言つな！ つーか何処でそんな言

葉覚えるんだよ

「フランさんだ」

「わかった。彼女には後で、よおく苦情を言つておく。まあ、色々な人と臨機応変に組むのも勉強になるや。闘い方にも幅が出るし、一期一会のチーム戦つてのも意外と悪くないもんだ」

MMOゲームじゃ臨時パーティなんてのはざらだし、初めて顔を合わせるメンバーで見事な連携が取れれば、役割の決まった見知った相手との安定プレイとはまた違つた達成感と充実感を得ることができる。まあ、そんな事は滅多にないのだが。

「……三日だけだな？」

「ああ。ただし、無茶は厳禁な。普段みたいな闘い方してるとネル、お前だけじゃなくてチームメイトまで怪我するかも知れんから、足並み揃えて周りにも気を配ること　いいな？」

わかったよ。と口を尖らせて返事をするネルの頭をわしゃわしゃと撫でるとそつぽを向かれた。可愛くねーの。実際、良い機会だと思つので、これを機にネルには自愛を学んで欲しいものである。

翌朝、昨晩のうちに自腹で三日分の飲食物を準備した俺は、ネルと別れて待ち合わせ時間より20分程早く西門前のベンチにたどり着いた。数日契約の仕事の場合、ギルドに登録していれば、受注時に依頼主が預けた経費が支度金として支給されるのだが、俺の場合はギルドに登録していないので事後申請と言つ事になつていて。経費の持ち逃げを回避する為だ。

ギルドに登録すればメリットもあるんだろうが、有事には兵士として召集される事もあるし、俺みたいな住所不定な人物はギルドにそれなりに貢献しなけりや登録は出来ないらしい。そりや、そんなお手軽に市民権や身分証変わりになるもんが発行されれば犯罪者垂涎だわな。ああ、世知辛い。

暫しベンチに身体を預けて小鳥の轉りに耳を傾け、日光浴を満喫しながら、黒盲目竜の顎門攻略用の最適なスキル割り振りを設定していると、西門から背に大きなナップサックを背負つた恰幅の良い中年男性がこちらに歩み寄つて来る。

「依頼を受注して下さつた方ですか？」

「ええ、コーキと言います。専門は後方支援です」

柳色のハンチングを被り、立派な口髭を蓄えた中年男性が本日は宣しくお願ひしますと人好きする笑顔で右手を差し出して来るので、俺もそれに笑んで応じる。この人がペルポイさんか。名前はえらく可愛らしいが、横にも縦にもデカイ愛想の良いおっちゃんと言つた感じか。首の見えない肉感たっぷりのアゴはざぞかし触り心地が良さそうだ。

「えーと、この依頼はあと何人来るんですか？」

「そうですな。伝承通りだと顎門へ入れる1パーティーの人数は6人までとの事らしいので、コーキさんと私を入れてあと4人ですか。なんでも、ギルドの話では目も眩む様な美少年と少女の4人組が引き受けてくれたとの事ですが……」

ふう。と心なしか不安げに息を漏らすペルポイさん。まあ、これから伝説の秘境探そうつてのに少年少女と俺みたいなのがメンバーでは心配になるわな。 はて？ 目も眩む様な美少年……まさか、な。不意に脳裏に浮かぶハーレム少年の顔を消し去り、ペルポイさんに気になつた事を問い合わせる。

「“伝承”つて言いましたが、何か顎門についてのヒントがみなぎなものがあるんですか？」

「ええ、クレイル樹海を抜けた先の小さな農村に伝わる口伝がヒントになつてゐるのではないかと思いましてな」

ビシッと興奮気味に人差し指を立てるペルポイさんが興奮冷めやらぬままに続ける。

大地を穿つ雷動石が轟く時、三賢者は黒き獣の内腑を求むる。宵闇に臨む勇者達は贖罪の焰を点し、猛き狼の首級を掲げて朽ちた聖木に命を捧げよ。

されば、十字の袂にて慟哭の顎門^{あごど}は開かれん。

長い年月を掛けて仰々しくなつてゐるが、手順はゲーム中となんら変わつてない事にホッと息を撫で下ろす。そして、瞑目して口に反芻させるが如く、一字一句を噛み締めるようにして言葉にするペルポイさんに、俺も大きく頷いた。

「……浪漫ですね」

「おお、わかりますか？！ 私の妻や娘は理解してくれないのです

が
「

秘境の話になつた途端に、鼻息荒く碧眼を輝かせて口伝についての自分なりの解釈をあれよこれよと説明するペルポイさんと俺は堅く腕を組み合わせ、すっかり意気投合してしまつたのだった。

13・だつて男の子だもの（後書き）

前回の投稿は不評だつたみたいなので、精進致します……。暫く冒
険回となります。

14・そんなレベルで大丈夫か？（前書き）

更新遅れちゃってごめんなさい。

三種類作った14話のうち、悩んだ末にこれを投稿します。

14・そんなレベルで大丈夫か？

“噂をすれば影がさす”と言つ言葉がある。『人の噂は、ほどほどに』と言つ古人の教訓、所謂格言だ。

例え自分が噂をした当人でなくとも、目の前で友人などが誰かの噂をしていると、その話題の主が不意に登場してしまった時など、その場になんとな一く漂つ氣まずさに、思わず閉口してしまつものである。

これは成人するまでに誰しも、一度位は経験した事があるのでなかろうか。

とどのつまり、だらしなくポカンと口を開き、半目であれよこれよと思考を巡らせ（現実逃避する）俺が、何を言いたいかと言つとい……。

「あーーっ！ アンタ、あの時の！」

それは、ペルポイさんと出会つて数分しか経つてないのだが、すつかり彼と数年来の友人の様に打ち解けてしまい、浪漫（冒險）についての話題に花を咲かせて語り合つていた時の事だつた。何処か

で見覚えのあるポニー・テール娘が目を見開き、俺を指差して驚愕する。

「えつ？ あ……あの時のお兄さん！？」

遅れて彼女の後ろからひょいと顔を覗かせるのは、見目麗しい絶世の金髪美少年。

「（ベタだ……ベツタベタだ）」

おや、お知り合いですか？ と訊ねるペルポイさんに、俺はただ無言で引き攣った薄ら笑いを浮かべる事しか出来なかつたのだった。

「私達四人が」

「ええ、宜しくお願ひします。私は」

ポニー・テールの……なんだつけ。 そうそう、トリスだつたかな。彼女がペルポイさんと挨拶を交わしている所を見ると、やはり残りの同行者達はランス少年一行で間違いないようだ。

……あれ、四人？ 一人足りなくないか？ ランス君に、弓使いのトリスだ。斧使いのボクつ娘に、双剣使いの無口つ娘と……。

「……あのう、お兄さん？」

「つま、近づ！」

不意に俺を上田遣いで覗き込む美少年（ラモンス君）の顔に驚き、飛び退る。あ、相変わらずの距離感だぜ……。

前回の時の簡素な様相と打って変わって、本日は青を基調とした詰め襟の軍服風の服の上に、ブレストプレートを着込んだ冒険者らしい出で立ちだ。背中に背負った短槍と盾で戦う、機動性重視の片手槍型なのだろ？。

「え、えーと。なんで『じぞいましょうか』

前回の件（触手縛り）の事もあり、トリス嬢に後でどんな因縁をつけられるかと、思わず片言で返しでしまう。焦点が定まらず、視線が泳ぎ気味のランス君が仄かに頬を赤らめて話し掛けてくるのが、『別の意味』でも俺の動搖に拍車を掛けた。コワイ。

「その……、この前はありがとうございました。 それと『じめんなさい』

「……へ？」

予想外の言葉と共に頭を下され、間の抜けた声を漏らす。

「うん、この前は本当に助かったよ。 あ、ボクの名前はアグ＝ラーヴ＝。

ハーフ・ヴァルガンだ。アグで良いよ
パッチリとした二重で董色の双眸に、薄桃色の頭髪をサイドテールにしてまとめた垢抜けた容貌のボクつ娘 もとい、アグが頭部の触覚の様なアホ毛を指してはにかむ。

赤いチュニックの上にブレストプレート、二の腕まであるゴツい
籠手。白いブリーツスカートに、銀製のニーソ脚甲と言つフアンタ
ジーな装備だ。

なるほど、『鍛冶の民』のヴァルガンとのハーフか。ゲームの設
定では怪力で鍛冶職人系のNPCとして活躍してた種族だな。

初めて精錬場に訪れた時、いかついおっさんの頭部でみょんみよ
んと揺れ動くピンクのアホ毛には幾多のプレイヤーが衝撃を受けた
ものだ。巨大な戦斧が得物の彼女も例に漏れず、優れた臂力を誇る
のだろう。

「よし、先に紹介を終わらせちゃおうか。…………トリス……は後でい
つか。この子はガ・ウェン。ウェンて呼んだげてね。
彼女は口下手だから、ボクがまとめちゃうよー。

見ての通りネビロムで、最年少だけど戦闘力は折り紙付きさ

「アグに肩を抱き寄せられた無口つ娘 ウェンが、口をへの字に
噤^{つく}んだまま口クリと頭を下げる。

ネビロムは東側の大陸に集落のある戦闘民族だな。太陽の出でい
る昼間に身体能力が向上する“逆吸血鬼”みたいな設定があつたと
思う。

ウェンはネルよりも少し背丈が高く、肩口までの白髪、眠た気な
赤い瞳に尖つた耳のあどけない幼さの残る顔立ちだ。そして、
頬と額に三角形を象つた様な独特の紋様がある彼女は、ぴつたりと
した黒色のレオタード風のボディースーツに獸革の腰布を巻いた民族
的な格好だ。

「ああ、アグとウェンね。俺は術士のコーキ。特筆すべき所がないから簡単に。で、質問なんだけど助かって何？ 説明してくれるとありがたいんだけど……」

「コーキ……コーキさん……」

何故か俺の名前を反芻する様に呟くランス君を華麗に全力でスルーした俺は、後頭部を搔きながらアグに説明を促す。

「ああ、そうだね 」

「それは私から説明するわ。 短い付き合いだし、紹介の必要はないわよね？」

アンタの事は術士と呼ぶわ」

ペルポイさんと照会を済ませたトリスが、アグを遮り間に入る。

「こりゃ、トリス。 いくらなんでもこれから組む相手に失礼じゃないか？」

「そうだよ、トリスちゃん。 そんな言い方しなくても……」

「フンッ、ランスは黙つててよ」

一人に咎められ、鼻を鳴らしてむくれるトリス嬢。

「あー、大丈夫大丈夫。 そうだな。 人数も揃った事だし、道すがら聞かせて貰えるかな？」

ほら、依頼もあるし。ペルポイさん、挨拶も終えたんで行きましょ
うか

お手上げのポーズでその場を治めた俺は、こいつらの様子を怪訝な
表情で窺うペルポイさんに出発を要請する。

「ええ、そうですね。では、皆さん。改めて宜しくお願ひします」

ペルポイさんが至極丁寧に腰を折ると、皆が各自に応答を返す。

やれやれ、愉快な旅になりますだ……。

頭上を覆う梢から僅かに射し込む陽光が、空中漂う細かな水の粒
子に纏げに溶け込み、仄かな虹色の幕を作り出す。

そこは鬱蒼と樹木が生い茂り、正規の道程を外れた者を食えた獸
の跋扈する魔域へと誘い、取り殺す天然の迷路。

何処からか聴こえてくる狼系の魔物の遠吠えが樹木の海に残響し、
それに応じるかの如く、遅れて幾重にもあがる獸の咆哮が樹海を震
わせる。

クレイル樹海の奥地にまで足を踏み入れると、そこはある種
の迷宮となる。濃霧で視界が遮られるし、足場が悪いしで、もう最

悪。所謂迷いの森つてやつですなー。……あ、ランス君がコケた。

現在俺達は、咄嗟の反応に優れたランス君とウェンを前衛。中衛に中継ぎとして、トリス嬢とペルポイさん。後衛に俺とアグと言う隊列で、樹海の南西部 ペルポイさんの入手した情報にある《十字の袂》^{たもと}を目指して進行中だ。

「ウーンちゃん、チエイン（連撃）お願いつ」

盾を持つた小鬼に短槍の石突きで連打を加えたランス君の硬直時間補う形で、素早く間合いを詰めたウェンが盾を打ち上げられた小鬼の胸に双剣を叩き込む。

「ちょこまかと鬱陶しいわね……《飛燕》^{ひえん} 次つ！」

三本の矢を同時につがえたトリス嬢が弦を引き絞り、魔力の込められた矢を放つ。そして、放たれた矢が標的に届かぬうちに、舞うかの如く回転して腰の矢筒から矢を引き抜き、再びつがえて射る。

ヒュンと鋭い風切り音を鳴らして射出された矢は、木の上からスリングショット（パチンコ）よろしく変化した己の尻尾を用いて攻撃を仕掛けてくる猿の身体を次々と射抜く。

地上から襲つてくる魔物は前衛一人に斬り伏せられ、木の上からいやらしく奇襲を仕掛けてくる魔物も、名射手トリス嬢の活躍で一蹴。……正直俺の出番は無い。

そんなこんなで、やる事と言えばハッスルしている彼等に支援魔法を掛ける位で、すっかり手持ち無沙汰な状況下の俺に、同じく暇を持て余すアグが必然的に事の経緯を説明してくれていると言う訳なのだが……。

「ケイトだけ？ まさか、あの白フードの魔法娘が糸を引いていたとはなあ」

「うん、キミには本当に悪い事をしたと思つ

ケイト あの時、俺に凍りの矢を放つていた心酔つ娘こそが、ランス君を狙う組織からの刺客だったと言うのだ。どうもあの日、食事に思考を鈍らせる毒を盛られた挙げ句、狂化^{パーサイク}の術を彼女に掛けられていたらしい。

それでケイトは彼女達が良い感じにラリッちやつてるうちにランス君を殺そうとしたのだが、俺が縛つてるうちに状態異常が回復し、結果的に謀殺は失敗に終わつたみたいなのだ。

その後、正気に戻つた彼女達はケイトを問い合わせたが、一瞬の隙を突かれて取り逃がしてしまいましたとさ。うーむ。取り巻き（ハーレム）の中に暗殺者が居たなんて意外だつたな。

「まあ、あれは偶然だし。成り行きだよ、気にしないでくれ。ともかく誤解が解けてよかつたつて感じ？」

大袈裟に首を振つておどけた仕草を見せると、アグは口元を押さえてクスクスと笑む。

「ふふ、その偶然で命が救われたんだ。ボクらは幸運だな。あ、今更だけど、この口調のままでも良いかい？」

「ああ、楽な口調で良いよ。俺も堅苦しいのは苦手だし。

しかしだ、取り逃がしたつて事は、また襲撃される危険性があるって事だよな。もしかすれば、今すぐにでも

あ。と間の抜けた声を出したアグが立ち止まる。そして彼女は、一拍を置いて俺の肩をポンポンと叩き、取り繕う様にからからと笑い出す。いや、「まかされねーからなつ！」

「「一キさん、どうかしましたかな？」

肩を落として項垂れる俺に、前を行くペルトイさんが心配そうに声を掛けてくれる。

彼は商人とは言つても、メイス 金属鈍器と盾で武装した戦う商人なのだ。パワーファイター しかも、レベルはなんと163 ランス君達も187～160の間つて所か。俺だけだな、レベル一桁なの……。

「ちょっと… 足を引っ張るのは止めてよね」

俺に対してもひたすらジンジンなボーテ^{トコス} 娘が悪態つき、鼻を鳴らして踵を返す。嘘でもいいからテレをくれ。テレを。

「（ 彼女の事をあまり嫌わないでくれるとありがたいな。普段はあそこまでトゲは無いんだが、ランスがキミに憧れを抱いているみたいでね。どうもそれに妬いてるみたいなんだ（）」

「ぶつ」

アグに耳打ちされたあまりに突飛な理由に驚愕²、呆れ⁸の割合で目眩を起²した俺は樹木に頭をぶつけた。

「おや、大丈夫かい？」

「ダメだ。ライフ⁰だ。死ぬ前に、その胸に顔を埋めさせてくれ」「やれやれ、清き婦女子に頼む事柄じゃないね。それ相応の覚悟と責任が必要だけど、どうする？」

蠱惑的な笑みを浮かべ、腰に手を当てて胸を突き出すアグ。あー、一時はどうなるかと思つたけど、いつ言つ軽口が叩ける相手が居るのは救いだつたな。

「生憎と甲斐性ナシのヘタレなのはね。……残念だ、また怒鳴られる前に自己回復するしかないな」

賢明だな。と笑うアグに続いて一行の後に加わり、口元を覆つて大欠伸をする。

さて、このペースだと、もう半時もせずに『十字の袂』に着くだろう。初めてこここのクエストダンジョンに挑んだ時の様な期待と興奮を胸中に秘め、俺は奥地へと邁進するのだった。

コーキ・レベル41 術士?

ペルポイ・レベル163 商人

ランス・レベル175 短槍士

トリス・レベル168 弓手

アグ・ラーヴェ・レベル187
戦斧使い

ガ・ウェン・レベル160 双剣士

14・そんなレベルで大丈夫か？（後書き）

ランス君一行の名前が安易ですけど、統一したかったのでこんな形に相成りました。

アグさんは一行の中では一番おねーさんなのです。

それと、最後のレベル表記は参考値なので深い意味はありません。

15・掘つて掘つて人任せ（前書き）

ついに四半期4位に入る事が出来ました。応援して下さる皆様に感謝！

その後も、幾度かの魔物の襲撃を乗り越えた俺達は樹海を抜け短い雑草の生い茂る僻地へとたどり着いたのだった。

「じつぱりとした平坦な原っぱの中心には、縁の萌えるこの場にそぐわない配色（黒紫）の朽木が一本。そこから左に降った緩やかな窪地には、花崗岩の様な材質の巨岩を基準として、五つの白い石がペンタクル（五芒星）を描く様に等間隔で並んでいる。

「ふう。やつと樹海を抜けましたな。あの木の下で一休みしましょうか」

やれやれと、額の汗を布で拭うペルポイさんが朽木を指して嘆息する。恰幅の良い彼の大きな体格では、長い移動でかなりの体力を消耗してしまったのだろう。

「そうね。朝からずっと歩きずくめで、もうクタクタだわ

「あはは。トリス、キミももつと基礎体力付けなくちゃね～

「な……ッ！ アンタは術士と喋つてただけでしょ？ がつー

「ちよ……一人とも喧嘩はダメだよ～

両手を振り上げて的確に突つ込むトリス嬢と、それをからからと笑いあしらうアグの二人をランス君が目を回して仲裁に入る。

その横では、我関せずと言つた様子のウエンが、ヒラヒラと宙を舞う、蝶型のノンアクティブ（非戦闘型）モンスター（パピルス）を目で追つている。

「いやあ、若い人は元氣があつてよろしいですね」

一足先に朽木の根本に腰掛けて休息するペルポイさんの横に腰掛け、俺もその様子じやれあいを生暖かく見守る事にした。

「はは、ペルポイさんも十分元氣つすよ ちょっと失礼……『レノウアーチオ』」

ペルポイさんに両手をかざして“自己回復促進”魔法を唱える。本来の用途はHPとMPの自然回復上昇スキルなのだが、どうやらスタミナの回復にも効能があると言つ事はネルとの狩りで実証済みだ。

これが一見地味な様で効果は抜群。体感だけど、通常よりも倍は回復速度が違うから、浮いた休憩時間をまるまる行動に使えるのだ。夜の方にも使えるのだろうか……？ と、ふと疑問に思つたが、試す機会がないので断念する事にした。……情熱を、持て余す。

「おお……」れはありがたい。みるみるうちに気力が漲つてきますな！

さて、休憩がてらに今後の打ち合せと行きましょうか

「ういーす。少年少女ども。ミーティングだ、集まれー」

いつの間にかトリス嬢に首を掴まれて振り回されるランス君と、それを見てケラケラと笑うアグ　て「こと蝶々を追い掛けるウエン」を手招きして呼び寄せる。

最初は若輩者揃いで不安げな表情だったペルポイさんが、その様子を微笑ましく穏やかに眺めている様を見ると、それが彼の人柄なんだろうなあと伺えた。

こりゃなんとしても依頼を成功させたいねー。上手く行けば依頼料以上にも利益がある話しだしな。その辺に関しては出発前にペルポイさんと相談済みだ。

「ええ、では今から皆さんに説明を始めます」

皆が朽木の根本でペルポイさんを囲むようにして腰を降ろすと、彼は「ホンと軽く咳ばらいをして、薄茶色の古紙に殴り書いた伝承のメモを広げた。

大地を穿つ雷動石が轟く時、三賢者は黒き獣の内腑を求むる。

宵闇に臨む勇者達は贖罪の焰を点し、猛き狼の首級を掲げて朽ちた聖木に命を捧げよ。

されば、十字の袂にて慟哭の顎門は開かれん。

「ふうん。これが秘境へのヒントねえ……」

ランス君の横で足を斜めに崩して座るトリス嬢が、物珍しげにメモ紙を手にとつて視線を這わせる。ひとしきり眉根を寄せて紙と睨

めっこし、ウーンと首を捻つて隣のランス君を一瞥した彼女は唇を尖らせ早々に考える事を放棄した。

「……ランス。はい」

「えつ？ 僕つー？」

「ふむふむ？ これがヒントなのか。ペルポイのおじ様は日星がついているのかい？」

ランス君に密着して横から紙を覗くアグに、トリス嬢が抗議の声を擧げるのだが、それを華麗にスルーする彼女はペルポイさんに訊ねる。 その横ではウーンが何かの木の実を無表情のままかじっている。

「ええつー。この『十字の袂』と言つのは、我々の後ろにそびえる崖で間違いないでしょ？」

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、嬉々と口の豊満なお腹をポンッと叩き、赤茶色の断層が剥き出になつた軒く切り立つ岸壁を指差すペルポイさん。

「うーん。ただの崖にしか見えませんけども……？」

「この崖の上には、十字を象つた古い石碑があつてな。それで『十字の袂』って訳だ。ほひ、ここからつづり見えるだろ？」

「あつ、ホントだ。見えましたよ、コーリさんー。」

手の平を傘にして、崖を下から上まで眺めるランス君に石碑の位置を示唆する。100m程先の崖上の際には微かに十字のシリエットが見て取れた。その石碑も、クエストでは竜を地底に封じた英雄の墓標つて事になつてたけど、どうなんだろなあ。

「おお、『一キさん良ぐ』存知で！　　そしてつ、我々の頭上で枝を広げる、この朽木こそが『聖木』だと、私は睨んでいますつー！」

スイッチが入っちゃつたのか、興奮し過ぎて食い気味にまくし立てるペルポイさんが、両手を広げて天を仰ぐ。ランス君達一行はこの人、こんなキャラだつたの？　と顔を見合わせて困惑顔だ。

若干一名だけは黙々と木の実をかじつているがつ。お腹空いたのね、そうなのね。

とにかくにも、ペルポイさんの解釈は正解だ。崖上の石碑の直線上に根を張る、一本の朽木　幹の周囲が凡そ3m程で、葉の抜け落ちた黒紫色の枯木は表面に満遍なく亀裂が入り、ひび割れている。鈍く光りを反射し、ツルリと手触りの良いその材質は、木のそれよりも結晶化した石に近く、俗に“黒曜樹”と呼ばれる木材によく似ている。

「この枯れた朽ち木こそがクエストの最後の鍵になつている『聖木』と言う訳だ。まあ、開始イベントである、『雷動石』をどうにかしないと何も起こらないんだけども……。

「え、と。『猛き狼』つて言つのは、この辺りの領域に出る“狼王・リュカリオン”の事でしょうか？　　その……、たまに遠吠えも聞こえますし」

ひとしきりに朽木の周りを歩いて調査したランス君が、木を撫でながら遠慮がちに意見を述べる。

リュカリオンと言つのは、狼王の名の通り、ここから一帯を徘徊する狼型の中ボス級なコニークモンスターの名だ。初心者の頃、迂闊にちよつかい出して頭からかじられたのも良い思い出。その後、軽くトラウマになつたつけ、うん。強さとしては低位なので、今の俺達ならまあ問題ないだろ。」

「はい、そうだと思います。他にも、この周辺には三つの祠が等間隔で建てられているとか……。三つの祠、三賢者……関連性のあるモノは風漬しに調べて行こうと思います」

おおひ、よく調べてらっしゃるペルポイさん。んー。ここまで情報が出揃つてるなら、とっくにダンジョンの入口が発見されても可笑しないのだが……。“アレ”なんだらうなあ。上体を伸ばしつつ左方向の溝地を一瞥し、短く息を吐く。

「ふむ。内容は概ね理解出来たけど、伝承の最初にある、雷動石つてなんなんだうねえ？ “黒き獸”って言うのも漠然とし過ぎてこるし……」

足を組んで木の根に腰掛けるアグが訝しげに首を捻る。そして、このまま問答を続けるのもなんだし、嘘も方便。ちやつちやと進めてしまおひ。

「あー……俺も秘境の事については前々から色々と調べててね。雷動石にはちよつと心当たりがある」

「ホントですかっ？」

ランス君が俺の隣に両手をペタンと地面につけてしゃがみ込み、何かを期待する様な眼差しで見詰めてくる。か、顔が近い が、もういい加減慣れた。人間は成長する生き物である。彼の振り撒くフェロモンを、取り巻き少女達の生足で毅然とレジスト（相殺）した俺は、人差し指でランス君のデコを押し返しつつ説明を続ける。

「ああ、それは 」

「オイラア 陽気な炭鉱夫。鍛えた身体とツルハシで、エンヤコラシヨ、ドツコイシヨ。 はあ～」

手の平に風の球体の圧縮し、削岩機よろしく地面を慎重に削り取つて行くと、幾何学的な模様の刻み込まれた灰色の台座が土の下から顔を覗かせる。 今回の依頼で初めて行う仕事らしい仕事は、なんと穴掘りだった。

俺の脇ではウェンがしゃがみ込み、どうみても『俺に気安く触れると漏れ無く火傷すつぜ?』と、懇切丁寧に忠告するかの如く、紫地に赤や紺の斑点の入った毒々しい警告色をした蛙型のモンスター（ポムフロッグ）を静かに観察している。

……彼女は俺の護衛らしい。他の四人は三つの祠を調査しに行ってしまった。

「……」

「あつ、こら。つづいちゃダメでしょ！ なんか毒液染み出でるからつ」

木の枝で蛙をつづいて弄ぶウェンに制止を促し、額を抑える。どうしてこうなった。それもこれも全部、雷動石起動用の仕掛けが丸々この下に埋没しているからだ。畜生めつ。

『雷動石』とは、朽木の左側の窪地に鎮座した花崗岩風の巨岩の事だ。本来なら周囲に設置された五つの石に雷属性の魔力を通す事で中央の雷動石に連動し、起動させる簡単な仕掛けなのだが。

周囲の石に魔力を通わせても反応は無し、俺の記憶中の雷動石は下方の台座部分が露出していたはずだが、今ではそれも土の下。

俺の勝手な推測ではあるが、注いだ魔力を充填する役割のあ、雷動石下方の台座に嵌めこむ魔石が何らかの理由で故障ないし、紛失 そのまま放置された結果がコレ（埋没）なのだとと思う。

交換しとけよ。と思ったが、台座に嵌め込む充填魔石自体が、イ
ベント入手品だつたしなあ……。

そんなこんなで俺は、祠の搜索をペルボイさん達に任せて魔石の状況を確認すべく、一人えつちらおつちらと六掘りに勤しんで居る訳だが……なんともみみつちい話しだある。うー、腰が痛い。

あ、何も俺が掘らなくてもいいじゃないか。

ポンと手を叩いて得心した俺は外套についた砂埃を払い、早速インベントリ内からソフトボール大の茶色い玉を取り出して詠唱を始める。程なくして発動待機時間を終え、爛々と煌めく玉を俺は地面へと放り投げた。

「《サモン・ゴーレム》」

存分に魔力の込められた玉は、慣性の法則に従つて緩やかに落下。それと同時に玉を中心として魔法陣を展開見る見るうちに周囲の土を取り込み身体を形成して行く。

『ム……』

そして、俺の眼前に姿を現したのは、体長2m程の土人形。太く逞しい四本の腕を持ち、頭部と足に当たる器官は無く、地面を這いずる様にして移動する異形な魔法生物だ。胸部には核となる“茶色い玉”が、仄かな光りを放ち収まっている。

「よし……ゴーくん。後を頼めるか?」

名前の安直さはご愛嬌だ。台座の指差し、作業を伝えると、頭部が無いからだろうかゴーくんは上体を揺らして了承の意を示す。

一見、その無骨な風貌から纖細さに欠ける彼(?)だが、四本の腕をかざして器用に台座についた邪魔な土だけを吸収して行く。俺は傀儡系スキルの熟練度が低いから、戦闘で扱う機会はなかつたん

だけども、こんな汎用性があるなんてな……。

「凄いぜ、ゴーくん。頼もしいぜ。よつ、六掘り名人！」

『ム、』

黙々と作業を進めるゴーくんが、四本のうち一本の手の平をこちらに向けてヒラヒラと振り、俺（主人）を追い払う動作を見せる。

「創造主に対しても振る舞いつ？！」

発掘をゴーくんに丸投げした俺は、掘り掘りする彼の一挙手一投足に反応を見せるウーンを観察したり、スキルの改造、調整を行いのんびりとした時間を過ごした。

30分程も経てばゴーくんが台座を綺麗に掘りだしてくれた、が案の定、魔石が収まるべき所には何もなく、そこには半円状の窪みがあるだけだ。

「つか、やつぱりか。充填魔石のストックは……六個。ま、先行投資つて事で」

曇り一つない、無色透明なソレを半円状の窪みにあてがうと、力チリと言つ音を立てて隙間なく嵌まり込む。

「後は魔力を流すだけ……か。ウーン、一旦口を呼ぶぞー？」

俺が後ろを振り向き訊ねると、ゴーくんをペタペタと触るウーンが、コクリと頷く。

「よし、いつちょ派手に打ち上げるか

右手をかかげて、“花火”の詠唱 そして射出を行う。ヒュルヒュルと独特的の風切り音を鳴らし、天高く打ち上げられたそれは、一定の高度にまで達すると、腹にズシリと響く破裂音を轟かせ、青空に極彩色の菊の花を咲かせる。

「たーまやーつ

今のは割とポピュラーな割物花火。夜だともっと綺麗なんだけどな……。

ネタスキル『夏の風物詩』。色々な種類の花火をランダム生成で打ち上げるスキルだ、ちなみに殺傷能力はほぼ皆無と言つてい。これを合図にペルポイさん達はこちらに戻つて来てくれるはずだ。

「……ん？」

パラパラと降り注ぐ花火の残滓を眺めて居ると、袖を引っ張られているのに気付く。そちらに視線をやると、ウエンが上を指差し、何度も袖を引いている。

「……ははん？ もつと見たいって事だな」

俺がニヤリと笑み、訊ねると、ウェンは何度も顎を引いて返答する。その後、ウェンを「哥ーくんの上に乗せてナイアガラ型、土星型……等など、次々と花火を打ち上げ続けたのだが……。

突如、根本から力任せにへし折られた樹木がこちらに吹き飛んできる。

「……！」

『グルルルル……』

「お？」

豪快な破碎音と共に樹木を薙ぎ倒し、正面の茂みを搔き分けて俺達の前に姿を現したのは 『ごわごわ』とした濃灰色の体毛に、三対六眼の金色の瞳。

鋭利な歯の並ぶ深く裂けた口元から下へ突き出るのは、思わず自重しろと言いたくなるサーベルタイガーも真つ青な一本の鋭い牙。

強靭さを感じさせる洗練された肢体に、先端が二股に分かれた黒い尻尾を持つワゴン車サイズの巨大な狼の王 その名も、リュカリオン。

「……おお。捜す手間が省けた（調子に乗り過ぎた）……な」

花火の音にすっかり『機嫌斜めな様子で殺氣立つ』狼王の背後からは、取り巻きの狼達が涎を垂らしてぞろぞろと姿を現す。……ざつと二十頭つてとかね。

「……」

ゴーくんから飛び降りたウェンが腰に佩びた双剣を引き抜き、クルクルと回転させて逆手で腕を構える。

「本日初戦闘だなつと」

俺もオクスタンロッドを具現化し、肩に担いで詠唱を始める。

『ヴォオオオオオンッ！…』

金色の六ツ眼に怒氣を孕んだ狼王が天を仰いで咆哮を挙げると大気が震え、それに応えるが如く、取り巻き達が次々と咆哮を挙げる。

今ここに、開戦の火蓋が切られたのだった。

15・掘つて掘つて人任せ（後書き）

誤字、脱字等があればご報告して頂けると助かります。

16. フレームアカウト（繪書モード）

更新が遅くなつて申し訳ございませんでした m() m

リュカリオン　スレイヴ・ウルフ
狼王に統率された狼達は先ほど下された号令から大地を蹴り上げ、
跳ねる様に疾駆する。

低い唸り声を挙げ、突つ込んで来る奴らの陣形は、扇状に展開して俺達を取り囲む形だ。集団で狩りをする狼らしく、数の利を生かして各々が一対のペアを組んで連携し、こちらに襲い来る。

トリス嬢に俺の護衛を頼まれたウェンは、圧倒的物量で迫る狼達相手に臆する事なく、落ち着いた様子で向かい来る第一陣を断ち切るうつと双剣を水平に構えて悠然と歩を進める。

「実に頼もしい……が、俺も曲がりなりにも一十歳を過ぎた男だ。いくら実力者と言つても、さすがに中学生くらいの娘さんに護つて貰うだけってのは自尊心が傷付くつもんだ。」

「ウェン、近付いて来た奴だけ頼む。　　ゴーくん、前方10mまで進行、『越えた』奴らを蹴散らせ」

魔法の発動^{スタンバイ}状態に入った俺が声を掛けると、ウェンはピタリと立ち止り、こちらの意を汲んでくれたのか、首だけをこちらに向けて顎を引く。

俺の指示を受けたゴーくんは身体を這いずらせて進み、大きく四本の腕を広げて狼を迎撃つ体勢を取る。

「頼んだぞーっ 《ウェアリイ・スワング》」

最初の狼集団が攻撃有効範囲にゴーくんを捉え、飛び掛かる寸前で俺は魔法を発動させた。

『ギャッ？！』

不意にゴーくんの前方の大地がぬかるみ、狼達の身体が沈み込む。

これは足元が『土』と言う状況下でのみ使用出来る妨害スキルで、対象の移動を妨げるだけに止まらず、沼から脱出した後も移動速度減少、回避率減少等のバッドステータスを附加するなんともいやらしい魔法だ。

それを嫌がらせとばかりに一、三設置して行くが、本能で動く狼達も馬鹿ではない。何匹かの仲間が沼地に沈めば、直ぐさま危険を察知して沼地の間を縫うようにして駆けてくる。

泥濘で進行方向を制限し、こちらが誘導した通りに狼達が移動してくれて自然と笑みが零れた。

「おっ。わざわざちから集まつてくれて嬉しいねえ」

《ソニア・プリズン（荆の牢獄）》

突如、地面が揺れ蠢いて隆起し、一力所に集めた狼を囲う様にして、半径5メートルの円形型に鋭い刺がずらりと並んだ荆の蔓が大量に飛び出す。

現れた荆は互いに複雑な菱形網状に絡み付き、悍ましいドーム型の牢獄を形作る。そして、俺が腕を振り下ろすと荆の刺壁が中心に向かって一撃に集束。

ギシリと軋みながら圧縮された牢獄は、

狼達の痛苦の断末魔と共に真紅の華を咲かせて四散した。

「おお、……現実で使つと少々酷だな……。なんか悪役っぽいし」

地形を生かし、これ幸いと土属性の中級規模範囲魔法を使ってみたのはいいものの、想像以上に凄惨な様子に思わず顔を顰め、口角を引き攣らせながら視線を前方に向ける。

沼にはまり込み、運よく串刺しを免れた狼達も、俺が“指定”した境界線を越えた事により、碌に身動きも取れないままに容赦無くゴーくんの拳骨を頭上から叩き込まれ、次々と戦闘不能に陥つていく。

この泥濘ないし、拘束術しかり、俺は大魔法でドカーンと暴れるのよりも、こう言つ地味で狡い（こすい）戦い方が好きなんだよな。こう、性に合つと言つか……。もちろん派手な大魔法も好きなのだが、性格の地味さが戦闘スタイルに滲み出しているのかも知れない　ま、今更なので気に止めない事にした。

「……」

ウェンは俺の脇で戦闘を寡黙　と言つた沈黙のままに眺めているが、先程から尖つた耳を垂らし、ソワソワとしてどうにも落ち着きが無い。……えーと、もしかして。

「ウェン。……やりたいのか？」

俺の質問に、垂れた耳をピンと立ててコクコクと首を上下させて答えるウェン。……そういや戦闘民族だっけか、この娘。

「んじゃ、攻守交代！俺は支援に回るから任せ
はつや！」

言い切る前に脇目も振らず突っ走つて行くウエンに、俺は苦笑しつつも身体強化魔法を施し、その後に続いた。

そんなこんなで、四本の剛腕で狼達を掴んで、投げて、振り回して縦横無尽（やりたい放題）に圧倒する「ーくんと、神風娘の活躍の甲斐もあり、取り巻き連中はほぼ壊滅。後は全身の毛を逆立て、低い唸り声を挙げてこちらを睨みつけるリュカリオンと、取り巻きの四匹を残すのみだ。

「残りはお前らだけだな。そ、遊びつかワソンちゃん？　まやはお手からだな」

杖に付着した血を振り払つて地面に突き刺し、右手を狼王に差し出して手招きをする。

『グアアアアアアツ！』

果たして俺の安い挑発が効果を成したのかは定かではないが、狼王が今までの物よりも遙かに大きな咆哮を轟かせ、俺とウエンは堪らず耳を塞ぐ。

そして、激しく耳を打つ轟音が止むと、狼王の背後の藪から^{やぶ}は唸り声と共に新たな取り巻き狼達が次々と姿を現す。所謂、取り巻き召喚だ。

「おひとー……これじゃあ、お手をするにも手が足りないな。
ゴーくん、腕を増やしてみないか?」ここは思い切って、ヘカトン
ケイル(日本腕)とかどうよ?」

『ム、』

「ひらりを振り返り、いらん事すんなど言わんばかりに、腕を左右に振るゴーくんに……つてウーンもかよ。俺は肩をすくめて魔法の詠唱に入るのだった。

「雑魚は消えなさい!」

『ギャ……ッ』

キラキラと光る魔力粒子の軌跡を描き、鬱蒼と生い茂る樹木の隙間を縫つて疾る矢がコモンゴブリン達の眉間に次々と突き刺さる。

「もうつ、歩き難くて堪らない よつ!」

前方のコモンゴブリンを《フェイルノート(必中の弓)》で射るトリスちゃんに、続くアグちゃんが背中に背負った《アルカイド(破軍の戦斧)》を装備し、魔物を數ごと薙ぎ払つて道を切り開く。

つい先程まで空にゴー君さんが打ち上げたと思われる信号が上が

つていたのに、魔物 恐らく狼王の大きな咆哮の後からそれがピタリと途絶えてしまった。一人は無事だらうか……安否が気掛かりで胸が締め付けられる。

「大分近付いてきましたな。この林を抜ければ、あの野原だと思います。

皆さん、もう一踏ん張りですぞっ！」

ペルポイさんが円形の金属盾バックラーでスレイヴ・ウルフを殴り付けて怯ませ、鉢のついたメイスを振り下ろす。そして、前方を指差すとお腹をポンッと叩いて揺らした。

「嗚呼、これだけ動いているのに私のお腹ときたら……。さつ、行きますよ！」

口惜しそうにペルポイさんがお腹を摩つて走り出す。その様子がなんだか可笑しくて、先程までの緊張が吹き飛んだ様に思えて僕たちは顔を見合わせて破顔した。

林を切り抜け、野原に辿り着いた僕たちの前で 土媒体の魔法生物レムゴーが四本の腕で狼王を押さえ込み、その脇ではウェンちゃんが取り巻きの狼達を擦り抜け、狼王に一心不乱に攻撃を仕掛けている。

一見隙だらけのウェンちゃんの背後から飛び掛かろうとする狼は、攻撃の寸前でガクリと動きを止めて、ヨーキさんの射出する土の杭で正確に撃ち抜かれている。狼達のその様子はまるで、見えない“何か”に足を捕われている様に思えた。

『グアアアアッ！…』

血に濡れた狼王が、組み合つてゐるゴーレムの左上腕に牙を食い込ませ、そのまま力任せに首を捻つて腕を引き千切つた。狼王がねじり切つた丸太の様な腕は、地面に落ちると土塊になつて崩れ去る。

あのゴーレムはコーリーさんか……？ だとすれば、精霊術に神聖術……それに傀儡術まで扱えるなんて、軽く見積もつても。

「……どうやら彼は、ボクたちよりもずっと実力者なのかも知れないとね。

ランス、ぼうつとしてる暇はないよ？ ボク達も行くよ！」

呆ける僕の肩を叩いてアグちゃんが駆け出す。ふと我に返ると、ペルポイさんとトリスちゃんはそれぞれ近くの狼達に攻撃を掛けていた。

「う、うんっ！」

右手に持つ《ピ・ナーカ（軍神の焰槍）》の柄を握り直し、僕も皆の後に続いてコーリーさんの元まで走る。

「おつ、助かったー。取り巻きが多くてしんどかったのよ ゴーくん、ウーン、衝撃波くるぞ。下がってくれ」

「こちらに気が付いたコーリーさんが左手をひらひらと振つて僕たちに強化魔法を掛ける。コーリーさんは笑みながらも視線は狼王から外さずに、その拳動を見定めている様だ。 事実、その後すぐに狼王は前肢を大地に打ち付け、衝撃波を繰り出した。

それをヒラリと宙返りで躲したウーンちゃんは、逆に双剣で狼王に反撃を『え、ゴーレムは残つた三本の腕を交差させて衝撃波から身を護る。

「凄い……」「一キさんは攻撃がわかるんですか！？』

「近づ！……ああ。大体一定の行動ルーチン いや、観察した結果だな」

僕が詰め寄ると一キさんは物凄い早さで後ろに飛び退り、両手をバツに交差させて警戒の色を見せる。なんで一キさんは僕と距離を取るんだ？……？ 僕としてはもっと仲良くなりたいのに、酷いです。

「術士！ リュカリオンが魔素を溜めてるわ。なんとかしなさい！」

僕の隣でウーンちゃんの周囲の狼に牽制射撃を行つトリスちゃんが怒号を擧げる。視線の先にはゴーレムと組み合つたままの狼王が、低い唸り声を擧げて口内に炎の魔力を集束させている あればブレス（火炎放射）攻撃だ。

……それでも、トリスちゃん。なんとかつて……うう、相変わらずだなあ。

「はいはい、お嬢様。なんとか、ね

『アースニードル』

肩をすくめて一キさんが放つた土の杭は“ゴーレム”に突き刺

さり、先程の狼王の攻撃で欠損した腕が再生される。そして、素早く腰のベルトに刃の着いた杖を差し込み、狼王に向かつて駆け出す。その姿にトリスちゃんが短い悲鳴を挙げる。

「なつ、正面から……。消し炭にされるわよー?」

何時でも回避行動を取れる様に油断無く構えるペルポイさんにアグちゃん、魔素を溜める狼王から離れたウェンちゃんを尻目に、引き絞つた矢の様に駆けるゴーキさんは次の術式を開いた。

「ゴーくん、思いつ切り殴れ（アースシェイカー）！」

「ゴーキさんの両手から光りの帯が伸びて狼王の首を縛り付けて固定する。そして、四本の腕を凝縮させまるで“巨人の拳”の様な形態に変化したゴーレム^{アシバーカット}が、狼王の固定された顎下に潜り込み、全身を武器に打ち上げ攻撃を行つ。

『……ツ?』

その衝撃に狼王の口から突き出した一本の長い牙は、鈍い音を上げて根本からへし折れ、口内に溜めていた赤い魔素は搔き消えて煙りの様に四散する。

いつも言つ場合、通常は僕たちみたいに万全を期して攻撃に備えるか、相手の足元を狙つて体勢を崩して行動を阻害するのが定石だけ^{セオリー}……こんな破天荒なやり方をする人を、僕は初めてみた。

「……あんなの、あり?」

「あはは、無茶苦茶だね」

「いやはや、頼もしいですね」

そう思つたのは僕だけでは無いみたいで、他の皆も目を丸くして呆然としている。

「そのまま、エアリアル（上空攻撃）アシスト」

ベルトから杖を外したコーキさんが疾駆しながら指示を下すと、ゴーレムは元の形態に戻つて狼王とコーキさんの間に入り、狼王の前肢をつかみ取る。

そのままゴーレムの背を台にして駆け上がり、跳躍したコーキさんは狼王の首筋に杖を突き立てる。そして、勢いのままに空中で身体を翻して逆さまになつたコーキさんは悪戯な笑みを浮かべた。

「延髓直結は痺れるぞつと 『サンダーフォール』」

コーキさんが黄色い術式を纏つた右手を振り下ろすと、狼王の首に突き立つ杖に轟音と共に一筋の稲光が走り、全身を大きく震わせた狼王は、脚を折つて力無く地面に崩れ落ちる。

「よしつ お？ お、おおおおつ？！」

そして、僕たちを驚愕させた張本人は跳躍の勢いを見誤つたのか、背後の樹木の枝を折りながら藪の中へと消えて行つてしまつた。

「ええつ？！」

「……アホだわ」

「彼は出来るアホだよ。そつ信じたい」

群れの主を失い、蜘蛛の子を散らす様に撤退する狼を一瞥して嘆息するトリスちゃんと、戦斧を地面に突き立てて伸びをするアグちゃん。

「「、ヨーキさん、大丈夫ですか？」

「……」

慌てて藪に飛び込んだペルポイさんと、『ヨーレムを撫でるウーンちゃんと共に、僕もヨーキさんの捜索に向かうべく駆け出したのだった。

16・フレームアウト（後書き）

残酷、15Rタグ無しなので戦闘描写がぬるいかも知れません。要望があればタグを追加して、今後は血生臭く無い程度に描写して行きたいと思います。

今回の話しには（）等のルビが多く入っているので、鬱陶しい！読みにくい！と思う方が居れば修正&今後の執筆の参考にさせて頂きたいです。

いささか寝心地の悪い茂み（ベッド）に体重を預け、呆けたままに頭上を仰げば……開けた梢から覗く、何処までも青い蒼天と、ヒラヒラと舞い落ちて来る青葉の小雨。そして、遠ざかってゆく文字通り狼狽えた様子の甲高い獣の鳴き声。

「うへ。葉っぱが入った……」

口内のパサパサとした舌触りの葉っぱを吐き出し、木の枝で擦つた頬を撫でる。いやはや。魔法の出力しかり、今回の力加減しかり、こっちに来て一週間も経つつてのに上手く行かないもんだ。

ゲーム感覚の癖のままに動くと、どうもやり過ぎてしまつ傾向がある。この辺も慣れだらうなあ。今回は大丈夫だつたけど、レベル1のアースニードルなんて通常は俺の腕サイズなのに、集中を乱して気を抜けば、同じレベル1でも丸太サイズになるんだもんな……。

この世界だと、魔力量でサイズが変わるんだろうか？ 消費魔力は同じとは言え、どうにも不格好窮まりない。

「ヨーキーさん。大丈夫ですかー？」

「うわー、ペルポイさん、救出に来てくれたらしい。俺は両手をヒラヒラと振って無事を伝えた。

「うーーす。大丈夫です、ちょっと張り切り過ぎました」

頬を引き攣らせて自嘲氣味に笑む俺に、いやいやと破顔して手を差し出すペルポイさんの腕を取り、引き起こして貰う。

その肉付きの良い手を握ると、昔の職場の同僚のおっさん達を思い出してなんだか嬉しくなった。いや、おっさんの腕を握つて嬉しいってのもどうかと思うが。

……まあ、あの頃は充実してたしな、イロイロと亜麻色の頭髪を揺らして笑うアーヴィングの顔が脳裏に浮かび、チクリと疼く腹部を抑える。

「『一キさああんつ』

「ぬつ? !」

咄嗟に危険を感じた俺が半歩身体をずらすと、木の根に躊躇、こちらに両手を広げて飛んで来たランス君が茂みに頭から突っ込んだ。なんで毎回口ケたり、全力で飛び込んで来るんだ？ ラブ口メの主人公か、オイイツ！

暫く、茂みに突き刺されたランス君をペルポイさんと呆然と眺めた後、お互に何を言つまでもなく顔を見合わせて小さく頷く。

「その、なんだ。大丈夫か？」

「たふけてください

遅れてきたウェンと、茂みからランス君を引き抜いた俺達は、狼の素材回収をしていたトリス嬢達と合流し、《聖木》の下で一日一晩食休憩を取る事にした。

彼女達が回収してくれた戦利品は以下の通りだ。

狼王の首級 ^{しゅじ} × 1

狼王の鋭牙 × 2

狼王の

……と、他にも狼素材が多数。今回必要なのは、首級だけなので割愛する。

狼王系の素材からは敏捷性に補正の掛かる装備が作れたはずだ。買い取り希望者が居なければ、素材は依頼終了時に、ペルポイさんがギルドの買い取り価格よりも割高で買い取ってくれるらしい。特に素材を必要としない俺は、了承の旨を伝えた。

「……で、術士。アンタ、一体何者なの？」

薄桜色のナプキンを膝に広げ、上品にサンディッチを食べるトリス嬢が鋭い視線をこちらに向ける。

「はあ……？」

「」の世界の携帯食はサンディッチが普及してるんだな。 等と思考に耽つて居た俺は頬杖を突いたまま、間の抜けた返答をした。

「とぼけたつて無駄よ？ アンタが『真紅』^{バイローブ}いいえ、少なくとも『灰紅』^{グロッシュ}級の実力を持つてるのは子供でもわかるわ」

ビシリと腰に手を当て、したり顔でこちらを指差すトリス嬢に、俺は肩をすくめて両手を挙げる。

彼女の言う灰紅、真紅とはギルドの五つあるランクを示す称号の様な物らしい。確かに、ギルドで貰ったパンフ（冊子）にも書かれていたが、住所不定の俺がギルドに入るには条件が面倒だし、特に興味がなかつたから流し読みしてたなー。 真紅は上から二番目だったと記憶している。

ゲームに慣れ親しんだ俺としては、英数字でランクを示してくれた方が至極わかり易いのだが……、どうもいまいちピンと来ない。色が赤く、濃くなつて行く程にランクが高くなると見えればいいのだろうか。

ちなみにランス君達は下から一番目の『蜜紅』^{スペーサ}に当たるらしい。もちろん、ギルドに未登録の俺はそれより下の見習いクラスになる。

初心者ダンジョンに入り浸つて居た俺には、どのランクがどれ程強

いとかせつぱりだわや。トリス嬢が何を基準にランクを判別してるのが甚だ疑問だが、あれこれと問い合わせられる言わはないと思う。

「なんだ、そんなに俺と親密になりたいって？」

「な……ッ。誰がアンタなんかと…」

「つまり、そういう事だろ。いらぬ詮索は無粋だよ、トリス」

「そういう事。」と俺が付け足し、場を治めてくれたアグに視線を送ると、彼女は微笑して首を傾げる。しかし、それでまた以前の様にトリス嬢から暗殺者と疑われるは勘弁して頂きたい。ある程度の事情は話すべきだろ。もちろん、馬鹿正直に話すつもりはないけれど。

「いや、実際は隠す程のもんでもないんだけどな。俺は物心つく前に親に捨てられた身の上なもんで、ギルドにも未登録なんだ。

で、今回の依頼を成功させて「ネを作つときたいってワケ」

戦闘技術に関しては、生き延びる為に血の滲む様な努力をして身につけたと言う事にした。努力については、何かに没頭して寝る間を惜しんでレベル上げに時間を費やしたのだから、一応嘘は言つてないぞ、うん。

しみつたれた雰囲気にならない様に、俺が身振り手振りを交えて笑みながら説明をすると、トリスは顔を曇らせて押し黙る。いくら明るく語つても、こんな話を聞かされれば、余程精神の図太い奴で無い限りこれ以上は踏み込めまい。

「そう……。悪かったわね」

「ヨーキさん。この依頼、必ず成功させましょうねー。」

割と素直に頭を下げるトリス嬢と、真摯な表情で俺の手を取り、宝石の様な碧眼に氣力を漲らせるランス君。……あれ？ トリス嬢の事だから、もつと突つ掛かって来るかと思ったが、とんだ肩透かしである。さつと根は良い子なのだろう。

仄かに胸中に去来する罪悪感を、ま、いつか。と、即刻脳内のごみ箱にポイした俺は、茶色いパンに魚の姿焼をそのまま挟んだだけの斬新な食べ物 バトラーさん手製のサンマもどきサンドを口に運んだ。……意外とイケるな、これ。

「なるほど。それでキミは新ダンジョンを発掘し、ギルドの評価を得ようと算段してると言つわけだ？」

ウーンの口の周りについたソースを拭いながら、アグが得心した様子で言つ。

「『明察。ギルドから“それなり”の評価を貰つて置いて損は無いし、……何より得られる利益も美味しい』

サンドイッチの残りを口に放り込んだ俺は、ウェストポーチに仕舞つていたパンフを取り出し、ページを一、二めくつて、ある項目に目を通した。

そこには、ギルドの紹介用に簡略化された大雑把な事柄しか書かれてないが、記された内容をかみ砕くとこうだ。

未確認、もしくは未登録のダンジョンを発見した場合、内部の探索、調査情報を最寄りのギルドに報告した者には、その後そこから得られるギルドの利益の一一定額を支給する。

つまり、俺達が『盲田竜の顎門』^{あごど}を発見したとしても大本の所有者は、基本的にこいら一帯を管理しているフランチエスの物となるのだが、発見者である俺達のパーティーにはそれに伴うギルドの収益から、それなりの手数料が貰えると言つワケだ。

出発前にペルポイさんから詳しい事を問うた結果 手数料は1%程度との事だつたが、中から採れる鉱石や、手に入る素材の事も考えれば大きな利益になるだろつ。“幻”と謳われる黒甲殻竜素材^{シユガアルジエイド}は値崩れするだろうけど、全体の利益から見れば瑣末^{さまた}な問題だ。

ま、込み入つた話は依頼が終えた後に、依頼主で口伝の持ち主であるペルポイさんに一任すればいいだろつ。頭の悪い俺は、そう言う権利だとか、なんだとかの内容に疎いし、ギルドに俺達の記録の残つた状態で、商人の彼が利益を独り占めする様な事になれば沽券に関わる事だしな。

そもそも俺の目的は金よりも、新ダンジョン発掘でギルドから得られる評価がメインだつたりする。今の所ギルドに登録するつもりは無いが、ある程度の信頼を得ておけば、いざという時に役立つかも知れない。

もし、必要に迫られる時が来れば即座に対応出来る様に保険が欲しい。そんな打算も込みで、俺はある気掛かりを抱えながらも腹を決めて依頼を受けた。……しかし、そんな俺の懸念も、どうやら杞憂に終わつたらしい。

『盲田竜の顕門』は、何百年も不可侵の秘境と言われるだけあって、“見学”を考える人間は案外少ないみたいだ。発見さえすれば働かなくとも金が入る。これだけ美味しい話なのだから、俺はもつと見学ハイエナ希望者が付けて来ると思ったのだが……前方の林の影に一人と、左の茂みに一人。潜伏スキルのレベルが低くて、バレバレだつつーの。

こちらの人数を考えると、他にも大勢仲間が居ると考えた方が良さそうだな。わざわざ田の前で、必要以上に土系の魔法を多用する所まで見せたのだから、せいぜい対処法を考えて欲しいものである。

「おや。疲れが取れませんかな？」

見張り役のお粗末な潜伏に辟易とした俺が、呆然と林を眺めて眉間を揉んでいると、肉等の具材がたっぷり入った大きな饅頭を、一口大に千切つて食べるペルポイさんが怪訝な表情で訊ねてくる。

大柄な外見に見合わず、ペルポイさんの昼食はそれ一つらしい。彼曰く、ダイエット中との事。……人のオカズにまで手を出す、あの生意気な大飯食らい（ネル）にも見習つて欲しいものだ。

「なんつーか。こんなに気を張るのって久々で」

「はは、コーキさん程の使い手でも緊張するんですね」

「よして下さいよ。少し魔法は使えますけど、見たまんま貧弱なんですか？」

その分、前衛は私が頑張りますよ と豊満な腹を揺らして意気込むペルポイさん。

「あはは。でも、依頼主にばかり戦わせる訳にはいかないよね？」

「……」

果物ナイフで林檎の様な果実の皮を剥いて兎型にするアグと、それに視線を向けたまま頷くウェン。

「登録者の先輩としては、後輩の補助をしてあげる義務があるわね」

「もつひ、ト里斯ちゃんてば素直じゃないんだからー」

「ひめこ。ランスの癖に生意氣よつー」

「ふえつ?ー」

そして、俺への風当たりが多少柔らかくなつたト里斯嬢、相変わらずのランス君と、その後も有意義な昼食タイムを過ごしたのだった。

17・追跡者と達観者（後書き）

次回の更新から、残酷タグが付くと思います。そこまで酷くはなりませんが、一応予防線と言つて、平たく容赦下さい。

18・俺達フェティシスト（前書き）

今後の予防線として、今回から残酷タグをつけさせて頂きます。暑くなりましたねー、どうか皆様も熱中症にはお気をつけ下さいませ。

昼食を終えた俺達は、「一くんが掘り出した雷動石にサクッと魔力を注入『盲目竜の顎門』出現の第一条件である“雷動石”的起動に成功したのだつた。そして……。

『ヴォオオ、オオッ』

起動によつて具現した魔法陣から出現した異形の魔物、言わば守護神と絶賛戦闘中と言つワケだ。

異形の魔物が肉迫する白髪の少女に向かつて騎乗突撃槍から連續突きを繰り出す。

「……」

ヒュンヒュンと鋭い風切り音と共に標的を貫かんとする刺突の連打を、ウェンは赤い双眸を微かに揺らしながら、身体の重心を左右にずりすだけの最小限な動きで躊躇してゆく。

その異形 赤紫色の目出し帽の様なマスクから碧一色の单眼を爛々と輝かせ、威圧的な眼光を放つ。尖つた三角耳は真上にピンと

突き出し、リング状の銀製ピアスがジャラジャラと揺れ動く。

首元には鉢のついた金属製の赤い首輪、上半身には鉢を幾重にも縫い付けた禍々しい赤紫の鎧。右手に巨大な漆黒の突撃騎乗槍、左手には鋭い刺のついた丸盾。

鋭利な爪で大地を踏み締める四本の脚……そして、人間の様な一本腕を持つ“黒き獣”『オニキス・ベルラール』。前方に大きく伸びた口元からは一本の犬歯を覗かせ、シャープで洗練された顔付きはドーベルマンを彷彿とさせた。

その風貌は、ケンタウロスの上半身が人では無く、犬バージョンと言った所か。

ありていに言つなれば、ワントウロス？ イヌタウロス？ ……なんか違うな。 よし、ワンタンで行こう。

「……」

ウェンがワンタンの突き刺し潜り、鎧を纏わぬ下半身をバツ印に切り裂く。

『ゼイイイ……ツ！』

その小さな身体に命中さえすれば、容易に風穴を穿てる必殺の攻撃を紙一重で躰す眠たげな少女 苛立ちで歯茎を剥き出しにしたワンタンは、突きの点攻撃から側面からの面攻撃に切り替えた。そして、「これでどうだ」と嘲笑うかの如く、目尻と口角をグニヤリと歪ませて渾身の力を込めた薙ぎ払いを繰り出す。

「ウーンちゃん！」

ランス君の警告で横払いに素早く反応したウェンは身体を左半身に翻し、双剣を交差させて突撃騎乗槍をギリギリと耳障りな金属の摩擦音と火花を散らし、後方へと受け流す。

ゲーム中では巨大な大剣をブンブン振り回す怪力幼女なんてを沢山見掛けたが、小柄な彼女が倍以上の体格差のある魔物の攻撃を受け流すのを見ているのは、少々心臓に悪いものがあるなあ。

取り合えず俺は、自信満々で放った横薙ぎを軽々と凌いだウェンに憤慨し、蹴りを放とうとするワンタンの右前肢の前に土柱を出現させてそれをブロック。そして、効果対象の次回の被ダメージ威力を倍増させるスキル『ヴォーパル・ペイン』をワンタンに発動した。

「…………トリス、やっちゃんえ！」

「…………言われなくとも 『雷轟』！」

矢を番えてワンタンの隙を窺っていたトリス嬢が引き絞った矢に魔力を込めると、ミスリル製の鎌^{やじり}がついた矢が青白く発光して帶電。渦巻く魔力が限界まで圧縮され、“鉤”の様に変化した矢をワンタンの頭部目掛けて射出する。

「防げるものなら防いでみなさい！」

幾重にも展開した幾何学模様の描かれた魔法陣を貫く度に雷光と火花を散らして速度を増す様は、さながら劣化電磁砲と言った所か。

『ギャアア、アアア……ツ！…』

咄嗟にワンタンは左手の刺付き盾で防ぐが、スキル効果で威力の倍化したトリスの放った矢は圧倒的な熱量で盾を融解、貫通して腕と片耳を吹き飛ばす。

「今です、お一方つ。行きますぞ！」

「ああ あの槍はボクが抑える」

「はいっ！」

激痛に口から白濁した泡を吹き出すワンタンが、消失した左肘の付け根を押さえ怯んだその隙に、ペルポイさんの合図で連携攻撃に入ったランス君とアグの前衛三人 そして、途中からウェンも加わり、流れる様な動作で次々と致命傷を与えて行く。

「んー。見事な連携だな」

「まあね。それなりに長い時間を一緒に旅してるもの。……裏切られるなんて思つてもみなかつたけれど」

揉み上げを一房摘んで毛先を弄ぶトリスが、ポニー・テールを揺らして得意げに話す。しかし、小さくなる語尾と共に普段の勝ち気な表情も陰りを見せ、後半はほとんど咳きに近かつた。

この様子だと暗殺者と繋がつて居た元・仲間も、そう短くない付き合いで信頼もしていたのだろう。

「ま、ランス君争奪戦のライバルが減つたと思つて気楽にしてればいいんじゃないかな？ ケイトだつけ？ 納得行かなきや取つ捕まえて殴つても問い合わせるんだな」

「な……ッ？！　べ、別に私はランスの事なんかつ。……でも、でも普段は頼りないけど、いざという時頼もしいと言つか。危なつかしくて放つて置けないって言つか、そもそも私は」

一人で頬を染めてあたふたと自己問答し、乙女モード全開なトリス嬢。なんだ、取つきにくいと思ったが、意外と面白い娘だつたな。はいはい、ゴチソウサマー。

先程までの深刻な表情は何処へやら、このまま眺めて観察しようと面白いかも知れないが、どうやら彼方さんの決着がついたようだ。

『オオ、オオオオオッ……』

最後にランス君が繰り出した三段突き（ピアッシング・スピアー）が見事に決まり、苦悶の表情で宙を掻いたワンタンは胸を押さえて地面に倒れ伏した。

「お疲れ様、怪我人は居ないよなー？」

「ええ。ウーンさんが魔物の注意を引き付けてくれるので、安心して攻撃に専念出来ますよ」

自己回復促進を掛けながら彼等の元に歩み寄る俺に、額を汗を拭うペルポイさんが破顔して答える。

『……』

「……おや？」

そして、「クククと顎を引きながら彼の腹を興味深げに叩くウーン つて何やってるの?」の娘つ? ! 確かにペルポイさんの腹の揺れつぶりは癖になるが……彼女はボタンを見ると、取り合えず押すタイプだな。

「うん、ボクらも概ね万全だよ。…………」うん、ウーン止めなさい」

「わわつ、ペルトイセヒメんなセーー」

「あはは、いいんですよ。私のお腹で宜しければ、いくつりでも」

苦笑するペルトイさんから、アグとランス君が慌ててウーンを引き剥がす。アグに襟首を掴まれて耳を垂らすウーンは猫のよつだ。

「あ、れ? ハーキセん、トリスちゃんは…………?」

「ん? ああ、あそ!」

きょとんと首を傾げるランス君に、俺は親指を立てて後方で未だに一人問答中のトリス嬢を指す。

「あは、は……」

「やれやれ、またか……」

「おや、トリスさんは何かの精神汚染攻撃を?」

顔を引き攣らせてにへらと笑うランス君に、眉間に抑えて嘆息するアグ。心なしか頭頂部のアホ毛が垂れ下がっている気がする。

そして、彼女に襟首を掴まれたまま、そーっとペルポイさんの腹に手を伸ばすウェンと、トリス嬢を本気で心配する様子のペルポイさん。

……ダンジョン攻略が楽しくなりそうなパーティーでよかつたよ。
今頃ネルは良い感じにやって行けるのだろうか。

「……不安だ」

自ら別行動を提案してみたものの、俺は脳裏に浮かぶガキンチョの顔を思い心底不安になつたのだった。

そんなこんなで、ペルポイさん達が『後悔、懺悔、贖罪』三種類の苦悩する賢者をモチーフに作られた石像を奉つた祠を捜索してくれたお陰で、日々の祠にワントンのドロップアイテム『黒曜鎧装犬の胆』を供え、『贖罪』の祠の松明に火を点した俺達のクエスト進行はあつといつ間に進んだ。

時刻は夕方、既に日はとつぶりと暮れ、残るは“聖木に命を捧げる”を達成するのみとなる。

今のところ、無粋な監視者達は俺達から付かず離れずピッタリと一定の距離を保ち、仕掛けて来る様子も人員が交替する様子もないようだ。

……まあ、仕掛けとするとするなら、ダンジョンの出現後が、戦利品を持つた俺達が出て来た直後が妥当だろうけど。

特に何かされる訳でもないが、コソコソと尾行けられ続けるってのは歯痒いものがあるな。

これがゲームならば、PK狙いの相手を遠慮無く森^{フレイヤーキラー}と焼き払う所だけど、他に仲間も居るだろうし、彼方さんがまだ盗賊と決まり訳でもないし……ままならんね。

「なあ、ランス君。一つ確認したいんだが、こいつ^{ミラ}依頼の時に盗賊紛いの連中に襲われた場合、君ならどう対処する?」

隣を歩くランス君に、この世界のルール確認を兼ねて遠回しに訊ねる。

「え? あ……、そうですね……。出来るだけ戦いたくはないですけど、殺らなきゃ殺られるだけですからね」

彼は一瞬面食らった表情を見せたが、刹那の逡巡後、自身に言い聞かせるかの様にボツリと漏らす。この答えから、正当防衛で相手を殺めてしまつても何ら問題無いらしい。

「相手を傷付けずに無効化出来るのが一番なんだろうけどね。……まったく、魔物だけでも手一杯だって言つのに、人同士で争うなんて不毛だよ」

前方を歩くアグが、二の腕まである、丈夫い手甲を嵌めた両手を挙げて、やれやれと肩をすくめる。

「その通りですな。北と東のこやじれには早く決着がつこて欲しいものですよ。

私の同業者の中には、戦争になれば稼げると言ひ輩も居ますが、不謹慎極まりないですぞ」

同じく前方を歩くペルポイさんが拳を堅く握り締めて憤る。

「確かに殺さずに済むのが一番だけれど、ランスはいつも甘いのよ。いちいち敵の事を考えてたら命がいくつあっても足らないわ」

背後を歩くトリス嬢が膨れつ面で俺とランス君の間に割つて入る。

「ほお。でも、お前さんはランス君のそんな所が好きなんだろ?」

「ロ、ローキさんつ」

「な……ッ! なんで私がランスなんかを! いや、でも……」

「ニヤニヤと俺が茶化すと、ランス君はあわあわと忙しなく両手を振つて大慌て、トリス嬢は再びアッチの世界へと旅立つて行つてしまつた。どうか良い旅路を!」

「…………」、「ローキ。トリスで遊んで要らぬ仕事を増やさないでくれないか?」

すつかり自分の世界にトリップ中のトリス嬢を、ウエンと一緒に引きずるアグが嘆息してぼやぐ。

「ああ。ごめん、悪かった。後で肩揉みでもして労うよ なんなら他の所でもいいが」

「ほう。例えば何処を揉むと言つんかい？」

アグが笑顔で首を傾げ、同時に肩口に纏めた桃色の髪が揺れる。ぬう、年下とは思えん切り替えしだな。

「そうだな……ランス君、キニなら何処が良い？ ちなみに俺は足フェチだ」

「ほ、僕に振らないで下さいっ！ そして、なんですかその唐突な暴露はっ？！」

おお、ランス君に突っ込まれるとはな……。やれば出来る子じやないか。嗜好を晒した甲斐があると言つものだ。

「ヨーキさん、……貴方とはこの依頼が終わつたら一杯やりたいですな」

ニヤリと口角を持ち上げてサムズアップするペルトイさんに、俺も親指を立てて返す。なるほど、貴殿もかつ！

呆れるアグを尻目に、もはや同好の士として野暮な言葉など必要としない俺とペルトイさんは、無言でガツチリと腕を組み合わせたのだった。

いやー、それにしてもこの世界の人でも人を斬る事に関しては抵抗があるみたいで、ホツとした。主に俺の精神的に。

しかし、この辺の常識を今更知るつてのも、あれだよなあ。一般常識を素直に訊ねるのも不審に思われるだけだろうし、ネルに聞くにしてもアイツは何処で口を滑らすかわからねーし……。

それはともかく
閑話休題、今はそんな事よりも田先の問題か。

俺は一いち方に飛び掛かる小鬼コモシガツシを程よい位置に誘導しつつ、小陰に潜む尾行者スレスレにアースニードルを発射した。
意外と根性のある尾行者だ！」。簡単に尻尾を掴ましちゃくれない、か。

「「一キさん、どうかしましたか？ 向こうの林に何か ふあ？」

怪訝な表情を浮かべ、上目遣いで俺を覗き込むランス君の顔を、手の平で押し返して鼻を摘む。

「ああ、なんでもないよ。悪戯が上手い具合に成功しなくてなー」

「……悪戯、ですか？」

「そそ。 お、聖木のお出ましだ。隠された秘境……燃えるねえ！ ランス君もそう思つだら？」

俺が視線を向けていた先を見るランス君の肩を掴んで、回れ右と方向転換させた。

「 うわあ……キレイですね」

茜色の夕日を浴びる黒紫の朽木は、結晶化した樹皮に反射する陽光を蠟燭の炎の様に揺らめかせて幻想的に輝き、その佇まいは枯れてもなお莊厳な雰囲気を醸し出している。

その儂げな美しさに、俺を含めたパーティーの一団それぞれが感

嘆の声を漏り出す。 キャプチャー（画像保存）機能が使えりゃいいのになー。

ギルドにて報酬を貰う時は、この辺を綺麗に整備してベンチでも置けば、それなりの「ホールスポット」になつて集客率アップも狙えるんじやなからうか。…………街から遠いのが難点だが。

等と無粋な思案に耽つつつも、世界を「ブラブラ」と歩いて、
アスガルズ異世界絶景百選を作るのも悪くなにな、と思える風景を暫くの間堪能したのだつた。

18・俺達フェティシスト（後書き）

色々書き方を試行錯誤中です。誤字、脱字等があれば、報告頂ける
と幸いです m(—)m

僕たちの受注した依頼もいよいよ大詰めに差し掛かり、秘境を出現させる仕掛けも残すは後一つだけとなつた。

まさか最初の仕掛け（雷動石）が埋まつてゐるなんて思いもよらなかつたけど、コーリさんはそれを何処で調べたんだろう？

会話しても、僕の知らない様な事を知つてゐるのに変な所で感心したり、地理に詳しいのに情勢には疎かつたり　　変わつた人だなあと思つ。

そのコーリさんは今、皆から離れた所にあぐらを搔いて座り込み、原っぱに転がる岩に背中を預けて瞑目してゐた。また何か考え方でもしてゐるのかな？

僕の横では両膝を抱えて座るウエンちゃんがボンヤリと林の方を眺め、鍛冶の心得のあるアグちゃんが皆の武器の手入れを行つている。

「……で、これからどうするの？」

僕が毎に集めた新の枝打ちをしていると、トリスちゃんが口伝のメモ書き片手に眉根を寄せて両手を挙げた。所謂降参のポーズだ。

「命……、命を捧げる。」つむ

難しい顔付きで顎に手を当てて、聖木の周りを右往左往するペルトイさん。う、僕も何か力になればいいんだけど……ごめんなさい。

“命を捧げる”、か。漠然として今ひとつピンと来ないや。もしかして生贊が必要とかない……よね？

「……そう、そうよ！ 何か供物を捧げるんだわ。ランスもそう思うでしょ？」

腰に手を当てたトリスちゃんが僕を指差し、薔薇色の双眸を輝かせて声を張り上げる。

「ううむ。供物、生贊……ですか。
しかし、どうもこの部分だけ他と比べると、情報があやふやでいまいち合点がいかないと呟うか

大きな身体を縮こませて首を傾げるペルトイさん。
そこにウーンちゃんの双剣を研ぐアグちゃんが、悪戯な笑みを浮かべて連ねる。

「そうだな。なんならランスを生贊にでも捧げてみるかい？」

「ええっ？！ 僕ですか？」

そんな僕を尻目に、それは最終手段ね。と腕を組んで思案に耽るトリスちゃん。そ、それはやだな。

「……口伝なんものは、総じていい加減なものさ。皆、小難しく考え過ぎなんだよ」

瞑目したままのコーキさんが口を開く。その自信に満ち溢れた物言いに、皆の視線が集中する。

「貴方……何か知ってるのね？」

すかさず、キッと鋭く目元に力を入れたトリスちゃんが問い掛けた。

トリスちゃんの言葉に、目を見開いたコーキさんが人差し指を上に突き出し、不敵に笑みながら続ける。

「命、そつ命だ。一概に命と言つてもあやふやで不確かなモノだ。それは、俺達生物の根源即ち生命であるかも知れないし、もしかすれば重要な言い付け命めいであるかも知れない……」

「むう、むう！ す、すると一体？！」

静かに、そしてゆづくりと言ひ聞かせる様に口ずさむコーキさんに、目を剥いたペルポイさんが両手を握り締めて続きを促す。

「コーキさんは小さく頷き、軽く咳払いをして説明を続けた。

「これは俺が独自に調べた情報だが、この近隣の村では古来より神々に豊作を願い、踊り手が自らの命を削つて三日三晩も踊り明かす

伝統の舞があるわつな その名も、ムズ・リアム

「むず・りあい、ですか？……はて、私は初耳ですね」

聞き慣れない言葉に訝しげに腕を組むペルトイさん。もちろんそんな舞の話は聞いた事がない僕達も、各自に疑問符を浮かべて首を傾げた。

でも、なんでだろ？「ヨーキさん至極真剣な面持ちを見ると、納得せざるを得ない異様な迫力があると言つか……。

「ふむ。つまり、狼王の首級を掲げたまま、その舞を踊れと？ ソれも三日三晩もの間」

「三日間も踊り続けるつて……どんな苦行よ」

お互いに顔を見合させて渋い顔をするアグちゃんとトリスちゃん。うん、僕もそれは無茶だと思つ。

「あー、その辺は大丈夫。最初の触りだけで問題ない。……いし。

あつ、なんか腰もくびれるつぽいよ。女性陣は一石二鳥だな！ 何かをボソリと呟いたヨーキさんが、思い出したかの様に付け足した。うーん……。気のせいかな？ “面倒臭い” って聞こえた様な……。

「ほう。それは興味深い……ヨーキさん、知つてるのであれば御教授願えますかな？」

その言葉に最も反応を示したペルトイさんを見てヨーキさんは一

瞬苦笑したが、すぐに表情を取り直すとパチンと指を鳴らした。

「 もういんですともつ。早速始めますか」

そして、現在。僕達はコーリーさん指導の下、薄暗い森林の真つ只中で照明魔法^{ライティング}の明かりを頼りに、ムズ・リアコを踊っている訳なのだけれど……。これ、普段使わない様な筋肉を使って結構きついかも。

「はい、ここで両手を腰に一つ。はいっ！ ツイスト、ツイスト」

両手を腰を当てて、足踏みをする様な独特のステップから腰を捻る「一キさん。その背後の聖木には、狼王の首級のカードが貼付けられている。

「こ、心なしか。腰が細くなってきた気がしますぞ……」

僕の右隣りで、息も絶え絶えな様子なペルトイさんがお尻を振りながら言つ。

「 気の毒だが、それは……」

「 気のせい、よ」

どにと無くつとぞざりした顔でコーリーさんに続くアグチちゃんとトリ

スちゃんが、重ねて言い放つ。その言葉にショックを受けたのが、ペルポイさんがお尻の速度を上げる。凄い、凄い気迫です、ペルポイさん！

「それよりも……なんなの、これ？ 本当にこんな事で秘境が出現するのかしら？」

「それにはボクも同意する。後でコーキを問い合わせる必要があるな」「二人とも、きっとこの踊りにも何かの意味があるな」「なんだつて（ですつて）？」

「ふえつ」

今ひとつ乗り気でない二人に僕がフォローを入れるも、物凄い形相で軽く一蹴されてしまった。……コーキさん、この二人を敵に回すと後が怖いですよう。

「……」

ウーンちゃんはと言つと、いち早く振り付けを覚えていつの間にかコーキさんの横に移動し、僕達の前で完璧に踊つていた。なんだらう、この敗北感。

あれ？ コーキさんの右手から仄かに白い光りが漏れ出しているのに気が付いた。あれは治癒術の光り？

「……こんなもんか。よし、ここでターンだッ！」

「一キさんの合図で半ば自棄気味のトリスちゃんとアグちゃん、清々しい笑顔を浮かべるペルポイさん。

そして僕とウェンちゃんがその場で同時に一回転をした。

その刹那、聖木から夜空に光りの柱が上り、辺り一帯が照明魔法の明かりを焼き消す程のまばゆい光りに包まる。

「おおっ、なんと美しい……」

「うわ……。まさか本当にあの、ヘンテコな踊りが?」

田を細めて呆然と空を眺めるペルポイさんとトリスちゃん。手の平を傘にして首を毎一杯動かし、天を仰ぐウェンちゃん。

僕自身もこの光景に言葉を失い、光りの柱を静かに眺めた。

「……ラヌス、見たかい?

まさか“ヒーリング”とは。確かに口伝なんてものは大仰でいい加減だな」

僕と同じく治癒術の光りに気付いたアグちゃんが、聖木に肘を突いてもたれ掛かる「一キさんに視線を送りながら、声を潜めてそう言つた。

うん。あの瞬間に「一キさんは聖木に手を当てる、木に治癒術で生命力を注ぎ込んだのだと思つ。

「あっ、うん……。でも、なんでだろ?」

僕たち二人の視線に気付いた「一キさんは、苦笑しながら後頭部を搔く。

そして、立てた人差し指を口元に移動させて“黙つてろ”と、こちらに伝えてきた。

「……確かにトリスには黙つて居た方が良さそうだ。ま、彼の理由次第では、ボクからもお仕置きが必要になるかも知れないけどね」

そう言つてウインクするアグちゃんと僕は小さく笑い合つ。この依頼が終わつても、コーリーさんが居てくれれば楽しそうなにな。

天高く伸びる光りの柱は次第に細く集束し、程なくすると空に粒子の残滓を残して焼き消えた。

やはり明るい真つ昼間ならともかく、この暗い中で魔法の光りは目立つみたいだ。俺の口止めに応じてくれたランス君とアグを見て、ホッと胸を撫で下ろす。

取り合えずはトリス嬢に気付かれなかつたから良しとしよう。あの娘、絶対騒ぎそなんだもの。

光りが消えて間もなくすれば、地響きにも似た低音が辺りに鳴り響き、木々で羽を休めていた鳥系の魔物が驚いて一斉に飛び立つ。

次いで鈍い破碎音と共に、十字の袂^{たもと}つまり、俺達の前方の崖に亀裂が走る。

赤茶けた崖の裾から凡そ三メートル程上まで亀裂が入ると、ひび割れた壁面が砂山の様に崩れ去り、その奥からポツカリと口を開けた空洞が現れた。

何処かに空氣の抜ける穴が空いているのだろう。空洞からは、生き物の低い呼吸音の様な不気味な風音が反響して漏れ出している。

「この氣味の悪い音が、竜の咆哮に聞こえなくもない。これが、『黒盲田竜の顎門^{あきと}』って言われる所以か。

「……なんと言へ……。本当に存在したんだ……」

長年の夢だった秘境の出現に、むせび泣いて涙を拭うペル。ポイさん。「、こんなに喜んでくれるなんて……俺も胸が熱くなるつてもんですよ。

彼には暫く余韻に浸つて貰うとして、……ランス君達もそれぞれ話しあつてゐみたいだな。

さて、今回はクエストダンジョンの中でも低位に属する場所つて事と、ゲームとの差違を確認つて事で解放した訳だけれど、今後は無闇に隠された上級ダンジョンは解放しない方が良さそうだな。

なにせ、MMOゲーム基準な上級者向けのダンジョンを解放した所で、それは自殺者を量産する様なもんだ。

この世界で所謂“英雄”と呼ばれる人物の中には、プレイヤー級の実力者も居るかも知れない。

だが、高レベルプレイヤーが死亡状態からの復活を前提にして、束になつてやつと倒せる魔物が出る。……なんて場所がご近所に出現するとなると、無駄な混乱を招くだけだろう。俺なら引っ越しを考える。

俺自身もそういう化け物が徘徊する場所には、なるたけ近付かない様にしないとな。基本的に俺の能力だと有利な相手には強いが、苦手な相手にはとことん弱いのだ。

むやむや殺されに行くような真似はしないと思うが、この森の狼王よろしく、ダンジョン外のフィールドをうろつくタイプの中にも危険なのが。

いや、まてよ。ここでは各街への“魔物の襲撃イベント”つてどうなつてるんだ？

そもそも、この世界の住人がプレイヤーよりも弱いと判断するのは尚早ではないか？ 等と、俺がしなくても良い不吉な推論をあーでもない、こーでもないと考えていると、ランス君がこちらに近付いて来た。

……頭の出来が悪い俺が、無い頭を捻つても仕方ない、か。まずは先に目先の問題を片付けてからだ。

俺はランス君を手招きして頭上を仰ぎ、先刻のヒーリングで聖木の枝に実った橢円形の赤い果実を指差す。

「丁度いいや、ランス君。この実を回収するのを手伝ってくれないか？」

「やつぱつこの実も秘境に関わるんですか？」

キヨトンと首を傾げるランス君に、多少気圧されつつも頷く。暗がりで見るからか、ぱつと見は美少女なんだが……嗚呼、遺る瀬無い。

「この実は言わば“鍵”なんだ。全部で六つ生つてるだろ？俺達が六人で果実も六つ。何にせよ、いかにも曰くあり気だろ？？」

「……他の事もやつですけど、ローキさんは物知りですね」

感心した風にランス君が言つ。

「実際はわからない事ばかりだよ。女心がわかれば最高なんだけどな」

「あは、それは難しいですね」

どうやら天然ハーレム少年にも、わからないみたいだ。彼がコツを知っていたのなら、恥を忍んでも聞き出そうと思つたのだが。

ぐすくすと笑うランス君と一緒に、杖を使って六つの果実を回収した俺は、絶対にウホンに食べさせるな とだけ念を押し、五つの果実を皆に配つて貰う事にしたのだった。

そんなこんなで、落ち着きを取り戻したペルポイさん達と俺達は空洞に移動し、その中で一夜を明かす事にした。

一口に空洞と言つてもここ自体がダンジョンになつてゐる訳ではなく、実体はあくまでも“入口”。

つるりとした青い岩で出来たこの空洞は、全長が凡そ五十メートル程で、横幅は四メートル程と言つた所か。

最奥の広まつた袋小路には、幾何学模様の描かれた魔法陣が敷かれている。その中央には祭壇が置かれ、その上に聖木の果実を供える事でダンジョンへの扉が開かれると言つ才法だ。

中は薄暗く、春先くらいの温暖な気候の外よりも少々冷えるが、魔物が出現しない事もあって比較的に安全と言える。唯一の問題点は、入口を塞がれてしまえば逃げ道がない事か……。

そんな訳で必然的に女性陣が空洞の奥側、俺とペルポイさんとラソス君が入口から一十メートル程の場所で寝床を作る事と相成った。

何はともあれ、これで一応は依頼内容である『秘境の発見』を達成した事になるので、ペルポイさんから、最低報酬の5,000ルーク以上の稼ぎは見込めるだらう。

秘境を発見した事をネルが知つたらどんな反応をするか楽しみだなー。

その為にも、まずはハイエナさん達と夜中のダンスレッスンと洒落込もうじゃないか。

俺が高レベル潜伏効果のついた外套『インヴィジブル・クロース』を羽織り立ち上ると、ランス君が眉をふにゃりと垂れ下げて訊ねてくる。

「あの、……コーキさん何処へ？」

「ん、ちょっと外で腰を振つて来る」

そのまま俺はアグに研いで貰つたオクスタンロッドを軽く振るつて肩へ担ぎ、入口へと歩を進めたのだった。

ようやく次回で大激突？！

20・翡翠な彼女は強い男がお好き（前書き）

お待たせしました。

どうしても一話にまとめたかったので文量がおかしげな事になつて
ますが、『容赦下さい』（――）

『インヴィジブル・クロース』で姿を隠して森を散策する事、幾数分。

付近で不自然に人の集まる場所を見付けた俺は、慎重に接近を試みた。こう言う時に、フォーカス機能は便利だなーと思う。格下相手ならレベルも表示される事だしなつと。

しつかし、自分で扇動しといてなんだが……。

「いいか、てめえら！ 眼ン玉ひん剥いて、よオく見てるよ？ この舞をしつかりと頭に叩き込むんだ。 ツイスト、ツイスト！」

『あいさーつー！ ツイスト、ツイスト！』

燃えたぎる情熱つ！ ほとばしる汗つ。唸る肉体美？ 艶めかしく揺れる腰……。

なんだこれは。

上半身裸で獸耳の生えた男が先頭で叱咤激励を飛ばし、ずらりと等間隔に並んだ男達が掛け声を上げながら一糸乱れぬ動きを魅せる。

それはまるで、何処かのダンスパフォーマンス集団と呼んでも過言ではなかつた。

しかし、十数人のむさ苦しい一団が、一様に腰を振る姿は……なんと言つうか、こう……筆舌に尽くし難いモノがある。

あわよくば、こんな光景が見れればいいな。くらいの軽い気持ちであんな事をしたのを、思わず反省してしまつ程の戦慄を覚えた。

今から“これ”と戦うのか……。

ひい、ふう、みい、ざつと二十人位か。今、空洞を見張つてゐ二人を入れても、二十人弱……。

拘束術の効果は単体限定、触手で縛ろうにも、まだ未完成で同時に操れる本数が限られて来るから確実性は無し、と。

勝つだけなら、わざわざ近寄らなくても魔法の射程範囲、ギリギリから撃ちまくるだけで事足りる。

だが、彼等がただ森林で踊る事を眞とする、健康志向の高いオッサン集団……と言つ可能性も捨て切れない……。いや、ないか。

取り合えず、彼等の見た目の印象から善人とは言い難いな。種族もバラバラで装備も特にこれと言つて統一性はなく、布製の身軽な軽装で、武器も小回りの効く短剣や長剣がメイン。見たまんま盗賊つて判断でいいのかねー？

弓等の飛び道具持ちは少なそうだけど、投擲武器や魔法を使える人間が居る事も念頭に入れて置かなきやな。

先頭で踊つてゐる眉毛ぼさぼさで髭もじゅの毛玉の様な“ライカン（人狼族）”が頭目だらうか。

見た所、レベルも218とこの中ではダントツだ。他の連中は150以下が大半で、100以下の者が多く見て取れた。

……手強そうなのがこの場に居ないのは少々面倒だが、あまり悠長に考へてる時間はない。当初の手筈通り行くとしますか。

しかし、意氣勇んで一步踏み出そうとした俺は自分の足が微かに震えている事に気が付いた。

対人戦なんてのは慣れたもんだけど、やっぱ命のやり取りとなると別だよなあ。

……あんて思つてみたのは良いものの、実際戦闘に入つたら相手が殺す氣で来るかも知れないのに、そんな事考へてる暇なんてないわな。変に意識して失敗するのも馬鹿らしいや。

どんな結果になるにせよ、“郷に入つては郷に従え”俺なりに出来るだけ頑張つてみますかねー。

武者震いする身体を落ち着かせるべく、俺は大きく深呼吸し……覚悟を決めた。

かさり。

俺が腰に挿した投擲様の短剣に手を伸ばしたその刹那、不意に頭上の梢が乾いた音を立てて揺れ動いた事に気が付いた。

パッシュ・シ・ヴ・ス・キル（常時展開型技能）、『戦人の慧眼（攻撃軌道予測）』の効果で首筋にチリチリと熱を感じた俺は、咄嗟に前方に飛び込んで回避行動を取る。

「うへ、バレバレかよっ！」

そのまま麻痺毒を塗布した短剣一本を振り向き様に背後の襲撃者に投擲するが、投擲スキルの拙い俺のそれは相手の丸盾に容易に弾かれてしまった。

“茶色”の塗料で紋様が刻まれた丸盾 きつちり士対策してやがんなあ。

「隠れる、無駄。姿隠しても、ジ・ジル達亞人、鼻強い」

俺の上から木の葉と共に降ってきたそいつの姿で、まず目に付くのは全身を覆う翡翠色の鱗だ。

ギヨロリとした橢円形の黄色い瞳は、爬虫類特有の縦瞳孔。前には大きく突き出した口元からは二股になった細い舌がチロチロと揺れている。

茶皮のベルトを腕や腰に巻き付けた上半身には、胸の上部だけを覆う胸鎧を纏い、手には小振りな……いや、人間が扱うには少々大きな手斧。それは見紛う事なく、洞穴を見張つて居た一人の片割れのレピタリア（有鱗族）の姿だった。

「はは……忠告どーも。ついでに見逃しては……くれねーよなあ」

トカゲ人間から距離を取り、中腰で杖を後ろに回して構えた俺の背後から豪快な笑い声が上がる。

「ダハハハハツ。よオ、英雄志望!」

俺が首だけを動かして後ろを一瞥すると、頭目らしきライカンのオッサンがあぐらを搔いて地面にどっしりと座り込み、獰猛な笑みを浮かべていた。

その周りでは、各自に獲物を抜いてこじらに野次を飛ばす取り巻き達がたむろしている。

やはり、ただの踊り好きのひょきんなオッサン達ではなかつたみたいだ。

踊りを見られた事に対する照れ隠しにしては、些か対応が過剰過ぎじやないかと思つ。

「まさか自分から飛び込んで来るたア。蛮勇の戦士か、はたまた命知らずの大うつけか……アンタはどうだろ?」

「さあ? して言つなら、通りすがりの舞の伝道師だ。見たところアンタは筋が良い、俺の弟子にならないか?」

俺が肩をすくめて答えると、頭田は片眉を持ち上げて口角を歪める。

「そりやいいや。ジ・ジル、伝道師殿にじご教授願おづぜ。

遠慮はいらねえ、ガツンとやつちまえ!」

頭田が自らの掌に拳を叩き付けて指示すると、トカゲ人間は小さく頷いて武器を構え、尻尾を揺らして「ひらひら」歩み寄つてくれる。

前門のトカゲ。後門の毛玉……さあて、どうしますかねー。取り合えず。

下弦の月を覆い隠した雲が流れ、柔らかな月明かりが下界を照らす。

微かな風が木々の枝と草の葉をざわめかせる中、数十人の盜賊に囲まれながらも斜に構えた雰囲気を崩さぬままおどける一人の青年コーキ。

ふう、と静かに息を整えた彼は、肩に担いだ槍杖をゆつたりと構えて身構え 左手を前方に突き出した。

「まずはお手並み拝見……いきなりアースードル！」

「コーキの周囲に魔法の発動までの“溜め”を感じさせぬ程瞬時に形成された滑らかな土の矢、その本数は凡そ十本。

それらは術者の意思に添つてゆらりと宙で旋回すると、対峙する

レピタリアに次々と射出された。

「……無駄、対策済み。森の中、雷も効果薄い」

「一キが小手調べで放った土の矢は、姿勢を低くして疾駆するレピタリアが持つ“土属性無効”の細工が施された丸盾でなんなく打ち消される。

「へつ、そんなに甘くないってか」

丸盾を前方に構えながら速度を増して迫つてくるレピタリアに彼は《ウエアリイ・スワンプ（泥濘）》を設置するが、それにも即座に反応する敵にはなんの効果も成さなかつた。

「無駄無駄あ！　お前の手の内は全部お見通しなんだよ」

見ているこちらが暑苦しくなつてくる様な顎鬚を撫でて破顔する頭目らしき男。

そんな頭目の男を、レピタリアの盾による殴打の嵐を躲しながら一警した一キが一言。

「……だよなー。俺が何度も薦を操つて足引っ掛けても、アンタ踏ん張つて耐えてたもんな。

頭目自らが敵前觀察なんて、よっぽど人手不足なんだがつ」

「そ、そ、う、口惜しいがその通り……つて、コラアッ！　あれは全部でめえの仕業だったのか！！」

おつと。と口元を抑える一キに、怒りを顕わにした頭目が目を

剥いて立ち上がる。

「ジ・ジル！ いつまで遊んでんだッ。早くガツンと 」

「違う！ ジ・ジルずっと本気。……」 いつ、ただの術士違う

自慢の手斧の連撃を涼しい顔であしらひ「一キに、勢い良く攻めていたレピタリアが距離を取ってたじろぐ。

「なんだ、もう終わりかー？」

攻めあぐねるレピタリアに「一キは軽く上下に飛び跳ねながら脇を絞め、宙に拳打を空撃ちする。

明らかに体格差のあるレピタリアの戦士と杖一本で互角に渡り合う人間に、周囲で野次を飛ばして観戦を決め込んでいた盗賊達も次第に押し黙り始めた。

「か、頭ア。俺、なんか嫌な予感がするつす。

ジ・ジルと格闘するなんぞ、並の術士じやありませんぜ？」 のヤマ諦めませんか……？」

「馬鹿野郎つ。何言つてやがんだ！ たかが一人に逃げたとなつちや良い笑いモンだろうがつ」

頭目が近くに控えていた頬に傷のある男の提案を怒鳴りつけて一蹴する。

頭を小突かれた頬に傷のある男は、涙目で殴られた箇所を摩りながら黙った。

「へ、へい。すいやせん」

「……だが、それも一理ある。俺ア、やっぱそつな相手とは戦わねえ主義だ。 逃げちゃおつか」

『へ?』

舌を出してテヘッと首を傾げる頭田に盜賊達の視線が集中する。頬に傷のある男は信じられないと言つた表情で小突かれた頭を指差し、同僚に慰められていた。

レピタリアと戦つていた「一キも、口をへの時に開いたまま呆気に取られていよいよ」だ。

「え、逃げちやうの？ もつといふ……、一斉に掛けられ。とかないの？」

未だに呆れ顔の表情のままの「一キ」が頬を搔きながら頭目に訊ねる。

その質問に頭目は腕を組み、眉を顰めて答えた。

「馬鹿野郎。相手の力量も測れずに盜賊なんて陰気な商売やつてられつかよ。『樂に勝てる相手から確実に奪う』 命あつての物種だらうが！」

「は、はあ。そりや、『もつともで……』

胸を張つて堂々と答える頭田に、後頭部を押されて申し訳なさそうに田線を落とす「一キ」。

盜賊に正論言われちやつたよ。と、漏らしながら爪先で土を弄り随分と落ち込んでいるよ」だ。

心なしか氣勢を削がれた様子の「一キが、周りを警戒しつづけしたものかと頭を搔いて思案に耽つていると、脇の藪から思わぬ闖入者が現れた。

「モップ。お客人をお連れしましたよ。……おや？ お取り込み中でしたか」

「おまつ、ウルパソ！ いつも頭領つて呼べつてガツンと言つてゐだらうがつ」

どうやら頭目の一ライカンの名はモップと言つらしい。藪を搔き分けて現れたのは丸い色付きグラスを鼻に掛け、若草色の大きめなローブの裾を引きずつて歩く子供の姿だった。

「……見張りの片割れか。こんなちつこい盗賊も居るのかよ」

年の頃が一桁にも満たないであろう闖入者の愛らしい風貌に「一キが肩をすくめる。

「おや……氣付いていましたか、さすがですね。しかし、ちつこいとは」挨拶ですね。こう見ても四十が近いんですよ。

まったく損な種族ですね、我々ニール（小人族）と言つ種族は

一見すると小さな子供の様な姿だが、くすんだ銀髪を後ろでまとめたその男はニールと呼ばれる種族の成人らしい。

二口一口と胡散臭い笑みを浮かべたウルパソと言つ男は、落ち着いた物腰で油断ならない雰囲気を纏っていた。

「んな事はどうでもいい！ ウルパソ、退くぞ。こいつは思つてた

以上の格上だ。勝てねえ喧嘩すんのは俺様の主義じゃねえ

かぶりを振つて部下に撤退の指示を下すモップを、ウルパソが色付きグラスの縁を持ち上げながら制止させる。

「ええ、私もそう思つて心強い協力者を連れてきました さ、出て来て下さい」

ウルパソが左手に握つた紐を引くと、彼が出て来た數が揺れて暗がりから、また一つの“影”が現れる。

その“影”の登場にコーキは左手で顔を覆つて大きく嘆息を吐き出す。

「…………おこおい、マジかよ…………」

そこには、たどたどしい口調でがつくりと頃垂れる金髪の美少年の姿があった。

「（汗）ごめんなさい。その、コーキさんが心配で……出て来た所を捕まつちゃいました……」

両手を縛られ、盗賊から首筋に短剣を当て行われた仲間の姿を見てコーキは、舌を鳴らして歯噛みする。

「ダハハツ！ でかした、ウルパソ！ …… 形勢逆転だな。どうするよ、命乞いでもしてみるか英雄さんよオ？！」

ウルパソの連れてきた“協力者”とコーキとを何度も見比べたモップは、笑いを堪え切れずに吹き出し、腹を抱えて面白おかしく破

顔する。

「……はーはー。降参ですよ、ジーさん」

人質を見るや否や、解りやすく強気になるモップをじろりと一瞥した「ーキは、杖槍を対面するレピタリアに投げ渡して両手を挙げた。

「 で、俺うなづくなるのよ。頭領？」

呪印の施された手枷をブラブラと揺らして「ーキが樹木にもたれ掛かる。

“魔力封じ”の呪いが掛けられた手枷が珍しいのか、隣でペコペコと頭を下げるラヌスの類を時偶引つ張りつつも、彼は手首を捻つて興味深げに観察していた。

「ああ？ 手下共が残りの女とテブオヤジを捕まえてくるまでじつとしてな。

ま、大人しくしてりや別に命まではとりやしねえよ。売れるとこりに売つた方が金になるからな」

一行の内で一番警戒していた術士を捕らえた事で良い気になった頭目はレピタリアのジ・ジルと祝杯をあげていた。

今この場には頭目であるモップと側近のジ・ジルとウルパソだけを残し、他の部下達は総勢で洞穴の四人を捕らえに赴いているのだ。

「だそうだ。ランス君、君はきっと高く売れるぞお」

それを聞いたコークは振り返り、再びランスの両頬を掴んで引つ張り回し始める。

「ふおふえんひやひやい。……つう、頬が伸び切っちゃいますよ」

仲違ひする一人の姿に呆れた様子のウルパソが頬杖をついて首を捻つた。

「それにしても……その手枷を付けられていると云つのに、貴方随分と元気ですね？」

盗賊団の虎の子である、『バイローブ真紅』級の冒険者にも通用すると云つ拘束手枷。

装備対象者の魔力を封じ、虚脱状態にする効果のあるそれをつけられても平然としているコークを、ウルパソは目を細めて訝しげに見遣る。

「ああ、急いと云つたらこれの効果か。初めて見る道具に興味津々でさ。

ウルパソさんだっけ？ アンタみたいな“子供親父”な種族を見るのも初めてで、そっちのが重要って云つか

「

「」、子供親父……。それは私の事ですか？」

悪気なくサラリとしたコークの発言にモップとジ・ジルは酒を吹

き出して爆笑し、肩を落としたウルパソはロープをずるつと擦り下
げた。

「ダハハツ、面白え奴だ。どうだい英雄、うちに入らねえか？ 優
遇してやるぜ？」

頭目の思わぬ提案に「一キはきょとん目を見開いたが、すぐに俯
き、肩を震わせて笑いを零し始める。

「あはは、それも面白そつだ……でも、今日で終わる盗賊団に興味
はないよ」

「あア？！ そりや 一体どういつ事だつ？」

不敵に笑う「一キに苛立つたモップが盃を投げ捨てて立ち上がり、
詰め寄るつとするが……それを抑制するかの様に彼の足元に一本の
矢が突き刺さる。

「な……ッ？！ 何者だ？ ジ・ジル何処からかわかるか？」

「無理。ジ・ジルも、解らない」

敵の攻撃に即座に反応したモップが巨大な金棒を、ジ・ジルが手
斧を、ウルパソがボウガンを手に取るが、気配の感知に長けた彼ら
が敵の接近を許した事で、その様子は日に見えて慌てふためいてい
た。

「差し詰め、盗賊に囚われた王子 + その従者を助けに来たヒロイン
つて所だろ なあ？」

「一キが虚空に問いかけると、何もなかつた空間がブレて歪み、漆黒の外套を羽織つた三人組が現れる。

「真打ち登場よつ！ 覚悟なさい悪党共！ …… それと、アンタはランスの類を引っ張りすぎ。ずっと見てたんだからね？」

茶色いポーテールを揺らして現れたトリスに鋭く睨みつけられ、堪らずサシと目を逸らす「一キ」。

「部下の皆さん方には、ギルド員の方が到着するまで洞穴の中で眠つて貢つてますよ。入口が一つしかないの、そこを塞いでしまえば分断するには持つてこいですな」

お手製の麻酔玉を片手にワインクするペルトイ氏。彼の横ではウエンがその麻酔玉をお手玉にして遊んでいる。

そんな彼女達の姿をざつと見回したランスが目を瞬かせて首を捻つた。

「あれ……、アグちゃんは？」

……おつと。すっかり忘れていたな。ボクも「一キから借りた外套のフードを脱いで姿を可視化し、ランスに手を振り答える。

しかし、よくもまあ、亜人の鼻もごまかせるなんて上等な代物を何着も持つてるもんだとつくづく思うよ。

収集が趣味だとつていていたが、本当に一体何者なんだろうか。

「やあ、ここだよ。つまり、キミ達盗賊団を確實に生け捕りにする為に戦力を分断させて貢つたと言つわけだ。

最初に「一キが見付かったのも、ランスが捕まつたのも全部手の内と言つ事だな」

突然の出来事に口をパクパクと開いて呆然としたままの盗賊三人組に、手枷を嵌めたままの「一キが一步、一步近付いて行く。

その時、硝子の碎ける様な破碎音と共に手枷に亀裂が走り……手枷は真っ一いつに弾け飛んでしまつた。

「お？　この手枷、『故障』してたみたいだな。……ラッキー」

「そ、そんな。あ、ありえません……」

手首を摩りながら接近してくる「一キにウルパソは腰を抜かして後退る。

三人組の居た所までたどり着いた「一キは、傍に立て掛けた己の槍杖を担いで頭目のモップを指差し、口角を吊り上げた。

「さてと、『形勢逆転だな。どうするよ、命乞いでもしてみるか……頭領さんよ？』」

一度やつてみたかったんだ、コレ。どう満悦な「一キの悪乗りに、ボク達も顔を見合させ一笑し、付き合つ事にした。

「男らしく、『ガツン』と頬むよ、頭領」

「やつね。『ガツン』と生きの良いのを、よ・ろ・し・く

「……」

腕を組んで流し目を送るトリスと、手の平に拳を打ち付けるウ

ン。

「ふーんだ。私はテブじやないです。ちょっと人より少しふくよかなだけですっ」

「そうです。ちょっと、ふくよかなだけですよねっ、ねっ」

鼻を鳴らしてランスの縄を解くペルポイ氏とそれを苦笑いを浮かべて宥めるランス。

三人の盗賊達はすでにコーキの拘束術によつて菱田形に縛られて身動きが取れなくなつていていたが、すつかり意氣消沈してしまつた側近を尻目に頭田のモップはプルプルと唇を震わせて雄叫びをあげた。

「ち、……チツキシヨーーツ！！」

「つるさいです、モップ。ちょっと術士殿、ついでに口も縛つてやつて下さい」

「無念。だが、ジ・ジル強い雄、好きだ。コーキ、つがいは居るのか？」

バタバタと足を揺らして涙目ながらに懇願するウルパソと、コーキに何やら熱っぽい視線を送るジ・ジル。

「えー。俺、鱗ある娘と長い事やつていける自信ないわー。……脱皮とかすんの？」

「コーキは渋い顔をして両手でバツテンを作りながらも、夜遅くまで三人組を質問攻めにしていたらしい。

斯くして、この夜。モップ率いる盗賊団は全員捕らえられ、翌朝到着したフレンチエスのギルド員に受け渡されたのだった。

20・翡翠な彼女は強い男がお好き（後書き）

The・ぬませ犬な盗賊さん達でした。今後の彼らの脱走劇にご期待下さい（？）

追記

申し訳ありませんが、読者様に混乱を招きしそうなので後半部の数年後のシーンをカットさせて頂きました。
カット部については、今後閑話として文量を追加して投稿したいと思います。

読者様に多大なご迷惑をかけてしまい、誠に申し訳ありませんでしたm(一一) m

21・気になる疑問と足りない覚悟

パチパチと音を立てて爆ぜる薪をぼんやりと眺めながら欠伸を噛み殺し、俺は次の木を焚火へと投げ入れた。

昨晩、なんとか死傷者を出す事なく盜賊団を撃退して事なきを得た訳だが、念には念を入れて男衆三人が交代で仮眠を取りつつ、ギルド員の到着まで彼らを見張る事となつたのだ。

正直面倒臭い話だけど、夜空に浮かぶ満天の星々の下、大自然の中で焚き火を囲んで……つてのは、貴、父親に連れて行つて貰つたキャンプみたいで悪くはないと思う。……たまに聞こえる狼王達の遠吠えの合唱が、ちとうるさいが。

オオオオン……ツ。

……訂正、結構つるさい。寝ろよ、犬口。

そんな見張り中の暇潰しと言えば、モップ達三人組から話を聞くことだつた。……正確には、一方的な質問攻めと言つた方が正しい

かも知れないが、まあ些細な問題と言つ事で。

今現在、その三人はグースカと寝息を立てて眠ってしまつてゐるが、魔力を封じる拘束具や、俺の知らない種族“ニール（小人族）” 想定はしていたが、やはり目新しい情報が入ると心が躍るな！。

自分のまったく知らないスキルや魔物も居そつだと言つのに、不安よりも期待のが勝つてしまつるのは、我ながら根つからのゲーマーだなあとつづく思う。

例えるなら、ネットゲームでアップデートの前情報を手に入れ、実装を今か今かと待ち侘びる心境だろ？

……だが、そんな俺に衝撃を与えたのはウルパソが漏らしたこの一言だった。

『貴方もその道具を持っているのですね』

それは俺が何気なく『デバイスライザ（携帯端末）』を開き、時刻を確認した時の事だ。

鳶色の瞳に僅かな恐怖を孕ませたウルパソが、それまで接ぐんでいた口を重く開いた。

最初は何の事かわからなかつたが、この世界で冒険者に支給されると言う『デジタライド（携帯端末）』は、言わば電話の子機の様な形で、色も白で統一されてるらしい。

そういえば、俺が最初に遭遇した現地人のジンバルトさんが持つ

ていた物も、子機の様な形をしていたと記憶している。

それに比べて、俺 『AKO』のプレイヤーが持つ物は基本色こそプレイヤー個人でカスタマイズ出来るが、折り畳み式で液晶画面側の上部に歯車の様な装飾がついてるのが特徴だ。

ちなみに俺のは黒色。ピンク色とか冒険してみた事もあったけど、結局は現実で使用している端末の色に落ち着いた。

それはさておき、『貴方も』って事は他にも所持者が居ると言う事だ。ウルパソ自身もこれが何の道具かが気になつたみたいで、俺が問い合わせると彼はつらつらと語りだした。

聞くところによれば、ここ数日フレンチエスの日陰者達の間では、『ある人物』の話題で持ち切りだと語つのだ。

曰く、異常者。曰く、快楽殺人者。曰く、魔女。

ふらりとフランチエスにやつて来て、『希少な』魔物の素材や、市場で稀に見ぬ魔道具をギルドに売り付けたその華奢な女は、ならず者達の格好の獲物だつたと言う。

偶然、売買の現場に居合わせた盗賊崩れの冒険者は仲間を集め、街を出た彼女が人気の少ない場所に行くのを見計らい襲撃を掛けた。

そして、三十人からなるそのならず者の一団はただ一人を除いて、全て例外なくその場で短刀で腹を刺し貫かれて死んだと言つのが、腹に短刀を残されたまま生き残った男の証言らしい。

しかし、その生き残った男も短刀の刃に塗られた遲効性の猛毒で

絶命したらしく、実質的にはその女にちょっかいを掛けて生き残つた者は居ないとのコト。

そんな馬鹿な話があるかと一笑に付した他のグループを、俺の持つ道具と同種の物を片手間に弄る女が殺すのを、噂の真相を確かめようと監視していたウルパソは目撃したと言つのだつた。

名前と年齢は共に不詳。狐の頭部を模つた面で顔を隠した小柄な……亜麻色の髪の女。

必ず最後の一人の腹には短刀を残し、一方的な蹂躪を笑つて愉しむ彼女に関わらない事にすると言うのが、『危ない橋は渡らねえ。安全な橋を俺達が建てる!』をモットーとする彼らの盗賊団が出した結論らしい。いや、建ててどうするの。

それにも……何、その怖い女。亜麻色の頭髪と腹を刺すつてだけで、脳内の危険センサーが全力で警笛鳴らしてゐるよ。

これだけではとても判断出来ないが、……他にもプレイヤーが?……もし、俺の知つてるプレイヤーとかだったらどうじよつ。

凶器は多分メデキア・ククリかな? 狩場に因つては魔物がポロポロ落とすから、俺のインベントリ内にも大量の在庫が残つてるや。たまたま似たような道具を持つてゐた現地人の危ないお姉さんでした な可能性も捨て切れないが、フランチエスに戻つたら、ギルドでガアヴのおっさんに聞いて見るといよ。

あの人は夕方頃からあそこで酒飲んでるし、その女の事が少しは分かるかも知れない。

「…………ヰさん、マークさん？」

「え、…………ああ。『うしたランス君』

息の掛かるほどの眼前に迫つた端整な顔を呆然と眺めると、彼はキヨトンと首を傾げた。

「あれ？…………えつと、そろそろ交代の時間なので、マークさんも休んで下さー」

その時、彼が「近いって言われないや…………」と然も不服そうに呴いたのを俺は聞き逃さなかつた。何を期待しとるんだ、何を。

「い」苦労さん。 飲むか？」

俺がウエストポーチから保温瓶取り出し、珈琲をカップに注いで差し出すと、ランス君はそれを受け取り類を綻ばせた。

「…………で、結局あの三人の中だと、どの娘が良いの？」

「な、なんですか。 いきなり」

俺の唐突かつ、やつくりとした質問に顔を赤らめて狼狽えるランス君に、単純な興味が三割と、暇潰しが一割と答える。

「じゃ、じゃあ……残りの六割はなんですか？」

「悪ふざけと、妬み、僻み。…………そしてやつぱり妬み」

「ほとんどが悪意じゃないですか！ 茶化さないで下をこよ、 もお」

「こんな感じで、 どうこも、 “短刀の女” の事が気になり、 すぐに寝付けそうになかった俺は、 ランス君と他愛もない会話をして過ごしてたのだった。

夜が明け、 朝靄も晴れやらぬうちに《グリイズ・ランナー》と呼ばれる、 カンガルーを少し大きくした程度の小型な騎竜に乗り、 ギルドから派遣された冒険者の一団が到着した。

驚く事に、 その中には俺の知っている顔も見て取れるではないか。

「……ぬ？ おおつ。フジミ殿、 フジミ殿ではないか、 あの節は世話になつたな！」

鎖帷子の上に白銀の鎧を着込んだ一メートル超の壯年男性がこちらに気付き、 からりと破顔して声を掛けて来る。

背には円錐形の突撃騎乗槍を背負い、 何より特徴的なのは下半身の四本の馬脚だ。

やはり『馬並』なのだろうか。 ……と下種な勘織りをしてしまつが、 俺は確認する勇気も度胸も持ち合わせて居なかつた。

「奇遇ですね。お元気そつで何よりです　」

短く刈り込んだ白髪に、目尻に皺の刻み込まれた灰色の鋭い双眸を持つ頬のこけた偉丈夫 人馬族ケンタウルスのジンバルト。それが彼の名だ。

……そういや、俺の名前が“フジミ”だと勘違いされたままだったっけ。

切り立つ崖に開かれた《盲目竜の顎門》への入口をしげしげと眺めるジンバルトさんに、名前の誤解を解きつつ聞いてみれば、どうやら彼はたまたま派遣隊を編成する際に、現場に居合わせた信頼の於ける冒険者だと言う事でこの依頼を頼み込まれたらしい。

『大方、即座に段取り出来る騎竜の頭数が足りなかつたのだろうな　で、人馬族のワシが通り掛かつた……と』 そう言つて両手を腰にあてて豪快に笑う彼は、相変わらず四十を過ぎた見た目の老練な印象と違つてフランクそのものだった。

ジンバルトさんも秘境の事が気になるらしく、後日編成されるであろう探査隊に立候補すると意気込んでいるみたいだ。

「しかし、御手柄だつたな。

あやつらはとにかく感が鋭く、撤退も早くてギルドもほとほと手を焼いていたそうだ」

捕らえた盗賊達、そして秘境について話すペルポイさんとギルド職員の女性とのやり取りを横目に、腕を組んだジンバルトさんはうんうんと首を上下に振り動かす。

確かに、引き際の判断が目茶苦茶早かつたな。ここではそういう

物なのかと思つたが、彼らは別段に諦めが早く、立ち直りも早い前向きな盗賊団だつたらしい。

そんなこんなで談笑を交えつつ、秘境発見のあらましを俺が搔い摘まんでジンバルトさんに話していると、騎竜に跨がつた冒険者の一人が彼を呼びにやつてきた。

「ジンバルトさん、そろそろ」

「ぬ、うむ。……さて、引き渡しも終えたよつだし、盗賊達を護送せねばな。

お主らの探索に、天空神エル・ファルスのご加護があらん事をファーディ。

「一キ殿、また縁があれば再会しよつぞ」

彼は十字を切る様な形式の祈りを捧げると人好きのする笑顔を浮かべて踵を返し、他の冒険者達と盗賊を引き連れて行つてしまつた。

……ん？ そういう、ランス君とトリス嬢の姿が見えないな。こんな朝つぱらから逢い引きでもあるまいに。

「なあ、アグ。あの二人は？」

起き抜けで、サイドにまとめていた桃色の髪を下ろした状態のアグに訊ねると、彼女は大きく伸びをしてシャツの隙間から白い肌と臍を覗かせる。

「うん？ ああ。何やら慌てて朝食の魚を捕つて來るとかで小川の方に向かつて行つたが……」

きつと、うつかり足を滑らせて川に落ちた揚句、揉め事と一緒に濡れて帰つて来るんじゃないか？ 多分。 と、付け足してアグは頭部のアホ毛を摘んで位置を正し、口に白いリボンをくわえて髪を結わえ始めた。

なんか、またえらく具体的な内容だな……。

ま、とにかくにも、盗賊はこれで一件落着。後はダンジョン攻略を怪我なく終わらせて依頼達成。見事クエストクリアって所だな。盲田竜の顎門は全三階層。依頼の拘束期間は三日の予定だったが、今日中にも攻略は終わるだらうと思つ。

野営も新鮮だけど、ひ弱な現代っ子としては柔らかいベッドが恋しいし、気張つて行くとしますかねー。

それから程なくして、びしょ濡れとランス君とトリス嬢が、必死の形相で狼王と一緒に帰還なさつたので俺達は朝から豪勢な食事を取りることが出来たのだった。

朝からステーキもどうかと思つたが、これがあつさりとしていて中々に美味い。

少しばかり肉を分けて貰つてネルの土産にでもするとしよう。

ぼんやりと発光する魔法陣の敷かれた袋小路。外と比べるひんやりとした洞穴内の最奥に鎮座する祭壇の前に俺達は集つた。

赤銅色の無駄な装飾品がない質素な祭壇上には觀音開きの匣^はが備えてあり、それを開くと“いかにも”な窪みが縦二列、横三列の、計六つ現れる。

「 わあ、監さん準備はよろしいですかな?」

ペルポイさんが青い瞳をキラキラと輝かせながら、昨晩聖木に実った橈円形の赤い果実を懐から取り出した。

秘境に特別な思い入れのある彼にとつて、この冒険に対する意氣込みも一入なのだろう。

彼の問い掛けに俺達は一様に頷き、果実を取り出す。

ペルポイさん、トリス嬢^{……}と順番に果実を匣に備えて行き、俺が最後の一つを窪みへと納めた。

グウン……ッ。

虫の羽音の様な低いノイズ音と共に魔法陣が一際強く輝き、足元に敷かれたモノと同じ様な幾何学模様の描かれた魔法陣が天井に出現する。

3D映像の如く立体化した魔法陣は上と下で互いに逆回転し、洞穴の中間部で交わって凝縮。袋小路はまばゆい光りに包まれ、俺達の背後……ちょうど祭壇に對面する形で岩壁に“穴”が現れた。

直径が凡そ一メートル程なその穴の表面は、シャボン玉よじく
虹色に輝く膜で覆われ、幻想的な雰囲気を醸し出している。

「おお、これが秘境の門……！」

「……」一ら、ウエン。危ないから一人で入っちゃダメだよ？

興奮からか、頭上のハンチング帽を脱いで握り締め、胸を押されるペルポイさん。アグは門の膜を口を真一文字に結んだままに恐る恐るつつくウェンの手を繋いで宥めている。

「わあ……綺麗だね、トリスちゃん！」

「えっ、あ。……う、うん」

珍しくはしゃぐラヌス君に両手を握られ、伏し目がちに照れるトリス嬢。なるほど、さりげないボディータッチか……ッ。

ヴォオオオオ……。

なんとも説え向^{あつ}きにこれから探索に臨む俺達を招き入れるかの如く、洞穴の隙間から風が吹き込んで顎門^なが哭^ないている。

あ、ここから先は気を引き締めて行かないとな……忘れてたけど俺、レベル低いまだまだわ……。

さて、何はともあれ、いよいよ俺達の盲田竜の顎門攻略が始まつたのだった。

2.1・気になる疑問と呪りない覚悟（後書き）

久々のケンタさんですが、本格的な出番はもう少し先になりそうですね。

お久しぶりです。

えらく予定が狂っちゃいましたが、要望の多かったアーノ子のお話です。

二万P突破の記念のつもりが遅くなってしまい申し訳ありませんでしたm(—)m

諸国から幅広い交易品や商人が集い、『探し物ならフランチエスヘ』とまで謳われる商業都市の西部から、国境沿いの大河にまで広がるクレイル樹海。

“狼王”と呼ばれる大狼が率いる群れが跋扈するこの樹海には四季折々の果実を実らせる木々が自生し、中心地には“歎きの空洞”と呼ばれるダンジョンがあつたり。“狼王”的繩張りにさえ足を踏み入れなければ、駆け出し冒険者にとって手頃な狩場となつている。

そんなクレイル樹海の一角で、身の丈に余る幅広長剣ブロードソードを携えた小柄な少年が魔物と対峙していた。

彼の名はネル。今年で十三になる“訳あり”な自称冒険者の少年だ。

頭部には額を覆う様にして焦げ茶色の布を巻き付け、簡素な布の服の上にはほつれ気味な若草色の外套。

長めの揉み上げにピンと外側に跳ねた濃紫の頭髪に薄灰色の双眸。跳ねた頭髪と相俟つて少年の大きく吊り気味な双眸は、見るものに小生意氣そうな印象を与える。

「……なんだよ。オレは今、機嫌が悪いの！ 用がないならあっち行けよ」

じいと己を凝視する存在に業を煮やしたネルが服の裾を握りしめて魔物を見遣る。

するとネルを獲物と見定めたタルカスと言う枯木の魔物は、かたんことんと乾燥した生木を打ち合わせたかの様な小気味よい音を鳴らして一歩ずつ近付いてくる。

「ふんっ。そっちがその気なら……お前なんか薪にしちゃうからな！ べつだ」

ネルは鼻を鳴らして悪態をつくと、右腰に佩びた愛剣を多少もたつきながらも抜き放ち構えた。

「……迷つた

その後も魔物と数回の交戦を繰り広げたネルは、未だに当てもなく藪を掻き分けて樹海をさ迷い続けていた。

歩く度に右腰に佩びた愛剣はずり下がり、途中で立ち止まつては何度も剣の位置を修正している。

「……なんだよ、もーつ。

それもこれも全部『一キのせいだ！……ばか。ばあかっ』

ネルは頬を膨らませて服の裾を掴むと、路傍に転がる石ころをブーツの爪先で思い切り蹴飛ばす。

彼が何故これ程までに『立腹なのかと言つと、答えは至極単純。

本来ならば、『一キが秘境探索に赴いている間に他で臨時のパーティを組み、この樹海にある“歎きの空洞”に向かははずだつた。しかし、依頼の待ち合せ場所に赴いた所で先方から『実力不足』を理由に同行を断られてしまったのだ。

“石無”と呼ばれるネルや『一キの様な非ギルド登録者』の『言う扱い』は別段珍しい事でもないのだが。

本当の理由はネル自身の容姿が実年齢より更に幼く見えるのはもちろんの事、相手方のパーティに多種族を蔑む排他的傾向にあるエルフが一人居た事だろう。

『詳細な募集内容を明記していないとは言え、お前の様な子供に前衛を任せたとあっては一族の恥だ。

いつも一緒に居る物好きな人間とままで遊びでもしているのがお似合いではないか?』

これは、リーダーの高慢そうなエルフ男の言だ。

いつもコーキとギルドに換金に向かっているので、リーダーのエルフも一人の事を見知つて居たのだろう。

ネルは自分の事だけではなく、一緒に居たコーキの事まで馬鹿にされた様な気持ちで腹が立ち、エルフの男から迷惑料として相手から差し出された僅かな金銭を突き返し、怒りのままに西門から飛び出して来たのだった。

「……ホントはコーキも迷惑してるのかな?」

ネルは先刻まで荒々しく進めていた歩を止めて咳くと、そつと剣の鞘を撫でた。

〔己〕にこの剣を託した友人に似た容姿と、自身の“眼”で直視たコーキの暖かい雰囲気に惹かれ、半ば強引に同じ宿に飛び込んでかれこれ一週間が経つ。

特にこちらの事情を深く訊ねる訳でもなく、自分を拒絶する様子もなしにするりと受け入れてくれたコーキに甘えっぱなしだったが、内心ではどう思つているのか不安で心細い。

最初こそはダンジョン進入と言う目的があつて声を掛けたのだが、今となつては彼と友人としてこれからも長く行動を共にしたいとネルは思う。

自身の生い立ちや本当の目的はまだ明かせないが、いつか打ち明けられる日が……。

「……ううん。オレの問題だもんな、コーキは巻き込めない

ほつと物憂げに息を吐き、ネルはよいしょと鞘から愛剣を抜き放つて正眼に構えた。

そのまま剣を軽く振るつて切つ先を地面に突き刺すと、ネルも剣と対面するようにして地面に座り込む。

「なあ、お前はどう思つ? 仇討ちなんて馬鹿だと思つつか?」

その問いに意思の無い剣が答える筈もなく、樹海にさあと一陣の風が吹きすぎた。

今季節は温暖な春だ。

でも、なんだかその風は肌寒くて冷たい。

ネルは素肌が顯わになつた両腕を撫でる様にして抱き、剣の腹に寄り掛かつて額をコツンとぶつけた。

「……ダメだ。こんな気分の時には美味しい物を食べるに限るな、うん!」

ネルは何かを思い出したと言つた具合に勢い良く顔を持ち上げると、肩に下がった鞄から花の刺繡がついた布を掛けられたバスケットを取り出す。

隙間から仄かに食欲のそそる良い匂いが溢れ出す布を持ち上げると、小麦色に焼けたカリカリのパンに挟まれ、甘辛いソースが絡められた鶏肉の芳醇な香り。

そして、肉と一緒に挟み込まれた赤や緑の鮮やかな野菜がネルの目を輝かせる。

「オレの大好物のペイルバードの甘辛煮つ！……と、一緒に挟まつてるのはオレの苦手なコロロの葉……」

それはネルが今お世話になつてゐる宿 雪鳥の止まり木の若女将、フランが今朝持たせてくれたものだつた。

自分の好物と苦手な野菜との共演に『惑う』ネルだが、野菜を残すとベジタリア星と言つ別の惑星の王子に呪いを掛けられ、漏れ無く短足になる。

しかも呪いはそれだけに止まらず、最後には生え際がエム字になる……等と言つ『コーキの根も葉も無い』太話を思い出して身震いする。

話の締めにはいつもの様に、『俺なら泣いちゃうね。そう、俺の知り合いにも』と、額に手を当てて嘆き悲しむコーキの話に出てくる知人の悲愴な姿を想像してネルは……。

「やだ。絶つ対、やだ。

もしかして、前に話してた重い剣持つてた人と同じ人なのか？ 最後には足が無くなっちゃうんじゃ……」

「コーキのほら話を本気で信じるネルは両手を合わせ、憐れなその知人に黙祷を捧げてからサンドイッチを一口。

しかし、不思議な事にいくら頬張つても苦手なコロロの葉特有の

苦みは一切感じられず、ネルは怪訝そうに小首を傾げた。

「んっ、そっか。フランさんが濃い味付けにしてくれてるんだな」

若女将の心遣いに感謝しつつ、早くも一切れをぺろりと平らげた
ネルが次に手を伸ばした時、バスケットの底に包み紙に包まれた何
かが入っている事に気付く。

なんだろうと開いて見ると、その中には白に赤コントラストの染
える渦巻き型の棒付きキャンディが三つ。そしてメモ用紙が添えら
れていた。

「おっ、ペロキヤン……。なんだこれ、コーリから……？」

無地のシンプルなメモ用紙には、箇条書きで記したためてある。

ネルへ。野菜、ちゃんと喰つたか？ フランさんに頼んで一
緒におやつを入れておいた。

飴は一日、一本まで。口に銜くわえたまま走り回らないよーにする事。
怪我したら渡しておいた薬を飲む事。腹を出したまま寝ない。

……等など、まるで子を心配する親の書き置きの様な文面を見て
ネルは可笑しくて噴き出してしまう。

「ふふっ、母様みたいだ。変なの」

ネルは平穏だった日々を懐かしむ様にメモを一頻り眺めると、そ
れを丁寧に折り畳んで懷にしまい込んだ。

「よし、残りを喰つたら鍛練の続きを……？」

ふと視線を下に戻してみれば、先程まで膝元にあつたバスケットが忽然と消えている。

「おお、何処行つた？！」

疑問符を浮かべたネルが辺りを見回してみると、少し先の木陰で白い小さな生き物がバスケットに顔を突っ込み、中を物色しているではないか。

「アイツは……クレバーエイプ？ でも、それにしては毛の色が普通と違うな」

凡そ三十センチにも満たぬであるう小さな体躯に、尻尾の先が二又に分かれた短毛の子猿。

それは特殊に進化した尻尾に魔力を用いた弦を具現させ、硬い木の実や石ころ、稀には魔力球などを射出して遠距離攻撃を仕掛けてくる臆病な猿の魔物だった。

尻尾を手足の如く器用に扱い、まるでスリングショットで攻撃を仕掛けてくる様に見える事から、別名“森の射手”とも言われている。

だが、一般的なクレバーエイプの体毛は紫色。ネルの前に現れたこの魔物の体毛は白雪の様に白く、何より美しかった。

「すつげー、ちょっと綺麗かも」

初めて見る特異な魔物に目を丸くして喜ぶネルだったが、クレバーエイプの口元についた“茶色い染み”を口にしてポカンと口を開く。

「……あ～ッ！　おまつ、それはオレんだぞー。」

「キューイ？」

ネルの悲鳴にも似た絶叫に氣付いたクレバーエイプがきょとんと首を擡げる。

その顔は眉毛の位置にある灰色の模様が『ハ』の字に垂れ下がつていて、とても愛嬌があるではないか。

「あ、う。か、可愛い。」

「じゃなくてだな！　それはオレのなの！　今すぐ返せ！」

子猿の愛くるしい姿に思わず頬を綻ばせるネルだったがハツと我に返り、バスケットを力強く指差す。

しかし、当のクレバーエイプはそんな事お構い無しと言つた具合にネルのおやつであるペロペロキヤンティを、なんと丸々一個頬に詰め込んでしまつたのだ。

「ああ～！　オレのペロキヤン……。痛つ？ー。」

田の前でお口の恋人を奪われ、情けない声を上げて虚空をつかむネルだったが、そんな哀れな彼の額には子猿の容赦無い追い撃ち（木の実。　とっても硬い）が降り注ぐ。

泣きつ面に蜂とはまさにこの事だらうか。木の実が額にペチンッ

と音を立てて命中したネルは膝を折り、力無く地面に突つ伏す。

「…………」

最早、誰が見てもこれまでかと思われた。

……だが、ネルの心はこれしきの事では折れなかつた。寧ろ心は沸き立ち、打ち震えるのだ。

「……ふつ、ふふ。上お等だあ！」

お前なんか取つ捕まえて喰つてやるつーー！」

「キュツ？！」

肩を震わせ、ゆらりと幽鬼の如く立ち上がつたネルの虚ろな笑みを見たクレバーエイプは余程身の危険を感じたのか、全身の毛を逆立てて樹海の奥へと逃走を始める。

「逃がさんつ、オレの昼飯い！！」

素早く愛剣を引き抜いて鞘に納めたネルは途中で放置されたバスケットを拾い上げ、藪の中へと飛び込んだ。

げに恐ろしきは人の執念。食い物の怨みのなんと恐ろしい事か。

ネルの辛く長い戦いが今、幕を開けるのであつた。

閑話・一曰三。こちー（後書き）

タイトルの通り、続いちゃいます。

その2の投稿は文章が整い次第2～3日中にじゅ出来ると思います。

感想、応援メッセージの返信が出来て居ませんが、嬉しく拝見させて頂いてます。

お返事は次回の更新時に必ずするつもりなのでどうか見捨てないで下さい。おー

「んん……あの猿何処行つた？　あーあ、走つたら余計体力使つち
まつたなあ」

ネルは衣服についた葉っぱを払い落としながら息を吐く。周囲を
見渡しても何処までも同じ様な景色が広がるばかりだ。

唯一の変化と言えば、辺りに靄が立ち込めて来た事だろうか。どうやら氣付かぬうちに樹海の深域の方にまで踏み込んでしまついたらしい。

「あちゃー……。狼の縄張りに入つちまつたかも」

頭に血が上つて一心不乱に駆け出して来たネルだったが、自分の置かれた状況に気付き、背中に冷たい汗が伝う。

森の浅域を徘徊する鈍闇な魔物なら一、二匹が同時でも、重い剣を振り回してなんとかなる　だが、相手が深域をうろつく俊敏な狼なら話は別だ。

奴らは動きが速く、未熟なネルの剣技で急所を狙うのは難しい。なにより、基本的に一匹以上のチームで行動する狼を相手にするのは分が悪かった。

体調が万全の状態なら“ちょっとした特技”で多少周りを囲まってしまっても打破する事ができるだろう。

しかし、ろくに食事も取れてない状況下で気力の消耗が激しい特技を扱うには今の状態だと不安が残る。

「つたく、今日は良い事ないなあ。早く帰つて来いよなー……ばか

ネルは男の浪漫とやらを求めて樹海の奥へと赴いた連れ合いの顔を思い浮かべてぼやく。

長らく一人で放浪していた為に独りきりは慣れっこだと思つていたが、どうにも物足りない。

無邪気に笑い、鼻歌混じりで脳天気に出発して行つた男の事を考えるとなんだか。

「……ムショー」イライラする。決めた、今日はもう帰ろー。

今日はどうにもツイてない。こんな日は街で美味しいものでも食べて過ごすに限る。

そうだ、東門の屋台で買い食いしよう……現在の懐事情と相談して帰還を決意するネルだったが、ここでふと重要な問題に気付く。

「……でも、その帰り道がわかんねえんだよー！」

その時、右へ左へと頭を抱えて唸るネルの耳元へ聞き覚えのある動物の鳴き声が流れ込んで来る。

それは間違いなく先程ネルを襲つたクレバーエイプの物だつた。すかさず鳴き声に反応したネルは帰還の事はさておき、声のあつた方へと息を殺して慎重に歩み寄つた。

「うん？ なんか様子が変だぞ」

ネルが藪の隙間から顔を覗かせ様子を窺つて見ると、そこには先程の白いクレバーエイプが一匹と鋭い牙を剥いて唸るスレイブウルフが一匹。

どうやらこのスレイブウルフ達は、件のクレバーエイプを喰らうつもりらしい。

周りに身体の小さなクレバーエイプが身を隠せる遮蔽物はなく、足に血を滲ませた手負いの子猿が牙と爪をぐぐり抜け、木の上まで逃げ遂す事は困難に思える。

既にクレバーエイプは逃走を諦め身体を丸めて蹲つうすくまているが、スレイブウルフ達は攻撃の手を緩めようとはしない。極限まで獲物を弄ぶつもりのようだ。

所詮は魔物同士の小競り合い。弱つた所で漁夫の利を得るのが通常の冒険者が取りうる定石だ。なんら恥すべき行為ではない。

しかし、弱りきつた小さな獲物を面白半分にいたぶるのが気にならない。気付けばネルは剣を抜き、スレイブウルフの前に飛び出していた。

「お前、さつきからギャンギャン『うわさいぞー』って言つか『イツはオレの獲物だ、こらあ！』

あわよくば……とネルが手前のスレイブウルフに放った側面からの奇襲はするりと躊躇され、虚しく空を切る。

「なら、これならどうだ」

ネルは初撃を躊躇しても慌てる事無く前へ踏み込み、着地点を狙つて剣を切り返し、逆袈裟斬りを放つ。

だが、その斬撃も素早いスレイブウルフの頬を掠めるだけで致命傷には至らなかつた。

「もう！ 避けんなよっ」

『グルルルッ』

頬を裂かれたスレイブウルフが突然の闖入者を恨めしげに見遣る。

ネルとしては最初の奇襲のうちに一匹を仕留めたかったが、上手く行かずに失敗。相変わらず一対一のままで戦況は芳しくない。

口では強がつて見せるが剣を握る手にも自然と力が入り、身体が強張る。

そこにネルが緊張した隙を突き、もう一匹のスレイブウルフが脇

から飛び掛かって来た。

「うわっ？！」

咄嗟にスレイブウルフの体当たりを剣で受けるが、体重の軽いネルの身体は浮き上がって倒されてしまう。

そして、その衝撃で剣を手放してしまったネルにスレイブウルフが飛び掛かる。

「……やっぱ

鋭い牙の立ち並んだ死の顎門が喉元に迫る絶対絶命の状況下で、ネルの脳裏に浮かんだのは走馬灯でも神への祈りでもなく、ある男の一言だった。

『困った時は』

「痛そうな所を思いつきり蹴つ飛ばせ！」

無我夢中で放った蹴りは牙を剥いたスレイブウルフの大口を捉え、灰色の狼は短い悲鳴を上げて宙に舞う。

それは、ネルの目の前で身長の数倍もある巨大な蛇すらも杖で薙ぎ払い、蹴り倒した事のある『まほーつかい』の言葉だった。

「ど、どーだ。こんな時の為に底の厚いブーツを履いてるんだゾ！」

ネルは拳を振り上げて勝ち誇るが、その声色は若干上擦っている。

果たして真相の程は定か（低身長を「まかす為）では無いが、飛び掛かって来たスレイブウルフ自身の体重が乗ったネルの蹴りは抜群の効果を示したようだ。

思わず反撃に手酷い痛手を受けたスレイブウルフは追撃を止め、ネルと距離を取る。

「ゴーキみたいに、一撃でぶつ飛ばせれば楽なのになあ……」

剣を拾い上げたネルは背後で蹲るクレバーエイプを横目で見遣つた。

クレバーエイプは未だに身体を丸めたまま身動き一つ取らないでいる。すぐにスレイヴウルフを倒すのは難しい。

……しかし、このままだと瀕死のクレバーエイプは直に死んでしまうだろう。

ネルはエルフの男に言われた『実力不足』の言葉が頭を過ぎり、歯噛みする。

「……そんなのわかつてゐる。だから、オレは 」

八方塞がりの最中、ジリジリと確実に距離を詰めてくるスレイヴウルフにネルが意識を集中させた時の事だった。

突如謎の風切り音と共に空に閃光が走り、大きな炸裂音が耳を打つ。

「え？ な、何だあ！？」

突然樹海に鳴り響いた轟音に羽を休めていた鳥達は飛び立ち、スレイヴウルフは顔を見合させて狼狽える。かく言うネルも、事態が把握出来ずに呆然と空を見上げる事しか出来なかつた。

『ギャウッ！』

『ガルル……』

得体の知れない不可思議な現象に一匹のスレイブウルフは唸り声を上げ、ネルを疎ましげに睨みつけながら數の中へと消えて行く。

その後ろ姿をクレバーエイプを抱き上げたネルが見届けていると、一拍の間を置いて再び天に昇る風切り音。そして色鮮やかな光りの花々が蒼穹に咲いた。

「……花火、か？ とにかく助かつた……。お前、ツイてるな」

ネルはクレバーエイプを膝上に寝かせると、すかさず「一キから“緊急時用”と渡された蒼い液体で満たされたビンのコルクを引き抜き、恐る恐るクレバーエイプの口へと当て行つた。

「ほら、大丈夫か？ ゆっくり飲めよ」

ネルが優しく促すと、クレバーエイプは細長いビンの半ばまでを満たす液体を少しづつではあるが飲み干して行く。

衰弱は想像以上に酷いものだつたが、この薬は余程効能があるのだろう。

ネルの心配も余所に傷口は見る見るつりに塞がり、土氣色だった
顔色も徐々に回復傾向にあるようだ。

浅く不規則だった呼吸も落ち着きを取り戻し、ネルはホッと胸を
撫で下ろす。

まさか魔物を助ける事になるなんて……今回だけだぞ。

ネルは寝息を立てるクレバーエイプの鼻を指先で擦り、そう思う
のだった。

「キュウ……」

白いクレバーエイプが薄目を開き、つぶらな瞳を瞬かせる。

それに気付いたネルは膝の上で覚醒した子猿を顔の高さまで抱き
上げ、極上の笑みを浮かべた。

「おっ。気が付いたか！ よかつたなあ、おま」

笑顔を浮かべるネルの額には、クレバーエイプの尻尾から繰り出

された垂直チョップがピシリと炸裂。

「痛つてえ……。何すんだよう」

突然人間に抱き上げられてクレバーエイプは興奮したのだろう。ネルの手からスルリと抜け出し、茂みの中へと跳ねて行ってしまった。

その様子をネルは打たれた額を摩りながらも、嬉しそうに微笑む。

「ま、いつか。元気になつたみたいだし。

……あつ。でも薬無くなつちまつた。コーキの奴、怒るかな……」

空になつたピンを腰のポーチに捩込んだネルはキヨロキヨロと周りを見渡し、藪に手を伸ばす。

今度こそ街に戻ろいつ……ネルは茂みの中に隠して置いたバスケットを拾い上げ、勘の赴くままに街の方向へと進みはじめた。

異常に気付いたのは歩き始めて程無くしてからだ。

生い茂る雑草を踏み締める音が、自分以外にも後からついて来ているではないか。

ネルが立ち止まればその音もぴたりと鳴り止み、歩き始めると再び一定の感覚から音がついて来る。

大方、ついて来る者の正体は日星がついていたのだが、流石に我慢の限界に来たネルが後ろを振り返ると、白い綿飴の様な子猿がネ

ルと同じ様に後方を振り返っていた。

「……」

「……」

ネルがクレバーエイプに向かって一歩踏み出すると、クレバーエイプは同じだけ後ろに下がる。

再び一人と一匹の間に静寂が流れ、今度は逆にネルが下がって見ればクレバーエイプは近付いて来た。

ジイイッと互いの視線が交差し、頭上では梢が風に揺られてサラサラと踊る。

このままでは埒が明かない。

静寂を破り、先に動いたのはネルだった。クレバーエイプが後退るのもお構い無しに一步、また一步と進み。

「がお～っ！ 嘰つちや～っ～」

「キュイイ～？！」

ネルが両手を広げて目一杯脅かして見せるとクレバーエイプは目を剥いて飛び上がり、木陰に隠れる。

その反応に確かな手応えを感じたネルは、胸を張つて誇らしげに威張るのだった。

「へへん。勝つたぜ」

だが、当のクレバーエイプは幹の後ろから顔を覗かせ、未だにネルの様子を怖ず怖ずと窺っている。

折角、食べ物の恨みは忘れて見逃したと言つたのに一体全体なんなのだろ？？

ネルが困惑氣味に自分の姿を足元から上を順に見遣ると、ふと右手に持つたバスケットに皿が止まつた。

「……なんだよ。まさか、オレのペロキヤンを狙つて？！　ダメだ！　絶対やらないぞっ」

これ以上おやつを取られてなるものかと、バスケットの口を固く閉じて身体に抱き寄せるが、クレバーエイプは不思議そうに小首を傾げるだけだ。

どうやらクレバーエイプはネルに危害を加えるつもりは無いらしい。ネルは審意が無い事を察するとフムと小さく顎を引いてしゃがみ込み、手を差し出して見た。

「キッ？！　キュウ……」

木の影から様子を窺っていた子猿は身体を僅かに跳ねさせると、恐る恐るとネルに近寄つて来て。

「うん？　なんだ、コレ。……くれるのか？」

クレバーエイプは両手で大事そうに抱えていた“何か”をネルの手に添えて一鳴き。

ネルは小石や鉱石等の不純物が多く不着した石の塊をまじまじと見つめ、頬を綻ばせた。

「そつか、お前の宝物なんだな。ありがとな」

ネルに頭を撫でられたクレバーエイプは擦つたそうに両手を細める。自分を助けてくれた人間に喜んで貰えて、子猿はとても嬉しそうだ。

ネルは愛らしいクレバーエイプを抱き上げ、ほお擦りをしながらも思つ。

「……猿つて喰えんのかな」

「キュイッ？！」

ネルがポツリと漏らした一言にクレバーエイプが毛を逆立てて飛び跳ねる。しかし、ネルに両脇をしつかりと掴まれて抱き上げられ、満足に動く事が出来ない。

クレバーエイプの慌てるその様が可笑しくて、ネルは破顔して目尻を拭う。

「あはは、冗談だよ。

なあ、お前樹海の出口わかるか？……迷っちゃってさ

服の裾を掴んでネルが気恥ずかしそうに訊ねるとクレバーエイプはネルの腕から飛び降り、少し先へ進んでピタリと立ち止まつてこちらを振り向く。

まるで“ついて来い”と、言いたげなその仕草にネルは頷き、歩み出す。

この魔物との交流を「一キが帰つて来たら自慢するんだ……と彼の驚く顔を想像してはにかみ、子猿の後に続くのだった。

闇話・一日目。ニ！（後書き）

ネルに友達（？）が出来ました。

コーキ達がサクサク倒せた狼もネルには強敵だつたり。

次回からは再び一人称で本編に戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1437t/>

Heretic

2011年10月5日20時36分発行